

青森市埋蔵文化財調査報告書第54集-2

野木遺跡

発掘調査報告書Ⅱ

(調査概要・環境・縄文時代・弥生時代編)

平成12年度

青森市教育委員会

青森市埋蔵文化財調査報告書第 54集 - 2

野 木 遺 跡

発掘調査報告書

(調査概要 環境 縄文時代 弥生時代編)

平成 12年度

青森市教育委員会

序

青森市は、北に陸奥湾を望み、南に八甲田山を仰ぐ人口約30万人の街であります。

今もなお祖先が残してきた自然環境が保全されるなか、現代に生きる私たちの生活の利便性をはかる上で各種開発行為が行われつつけられています。

開発行為にあたって、予定地内に祖先の残した貴重な歴史遺産の一つである遺跡が所在する場合、保護ならびに保存の方策と開発行為との円滑な調整が必要とされます。

青森市教育委員会では、平成9年度から同10年度にかけて青森中核工業団地造成事業に関して、開発予定地内に所在する新町野遺跡ならびに野木遺跡について青森県埋蔵文化財調査センターとの合同で発掘調査を実施いたしました。

本書は青森市教育委員会が実施した野木遺跡の発掘調査の成果をまとめたものです。

広大な丘陵から数多くの平安時代の住居跡、さらには土器生産ならびに鉄生産に関する貴重な資料を得ることができました。

この成果は、青森市南部の八甲田山麓における先人の営みを知る上で貴重な資料となるものと思われます。

本書が埋蔵文化財の保護・活用ならびに地域の歴史学習等に役立つことができれば幸いと存じます。

最後になりましたが、関係機関並びに各位からのご指導、地元各町会からのご協力、さらに工事主体者である地域振興整備公団のご理解に対しまして厚くお礼申し上げます。

平成13年3月

青森市教育委員会
教育長 池田 敬

例 言

1. 本書は、青森県青森市大字野木字山口・大字合子沢字松森に所在する野木遺跡（青森県遺跡番号 01 210）発掘調査報告書である。
2. 本書に記載される内容は、青森市が地域振興整備公団の委託を受け、平成 9・10年度に青森市教育委員会が発掘調査を実施した地区についてまとめたものである。
3. 調査は、青森中核工業団地造成工事に伴う発掘調査として平成 9・10年度に実施した。二カ年次での総調査面積は 69 900㎡である。
4. 野木遺跡は、平成 7年度から青森中核工業団地整備事業に係る試掘調査を青森県埋蔵文化財調査センターで実施しており、平成 8年度から地域振興整備公団の委託を受け青森県埋蔵文化財調査センターが一部の地区について発掘調査を実施している。平成 9年度から青森市教育委員会が発掘調査に参加し、合同の発掘調査を実施した。調査担当地区については協議の上、野木遺跡南側部分の遺構密集地区を中心とする地区を青森県埋蔵文化財調査センターが、北側から南側の遺構密集地区に至る地区について青森市教育委員会が調査担当となっており、発掘調査成果の報告についても調査担当毎に報告している。

青森県埋蔵文化財調査センターの担当地区については、平成 9～11年度にそれぞれ報告書が刊行されている。（青森県教育委員会 1998・1999・2000）

5. 本報告書は当委員会が担当した新町野遺跡発掘調査報告書 と併せて 6 分冊構成とした。内容は、第 1 分冊 = 新町野遺跡発掘調査報告書、第 2 分冊 = 野木遺跡発掘調査報告書（調査概要 環境縄文時代 弥生時代編）、第 3 分冊 = 野木遺跡発掘調査報告書（平安時代遺構編 1）、第 4 分冊 = 野木遺跡発掘調査報告書（平安時代遺構編 2）、第 5 分冊 = 野木遺跡発掘調査報告書（平安時代遺物分析 総論編）、第 6 分冊 = 野木遺跡発掘調査報告書（資料写真図版編）である。本書は第 2 分冊目にあたる。
6. 基準点測量・グリッド杭打設・空中写真の一部は梶みちのく計画に、ラジコンヘリによる空中写真測量については梶シン技術コンサルに委託した。
7. 本書の執筆・編集は、青森市教育委員会が行い木村淳一・設楽政健・児玉大成・松橋智佳子が担当した。執筆分担については、第 1 章ならびに第 2 章第 3 節については木村が行い、第 3 章第 5 節の鉄製品・鉄滓・羽口の整理方法ならびに第 4 章については設楽が行い、第 3 章第 3 節 2 石器については松橋が行い、第 5 章については児玉が行った。編集については木村が担当した。
8. 調査に関わる資料は、一括して青森市教育委員会が保管している。
9. 発掘調査の実施にあたっては、地元町会の多くの方々からご協力をいただき、また次の諸氏・諸機関からは、発掘調査の実施並びに発掘調査報告書作成にあたってさまざまなご指導・ご教示・ご協力を賜りました。厚く御礼申し上げます。（順不同・敬称略）
国立歴史民俗博物館・青森県教育庁文化課・青森県埋蔵文化財調査センター・青森県立郷土館・岩手県立博物館・秋田県埋蔵文化財センター・（財）福島県文化センター・（財）栃木県文化振興事業団・（財）新潟県埋蔵文化財センター・（財）長野県埋蔵文化財センター・八戸市教育委員会・秋田市教育委員会・秋田城跡調査事務所・金沢市埋蔵文化財センター・羽茂町教育委員会・旭川市教育委員会・奈良教育大学・富山大学・八戸工業大学・小林克・鈴木靖民・三浦圭介・工藤大・成

田誠治・成田滋彦・相馬信吉・白鳥文雄・木村鐵次郎・中嶋友文・田中珠美・齋藤由美子・赤羽真由美・神康夫・奈良岡淳・小田川哲彦・木村高・中村哲也・中村美杉・浅田智晴・平山明寿・齋藤正・相馬良仁・市川金丸・小口雅史・藤沼邦彦・鐘江宏之・中村大・藤沢敦・村中健・工藤清泰・榊原滋高・中田書矢・川村尚・小川忠明・春日真実・飯坂盛泰・渡邊朋和・立木宏明・小嶋芳孝・出越茂和・小西昌志・小松隆史・小松有希子・岩田安之・村上章義・高橋與右衛門・宇部則保・村木淳・大野亨・小谷地肇・古屋敷則雄・齋藤淳・佐野忠史・藤原弘明・渡部学・鈴木徹・柳沢和明・吉岡恭平・高橋保・磯村亨・泉田健・泉田純・上野修一・津野仁・塚本師也・大江正行・大澤正己・長谷川涉・小暮伸之・角田真也・寺島文隆・安田稔・能登谷宣康・野村忠司・佐々木健策・百瀬長秀・上田典男・青木一男・井上雅孝・利部修・高橋学・八木光則・菅原祥夫・小松正夫・日野久・西谷隆・伊藤武士・進藤靖・五十嵐一治・宮宏明・戸根貴之・友田哲弘

10. 屋外作業ならびに屋内作業従事者は次の者が参加した。(順不同)

(1) 屋外作業

白鳥建次郎・山田吉春・桜庭慶喜代・木村敬・長内勇人・西田リキヨ・神やゑ・西田スゲ・西田春江・高坂ハナ・奥崎とし子・神ふじい・山上ともゑ・阿保和子・野沢ミチエ・神きよの・坂本はるゑ・葛西ソウ・石井トシ・畑中キワ・山上ヤエ・中沢トミ・清藤ちか・宮崎てつ・川村つるえ・権元キヨミ・三浦郁子・高坂マツエ・富田静枝・高坂ちや・神ミヨ・三上くら子・山上みつよ・西田郁子・権元節子・佐々木ケイコ・永井カツエ・木村美津南・小川和子・倉光イツ子・川村光・横山涼子・清野千鳥・小川菊代・野村美央子・関口富士子・和田久子・五戸友子・桜田美和子・佐々木ヤス・古賀千夜子・斎藤時子・大見百合子・大坂千美子・柳川道子・三上良子・西田守義・鏡山武四郎・松本孝・桜庭潔・白鳥安範・梅田元信・工藤幸雄・三上幸悦・藤井ミチエ・大柳チヤ・西塚哲子・山崎ナミ・坂本和子・桜田チツヨ・田中成子・鈴木ウメ・青木マツ・中谷敏子・田辺りつ・花田千恵子・伊藤初枝・瀬川真理子・西充子・菅原節子・鹿戸京子・藤川恵美子・石岡文代・斎藤敬子・蝦名誠子・千葉弘子・坂本みち子・田辺桂枝・鷲尾智加子・三原夕夏・細川八重子・成田美津子・川越義清・川越昭子・木立土郎・高坂国光・山上リュウ・神千代・秋元はちゑ・平野淳子・福田栄司・福田さつき・加藤明子・加藤未希・村田宏志・坂下尚子・八城静江・古村幸美・成田孝子・川村正一・須藤慶一・木立竜也・佐藤満・渡辺みり子

(2) 屋内作業

(洗浄・注記・復元) 泉田富美子・小笠原久子・工藤伸子・倉内純子・紺野洋子・佐々木進太郎・澤田栄子・神敦子・田澤繁子・千葉弘子・細川八重子・若山真由美・渡辺みり子
(仕分け・収納作業) 猪股智子・小野みき・木村郁子・砂沢由紀子・高谷千香・竹内雅子・千葉恵美子・千葉美紀子・佐藤経子・神美雪・山田広美
(土器実測) 大坂千美子・小笠原裕子・土橋弘美・藤田ひろみ・堀内万里子・三原夕夏
(拓本) 倉内純子・神敦子 (石器・木器実測) 松橋智佳子
(鉄製品・鉄滓実測) 豊島厚子 (土製品実測) 坂下尚子・桜田美和子
(トレース) 内田祐子・斎藤美穂・土橋弘美・本多顕子・溝江由里子
(計測・入力・図版作成・編集補助) 鷲尾智加子

凡例

1. 図版番号及び表番号は、原則的に「第 図」「第 表」とした。

2. 遺構の掲載について

(1) 方位は全て真北である。磁北については西に約8度振れている。

(2) 各図の縮尺は以下の通りである。

1 50000 1 10000 1 7500 1 3750 1 1500 1 120 1 60 1 30

(3) 水平基準は海拔高をメートル(m)で表示した。

(4) 遺構の略号は、SI= 竪穴式住居跡・竪穴遺構、SB= 掘立柱建物跡、SK= 土坑、SD= 溝跡、SA= 柵列、SN= 鉄生産関連炉・焼土状遺構、SP= ビット、SX= 性格不明遺構・その他の遺構である。

(5) 遺構番号については、遺構の種別毎に番号を付した。具体的には遺構の略号・番号とした。

(例：第1号竪穴式住居跡= S I - 0 1)ただし、発掘調査時の遺構番号については調査時の事由により断絶し不連続であったため、本書において新たに編集し遺構番号を付している。なお、調査時の遺構番号との対応については資料編内の遺構観察表で表記している。また、遺物整理については旧番号ベースで整理を実施している。

(6) 本書で使われるグリッドの呼称については、先行して調査にあっていた青森県埋蔵文化財調査センターのものに準拠した。具体的には、南北方向に算用数字、東西方向にアルファベットを付し(例：MA - 300)呼称については、格子の北西隅の杭番号を使用した。

(7) 本書の土層の注記については、『新版標準土色帖』(小山正忠・竹原秀雄 1993)に準拠した。

(8) 遺構の規模については、基本的に長軸 短軸 深さをcmで表示した。このうち深さについては、遺構確認面からの計測値を記し、竪穴式住居跡内のビットの深さについては、床面からの計測値を記した。また、土坑内ビットの深さについては、底面からの計測値を記した。

(9) 本書の遺構図中で使用されるスクリーントーンの指示については以下のとおりである。

地山		炭化物	
	205		328
炉・焼土(被熱強)			
	320		
炉・焼土(被熱弱)			
	788		

4. 遺物の掲載について

(1) 各図の縮尺は以下のとおりである。

土器 1 3 石器 剥片 2 3 礫石器 1 4、1 8 土製品・石製品 1 3

(2) 遺物実測図の表現

土器実測の表現

- ・ 破片資料についても口径・胴径・底径いずれかが復元可能な資料については、径復元ののち反転実測を行っている。

石器実測の表現

- ・ 本書の遺物図版中で使用されるスクリーントーンの指示については以下のとおりである。

磨り



122

敲き



320

凹み



328

ポリッシュ



112

ハジケ



788

目次

序	
例言	
凡例	
目次	
図版目次	
写真図版目次	
第 1 章 調査概要	
第 1 節 調査に至る経過	1
第 2 節 調査要項	1
第 3 節 調査方法	5
第 4 節 調査経過	7
第 5 節 整理の概要ならびに本報告書の編集について	9
第 2 章 遺跡の環境	
第 1 節 遺跡の地理的環境	13
第 2 節 遺跡の歴史的環境	13
第 3 節 本遺跡内の基本層序について	18
第 3 章 縄文時代	
第 1 節 概要	21
第 2 節 検出遺構	
1. 竪穴式住居跡	21
2. 土坑	40
第 3 節 出土遺物	
1. 土器	61
2. 石器	102
3. 土製品	118
4. 石製品	118
第 4 章 弥生時代	
第 1 節 概要	119
第 2 節 出土遺物	
1. 土器	119

図 版 目 次

第1図 野木遺跡調査対象区	6	第39図 S I - 04・05	72
第2図 野木遺跡位置図	15	第40図 S I - 04・05	73
第3図 野木遺跡と周辺の遺跡位置図	16	第41図 S I - 06・07・08	75
第4図 基本層序	18	第42図 S I - 08	77
第5図 平成11年度試掘調査基本層序(13T)	18	第43図 S K - 04・09・10	78
第6図 野木遺跡北地区全体図	19	第44図 S K - 11	80
第7図 野木遺跡縄文時代遺構配置図	20	第45図 S K - 12・18・23・24	81
第8図 S I - 01	22	第46図 S K - 28・29	83
第9図 S I - 02	24	第47図 S K - 28・29	85
第10図 S I - 03	25	第48図 S K - 28・29	86
第11図 S I - 03	26	第49図 S K - 28・29	87
第12図 S I - 04・05	28	第50図 S K - 28・29	88
第13図 S I - 04・05	29	第51図 S K - 28・29	89
第14図 S I - 04・05	30	第52図 S K - 28・29	90
第15図 S I - 04・05	31	第53図 S K - 28・29	91
第16図 S I - 04・05	32	第54図 S K - 28・29	92
第17図 S I - 06	34	第55図 S K - 28・29	93
第18図 S I - 07・08	35	第56図 S K - 36	94
第19図 S I - 07・08	36	第57図 遺構外出土石器	96
第20図 S I - 08	37	第58図 遺構外出土石器	97
第21図 S K - 01~04	41	第59図 遺構外出土石器	98
第22図 S K - 05~07	43	第60図 遺構外出土石器	99
第23図 S K - 08~11	45	第61図 遺構外出土石器	100
第24図 S K - 12~18, 22	47	第62図 出土石器	103
第25図 S K - 19~21, 23, 24	51	第63図 出土石器	105
第26図 S K - 25~27	53	第64図 出土石器	106
第27図 S K - 28~30	55	第65図 出土石器	108
第28図 S K - 28~30	56	第66図 出土石器	109
第29図 S K - 31~35	58	第67図 出土石器	110
第30図 S K - 36	60	第68図 出土石器	111
第31図 S I - 02	63	第69図 出土石器	112
第32図 S I - 03	65	第70図 出土石器	113
第33図 S I - 04・05	66	第71図 出土石器	115
第34図 S I - 04・05	67	第72図 出土石器	116
第35図 S I - 04・05	68	第73図 出土石器	117
第36図 S I - 04・05	69	第74図 出土石器	118
第37図 S I - 04・05	70	第75図 出土土製品・石製品	118
第38図 S I - 04・05	71	第76図 弥生土器	120

写 真 目 次

第 章 調査概要

第1節 調査に至る経過

青森県商工労働部は、青森県における産業構造の高度化ならびに人口定住の促進を図るため「青森テクノポリス開発計画」を計画し、産業振興の拠点として地域振興整備公団（以下公団）と県との共同事業による青森中核工業団地造成を青森市大字野木・合子沢地区に計画した。

開発予定地内には、平成5・6年度の青森県教育委員会が実施した分布調査によって範囲が拡張された新町野遺跡、平成5年度に新規登録された野木遺跡が存在することが確認された。

平成7年度から造成工事着手の計画があったため、開発予定者である公団ならびに県工業振興課（以下工業振興課）と県教育庁文化課（以下文化課）との間で協議が行われ、その結果、平成7年度から青森県埋蔵文化財調査センター（以下県埋文センター）による試掘調査が実施されることとなった。

試掘調査の結果、約175,000㎡が調査対象面積と判明し、翌8年度から試掘調査の結果を基に工事最優先部分について埋蔵文センターが発掘調査を実施した。

発掘調査終了年度については、当初平成11年度の予定であったが、平成9年4月に公団ならびに工業振興課の要望により平成10年度終了に変更となり、その協議の段階で青森市教育委員会（以下当委員会）が加わり、新町野遺跡の幹線及び補助幹線道路部分と野木遺跡の南側部分発掘調査、及び野木遺跡西側の試掘調査と発掘調査について埋蔵文センターが担当し、野木遺跡北側幹線道路部分から現市道部分より東側の430ラインまでならびに新町野遺跡の残り部分について当委員会が担当することになった。

当委員会では埋蔵文化財の保護と開発事業との円滑な調整を図るため、発掘調査を受託し、平成9・10年度の二カ年次にわたる発掘調査を計画した。第一年次である平成9年度は、野木遺跡を対象とし、平成9年5月12日から同年11月21日まで発掘調査を実施した。また、第二年次である平成10年度は、野木・新町野遺跡を対象とし、野木遺跡に関しては平成10年4月20日から同年11月6日まで発掘調査を実施した。

第2節 調査要項

1. 調査目的

地域振興整備公団が計画している青森中核工業団地造成事業に先立ち、工事予定地内に所在する埋蔵文化財包蔵地野木遺跡の発掘調査を実施し、遺跡の記録保存を行い、地域社会の文化財の活用に資する。

2. 遺跡名及び所在地

野木（のぎ）遺跡（青森県遺跡台帳番号 01-210）

青森県青森市大字野木字山口ほか

3. 事業予定年度 平成9年度～12年度（継続事業）

4. 発掘調査実施期間 平成9年5月12日～11月21日（第一年次）

平成10年4月20日～11月6日（第二年次）

5. 調査面積 69 900㎡ (当初調査対象予定面積 54 400㎡)
 平成 9 年度 24 000㎡
 平成 10 年度 45 900㎡
6. 調査委託者 地域振興整備公団
7. 調査受託者 青森市
8. 調査担当機関 青森市教育委員会生涯学習部社会教育課埋蔵文化財対策室 (平成 9～11 年度)
 青森市教育委員会生涯学習部文化財課 (平成 12 年度)
9. 調査指導機関 青森県教育庁文化課
10. 調査協力機関 青森県埋蔵文化財調査センター
 青森県工業振興課
 青森市企業誘致推進室
11. 予算措置 調査委託者側で措置
12. 調査体制

平成 9 年度

調査指導員 村越 潔 青森大学考古学研究所所長兼教授 (考古学)

調査員 高島 成侑 八戸工業大学教授 (建築史学)

" 三辻 利一 奈良教育大学教授 (分析化学)

" 赤沼 英男 岩手県立博物館主任専門学芸調査員 (文化財科学)

" 長沼 圭一 青森市立大野小学校教諭 (考古学)

" 徳差 義男 青森市立浪打小学校教諭 (考古学)

" 工藤 一彌 青森県教育センター指導主事 (地質学)

調査協力員 白鳥 弘明 南部四区連合町会長

調査事務局 青森市教育委員会

教育長 池田 敬

生涯学習部長 永井 勇司

社会教育課長 山田 章

埋蔵文化財対策室長 遠藤 正夫

室長補佐 福土 敦

埋蔵文化財係長 石岡 義文

主 事 田澤 淳逸

" 小野 貴之

" 木村 淳一 (調査担当)

" 児玉 大成

" 沼宮内陽一郎

" 設楽 政健 (調査担当)

調査補助員 松橋智佳子、堀内万里子、内田祐子、本多顕子 (屋 外・屋 内)

福土聡彦 (屋 外)

平成10年度

調査指導員	村越 潔	青森大学考古学研究所所長兼教授	(考古学)
調査員	高島 成侑	八戸工業大学教授	(建築史学)
"	三辻 利一	奈良教育大学教授	(分析化学)
"	赤沼 英男	岩手県立博物館主任専門学芸調査員	(文化財科学)
"	工藤 一彌	青森県教育センター指導主事	(地質学)

調査協力員 白鳥 弘明 南部四区連合町会長

調査事務局 青森市教育委員会

教育長	池田 敬
生涯学習部長	齋藤 勝
社会教育課長	間山 義弘
埋蔵文化財対策室長	遠藤 正夫
室長補佐	福士 敦
埋蔵文化財係長	石岡 義文
主 事	田澤 淳逸
"	小野 貴之
"	木村 淳一(調査担当)
"	児玉 大成
"	沼宮内陽一郎
"	設楽 政健(調査担当)
埋蔵文化財調査員	北林八洲晴(調査担当)
調査補助員	堀内万里子、内田祐子、本多顕子、神美雪、中村行西、野宮真知子、斉藤久子(屋 外・屋 内)、松橋智佳子(屋 内)

平成11年度(報告書刊行整理作業)

調査指導員	村越 潔	青森大学考古学研究所所長兼教授	(考古学)
調査員	高島 成侑	八戸工業大学教授	(建築史学)
"	三辻 利一	奈良教育大学教授	(分析化学)
"	赤沼 英男	岩手県立博物館主任専門学芸調査員	(文化財科学)
"	工藤 一彌	青森県教育センター指導主事	(地質学)
"	広岡 公夫	富山大学教授	(分析化学)
"	穴澤 義功	産業考古学会鉱山金属分科会代表	(考古学)

調査事務局 青森市教育委員会

教育長	池田 敬
生涯学習部長	中西 秀吉
生涯学習部次長	小山内 博
社会教育課長	間山 義弘

埋蔵文化財対策室長	遠藤 正夫
室長補佐	蝦名 淳一
主 査	堀谷 久子
＃	田澤 淳逸
主 事	小野 貴之
＃	木村 淳一(担 当)
＃	児玉 大成
＃	沼宮内陽一郎
＃	設楽 政健(担 当)
埋蔵文化財調査員	北林八洲晴
調査補助員	松橋智佳子(屋 内)

平成12年度(報告書刊行整理作業)

調査指導員	村越 潔	青森大学考古学研究所所長兼教授 (考古学)
調 査 員	高島 成侑	八戸工業大学教授 (建築史学)
	三辻 利一	奈良教育大学教授 (分析化学)
	赤沼 英男	岩手県立博物館主任専門学芸調査員(文化財科学)
	工藤 一彌	青森県教育センター指導主事 (地質学)
	平川 南	国立歴史民俗博物館教授 (文献史学)
	穴澤 義功	産業考古学会鉱山金属分科会代表 (考古学)

調査事務局 青森市教育委員会

教育長	池田 敬
生涯学習部長	中西 秀吉
生涯学習部次長	三浦 賢悟
生涯学習部参事	
兼文化財課長	遠藤 正夫
文化財課長補佐	蝦名 淳一
主 査	堀谷 久子
主 事	小野 貴之
＃	木村 淳一(担 当)
＃	児玉 大成
＃	設楽 政健(担 当)
調査補助員	松橋智佳子(屋 内)

第3節 調査方法

青森中核工業団地造成工事に係る野木遺跡の発掘調査は、平成8年度から県埋文センターが北側幹線道路部分、南側ポンプ場部分について実施しており、調査対象範囲に対して100m 100mの大メッシュにより調査区を設定し、4m 4mの小メッシュで調査を実施している（青森県教育委員会 1998）。

当委員会が調査を担当した地区は、平成8年度に県埋文センターが調査を実施した北側幹線道路部分に連続する部分であり、また、平成9年度から県埋文センターが調査を実施している遺構密集地区（県埋文センター既設のグリッド杭430ライン以南）に接する現市道部分東側430ライン以北までであったため、基本的に県埋文センターが設置したグリッドを基準に調査区を設定した。

グリッド杭の打設にあたっては、前年度県埋文センターが打設した南北軸MAライン、東西軸300ライン、ならびに調査区内に既設の工食用杭（公共座標 $X = 84111262$ $Y = -6708507$ $Z = 59777$ mほか）を基準にして、20m 20mの中メッシュ単位でグリッド杭打設を委託した。また、遺構精査において、必要に応じて4m 4mの小メッシュ単位でグリッドを展開した。

この際基準とした県埋文センターの杭が越冬により若干の誤差が生じ、南北の主軸ラインについては、真北に対して0 57 40 東偏している。

調査区内における標準原点については、グリッド杭打設と同様、既設の工食用杭数を基準とし、広範囲な調査区に対応すべく調査対象範囲内について数十点設置委託を行った。また、必要に応じて標準原点から原点を移動し、調査に対応した。

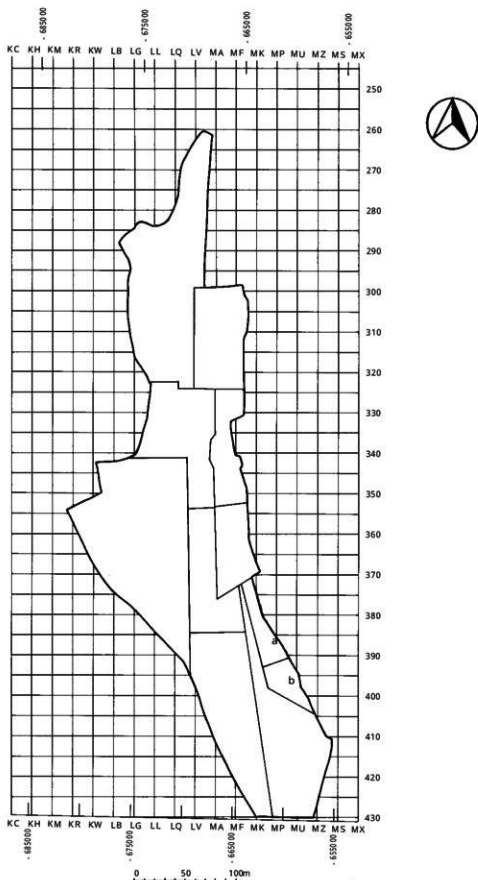
各遺構の呼称については、竪穴式住居跡・竪穴遺構をS I、土坑をS K、ピットをS P、鉄生産関連炉・焼土状遺構についてはS N、溝跡についてはS D、その他性格不明遺構についてはS Xと略号を付し、算用数字を組み合わせて遺構番号とした。ただし、委託者である公団が工事最優先部分の調査優先を要望し、平成9年度に4回、平成10年度に5回調査区の切り渡しを余儀なくされ（第1図参照）、しかも、その調査対象範囲それぞれが連続した調査区ではなく、断続し部分的な調査を強いられたため、遺構番号についても逆算したり飛ばしながら付した。このため本報告では調査時点での遺構番号を編集し、北側から種別毎に遺構番号を振り直した。なお、発掘調査時点での遺構番号については、遺構観察表に表記している。

当委員会が調査参加時点で調査対象範囲内については、大部分の表土処理がなされていたため、調査開始から遺構確認、精査という手順をとった。また、基本層序の把握については、部分的に残存していた土層ならびに県埋文センター調査の土層堆積図を参照した。

遺構の精査にあたり竪穴式住居跡については、基本的に四分法を採用し、それ以外の遺構については二分法で行ったが、遺構によっては、必要に応じて適宜セクションベルトを設け、精査にあたった。

遺構の平面図作成については、簡易測り方測量を用い、小規模な土坑、ピット等については、平板測量も併用した。また、ラジコンヘリ、リフティングケーブルによる空中撮影測量図化委託も部分的に用い、平面図作成を行った。発掘調査における図面の縮尺については、基本的に1分の1を用い、住居のカマド等については10分の1を採用し、調査の必要に応じて適宜40分の1、200分の1、300分の1の縮尺についても採用した。セクション図における土層の注記については、「標準土色帖」を参照した。

写真撮影については、35mmのモノクローム、リバーサルフィルムの各フィルムを併用して作業の進展に伴い、必要に応じて行った。また、ラジコンヘリによる空中撮影についても委託した。



第 1 図 野木遺跡調査対象区（印の数字は引渡し地区に対応）

第4節 調査経過 ()内ならびに の番号は第1図と対応。また遺構名については発掘調査時の遺構番号を適用

平成9年度

- 5月12日(月)発掘調査開始。器材搬入、環境整備、調査区内の杭打ち等を実施。
 - 5月13日(火)調査区南側の工事最優先地区()について遺構確認、精査を開始。
 - 5月14日(水)調査区北側()の部分についても一部遺構確認開始。
 - 5月19日(月)調査区南側()の斜面下部分の表土未処理部分について、バックホー等の重機を導入し、表土処理開始。新たに竪穴式住居跡3軒を確認。
 - 6月4日(水)調査区北側()についても、遺構精査開始。
 - 6月12日(木)調査区南側()部分について調査完了。ラジコンヘリによる空中撮影。
 - 6月16日(月)調査区北側()の斜面下部分に残存していた道路部分の表土処理を開始。
 - 7月16日(水)調査区 の部分についても精査開始。調査経過について文化課と打合せ。
 - 8月1日(金)調査区 の部分について調査完了。ラジコンヘリによる空中撮影。
 - 8月18日(月)調査区 の部分について精査開始。 の部分についてジョレンがけ、白線引き。
 - 8月21日(木)調査区 の部分について調査完了。ラジコンヘリによる空中撮影。
 - 8月28日(木)公団・文化課・県埋文センターを交えて調査成果の中間報告。
 - 9月2日(火)調査区 の表土未処理部分(道路部分)処理開始。
 - 9月29日(月)調査区 の西傾する斜面側の遺構確認。
 - 10月1日(水)県埋文センターとの合同発掘調査打合せ会議。
- 発掘調査は当初10月31日までの予定であったが、9月下旬から雨天の日が多く、また、当初予想された遺構数に対してそれを上回る検出数があり、11月21日まで調査期間を延長することとした。
- 11月21日(金)調査区 について精査未完了の遺構3基を除き、ラジコンヘリによる空中撮影、後片付けを実施し、平成9年度の発掘調査を完了。
 - 11月28日(金)県埋文センターと合同で現地説明会を実施。約60人ほどの見学者が訪れた。

平成10年度

- 4月20日(月)発掘調査開始。環境整備とともに、昨年度精査未完了であった遺構について精査再開。工事最優先部分である の地区について精査を開始。
- 4月21日(火)昨年度までプレハブ用地として使用していた325ラインから335ライン付近まで重機による表土処理開始、ならびにジョレンがけによる遺構確認開始。
- 4月23日(木)焼失住居2軒確認。鉄生産関連遺構を二地点で確認。調査区南側430付近についても工事優先部分の道路部分を中心にジョレンがけによる遺構確認開始。
- 5月1日(金)昨年度精査未完了の地区(の残り部分)を精査完了。翌日引渡し。
- 5月6日(水)北林チーム合流。調査区 の道路部分最南端430ラインから北上する方向で遺構精査開始。
- 5月13日(水)池田教育長、齋藤生涯学習部長来跡。
- 5月26日(火)鉄生産関連遺構について赤沼調査員現地指導(翌27日も)、村越調査指導員来跡。
- 6月1日(月)弘前大学藤沼教授来跡。

- 6月4日(木)青森市長来跡。雨天のため遺構精査を中断し、秋以降調査予定の地区()についてジョレンゲ、遺構確認を実施。
- 6月22日(月)高島調査員来跡。調査の進捗が遅れていた北林チーム側についても精査開始。
- 6月23日(火)工事最優先の旧プレハブ用地ならびに幹線道路350ライン付近までラジコンヘリによる空中撮影を実施。赤沼調査員鉄生産関連遺構について現地指導(翌24日も)。
- 6月24日(水)空撮実施地区()について、公団側に引渡し。一部SN 03・04の精査が未了であったため、その部分のみ工事を入れることを延期し、精査完了時点で引渡すことに決定。
- 6月30日(火)北林チーム野木遺跡での調査終了。調査未完了の遺構については全て調査を引き継ぐ形をとる。斜面下側の部分について重機による表土処理開始。
- 7月10日(金)幹線道路部分350ラインから385ライン()までラジコンヘリによる空中撮影を実施。斜面下拡張部分(a)遺構精査開始。
- 7月13日(月)引渡しが遅れていたSN 03・04の部分と空撮完了した幹線道路385ラインの地区()について調査完了後引渡し。幹線道路より東側の430ライン以北の地区()について遺構精査開始。
- 7月14日(火)青森市教育委員会合同発掘調査打合せ会議。会議後赤沼調査員現地指導(翌15日も)。
- 7月24日(金)幹線道路430ラインまでSK 650を除く遺構精査完了。翌25日ラジコンヘリによる空中撮影。
- 7月27日(月)西側調査区()について草刈り、遺構の掘り下げを一部開始。
- 7月29日(水)幹線道路430ラインまで公団側にSK 650を除く地区について引渡し。
- 8月3日(月)SK 650遺構精査完了。公団側に引渡し。幹線道路部分については、引渡しりが全て終了し、幹線道路部分に工事が及んだが、幹線道路東側の調査区()で発掘作業が進んでおり、作業員の調査区内への移動等の安全に不安があったため、公団、工事業者、当委員会の三者で協議し、東側調査区への連絡通路の設置、安全管理の確認を要望した。
- 8月10日(月)東側部分(b)を重機による表土処理。
- 8月27日(木)東側調査区()について調査完了。
- 8月28日(金)富山大学広岡教授来跡。熱残留磁気測定サンプル採取。雨天の為空撮は延期。
- 9月2日(水)東側調査区についてラジコンヘリによる空中撮影実施。
- 9月8日(火)東側調査区について公団に引渡し。以降西側調査区()での精査が主体となる。
- 9月29日(火)青森市中学校社会科部会の先生来跡。
- 10月17日(土)県埋文センターと合同で野木・新町野遺跡の現地説明会を開催。野木遺跡については、約150人程の見学者が訪れた。
- 10月28日(水)一部調査が未了ではあったが雨天続きの天候であったため、先行してラジコンヘリによる空中撮影を実施。
- 11月5日(木)西側調査区()の遺構精査を完了。一部、後片付けに入る。
- 11月6日(金)現場器材類の後片付け、搬出の後、現場終了式を行う。野木遺跡の発掘調査を終了した。
- 11月9日(月)公団に西側調査区の引渡し。

第5節 整理の概要ならびに本報告書の編集について

本事業に係る整理作業は発掘調査を開始した平成9年度に開始している。第3節で記述したとおり発掘調査時点で調査区が分離し断続的調査方法をとられたため報告書掲載時点での編集の必要性が予想されたが、各整理作業において調査時点での遺構番号で実施している。

1. 整理作業の概要

a. 遺構図面

発掘調査時に作成された遺構平面図・土層断面図・エレベーション図の各調査年度内に修正・原因作成作業を終了した。また、必要に応じて縮尺の変更を実施した。トレース原因の作成は、補助員・整理作業員が主にあたり平成10年度から作業を開始し、平成11年度中頃の時点で終了した。

b. 遺物

1) 土器

土器の出土量は、平成9年度にダンボール（内法33 40 35cm）58箱、平成10年度にダンボール68箱の出土であった。整理作業時点でコンテナ（内法34 54 20cm）に移し替えて作業を実施し、復元土器は1000個体以上にのぼる。

注記

前述のとおり遺構名については、発掘調査時点の遺構番号を記入するようにした。遺跡名、遺構番号（出土地点）、層位、取り上げ番号の他、取り上げ年月日等の情報を記入した。

接合・復元

各遺構の層位ごとに接合し、その後、層位をまたぐ接合関係のみるように接合作業を実施した。また、遺構間の接合関係を見るため、中央市民センターの会議室を借り、遺構間資料の接合関係についてチェックした。遺物の接着についてはセメダインを使用し、剥離のはげしいあるいは接着が困難な遺物についてはバインダーを利用し、接着面の補強をした。

復元の際、欠落部分の充填材として、当初石膏を利用してしたが、平成10年度から樹脂系の補填材に変更した。

実測・トレース・拓本

出土した資料をなるべく多く情報として残すため、選別時点で小片であっても径が割り出し可能な資料については実測を行うように心掛けた。また、縄文土器、須恵器等で径の割り出しが困難な資料については断面実測 拓本の形で取り扱った。トレースは、1 1のほか、必要に応じて1 2の原因も作成した。

2) 石器・石製品

縄文時代の石器、平安時代の砥石等の石製品については、発掘調査時点、ならびに整理作業の水洗い終了時点で選別を行っている。選別の後、実測必要なものについて実測、トレースを実施し、原因とした。縄文時代の礫石器のトレースについては、1 2の原因とした。

剥片石器の注記については、実測・写真撮影後に注記を行っている。

3 鉄関連遺物

製鉄や鍛冶作業に関連する遺物を一括した。

炉壁・鉄滓等

調査の結果、鉄関連遺物は、コンテナ換算で平成9年度分が20箱、平成10年度分が25箱出土した。これらの遺物は、平成9年度分については、主に廃絶した住居跡の落ち込みを利用した排滓場から出土し、平成10年度分については、主に製鉄炉と廃絶した住居跡の落ち込みを利用した排滓場から出土したものである。そのうち、平成10年度に調査したSN-05・06(製鉄炉)とSI-120(排滓場)に関しては、グリッドラインを利用して50cmメッシュを設定し、区画ごとに遺物上げを行っているが、その他の排滓場に関しては、層一括で遺物上げしている。製鉄・鍛冶関連遺物の調査方法に対する認識が不足していたこともあり、検出した炉や排滓場の覆土及びその周辺の土砂を採取していないため、土砂中の砂鉄、鍛造剥片等の微細な遺物に関してはほとんど回収していない。

水洗は、現地調査終了後に、ハケ、ブラシ等を用い、手洗いで行った。注記については、ポイント上げをした遺物に関してのみ行い、層一括上げた遺物については、かなりの数量にのぼるため、注記の代わりとして、出土地点・層ごとにビニール袋に入れ、さらに遺構ごとにコンテナに入れて仕分けして対応した。

分類については、調査員穴澤義功氏の指導の下、肉眼観察を中心に、強力磁石(タジマ製 ピックアップ PUP-M)を用いて行った。強磁着反応があり且つ肉眼観察で含鉄のものと認められる遺物については、特殊金属探知機(KDSメタルチェッカーMR-5Q、鉄関連遺物用に穴澤氏が標準)を使用して、内在するメタルの大きさを示す反応の度合いによって、L、M、Hに分類し、反応のないものは錆化物()とした。これらは、更に肉眼観察で確認できる滓の状況によって、鉄塊系遺物、含鉄炉内滓、含鉄椀形鍛冶滓、鉄器(未製品)に細分した。弱磁着反応及び反応がないものについては、肉眼観察を中心に各種類に分類した。さらに、遺構ごとに各類型の遺物を観察し、残存状態が良好で、かつ炉形状や作業形態を復元する上で重要な遺物を、代表遺物として選別し、さらにその中から実測用遺物を抽出した。

実測図の掲載にあたっては、同種類でかつ形状が類似した遺物が、多くの遺構にわたって出土しているため、全ての遺構から実測用遺物を抽出せず、製鉄・鍛冶関連遺物のパリエーションをほぼ網羅している遺構、即ち製鉄炉、鍛冶炉、排滓場からの出土遺物を中心に選別し、それらを種類ごとにまとめて掲載した。その他の遺構出土のものについては、重要かつ特異なものを除いて、遺構ごとに各類型の重量を提示するにとどめた。

鉄製品

平安時代の遺構から出土した鉄器については、錆膨れによる凹凸が激しく、形状の判定が困難な遺物も少なからず存在したため、ハケ、櫛枝で土砂を除去した後、錆膨れ部分を切り取る作業をおこなった。予算の都合上、残存状況が良好なものについて、保存処理を委託した。

羽口

羽口はコンテナ換算で、平成9年度分が31箱、平成10年度分が29箱出土した。住居のカマドの芯材として装填されていたものものが多く、それ以外は小片で出土している。

水洗は、ハケ、ブラシを用い、手洗いで行った。注記、接合作業の後、遺構間の接合関係の把握、長さ・幅の計測をおこなった。本遺跡においては製鉄炉、鍛冶炉が検出されており、製鉄・鍛冶の両工程を復元する上で、羽口は重要な遺物のひとつである。羽口には、大きく分けて製鉄用と鍛冶用が存在していたことが想定されるが、本遺跡出土羽口は、ほとんどが住居のカマドの芯材として転用され、装填されていたものであり、製鉄炉・鍛冶炉、排滓場において出土したものは少なく更に破片資料であり、炉と結びついた形で製鉄用・鍛冶用羽口の典型を抽出することが困難であった。そこで、製鉄用・鍛冶用羽口の相違点として、断面形、内径の規模が想定されることから、断面形による分類のち、各類型ごとに内径の規模等の諸属性を計測し、統計処理を行った上で、製鉄炉・鍛冶炉・排滓場出土羽口から抽出した諸属性と各類型を比較し、製鉄用・鍛冶用羽口を推定することとした。破片資料については、径を復元して計測した。

4) その他の土製品

ミニチュア土器、焼成粘土板、焼成粘土塊等を対象に資料整理を実施し、図化を行った。

5) 木製品

当委員会が実施した地区で木製品の出土は、竪穴式住居跡から出土した菰樋1点ならびに分析委託の際確認した棒状木製品1点のみで炭化していた。非常に脆い状態であったため、樹脂で補強し、実測・写真撮影等の作業を行った。

2. 整理作業の経過

遺構図面については、年度ごとに原図作成が終了していたため、平成9年度の原因については平成10年度からトレース、原図作成を開始している。

遺物の水洗い、注記作業については、平成9年度から開始している。平成10年度から接合・復元の終了した遺物について実測、計測等の作業を開始しており、平成12年度で終了した。

	平成9年度	平成10年度	平成11年度	平成12年度
遺 構	図面修正・原図作成	図面修正・原図作成 トレース原図作成	図面作成	
遺 物 (土器・石器)	水洗・注記 接合・復元 実測	遺構間接合 トレース	遺構間接合	拓本 図版作成
遺 物 (鉄・土製品)		水洗・注記 接合・復元 計測 実測・トレース		図版作成

3. 編集・報告書作成

発掘調査時点での制約上から、発掘調査時点でのそのままの情報だけでは調査年次や工程上の地区優先で、一つの丘陵上に立地する野木遺跡北地区の一連の様相を捉える上で障害が起こることが懸念されたため、整理作業、報告書作成作業において、当委員会が担当した野木遺跡の最北端から県埋文センターが調査を実施した地区と接する南端の地点まで遺構番号を再編集し、隣接する遺構についてある程度近接するような遺構番号に変更した。また、発掘調査時点で縄文時代、平安時代の遺構が検出しており、出土遺物については、平安時代の住居の覆土中に流入した弥生時代ならびに縄文時代の土器の出土があったことから、時代ごとに遺構・遺物を分けた形で資料提示するという方向性になった。

当初、遺構編として1分冊、遺物・総括編として2分冊目を予定して編集作業を実施し、平成11年度に刊行予定であったが、委託者である地域振興整備公団との協議において本報告書刊行年度が平成12年度に変更となり、そこで再編集を余儀なくされ、時代ごとの遺構・遺物提示という方向性に変更となった。

資料の提示方法については、野木遺跡の主体を占める平安時代の遺構・遺物については、資料数が多く、混在した形で提示では雑然とした事物の群集としか捉えることができないジレンマを解消すべく、資料の属性等から抽出した基礎情報を提示し、それを踏まえた上で事実記載を提示する方法をとった。

各資料の基礎情報については、一覧表にまとめ、資料編に記載してある。

また、報告書の製作にあたって、近年、他の自治体等で一部導入しつつある報告書のCD-ROM化を試験的に導入してみることにした。ファイル形式はPDFファイル形式でデータについては解像度をオフセット印刷相当のものと、解像度を落とした閲覧用の2種類を報告書作成委託のなかで実施した。

4. 普及・啓蒙活動

発掘調査を実施した平成9・10年度には、県埋文センターと合同で現地説明会を実施したほか、青森市発行の『広報あおもり』に調査成果の概要掲載や当委員会主催の埋蔵文化財パネル展において遺物・パネルの展示を行った。また、調査成果の速報的概要報告書としての概報を平成9年度には野木遺跡、平成10年度には新町野遺跡・野木遺跡を対象として作成・刊行しており、関係機関及び小中学校等に配布した。

整理作業中に確認した「夫」字墨書土器3点について、平成11年2月26日に記者発表を行い、平成12年3月11日には、当委員会主催の市民向け講座「縄文講座」の中で『北の古代文字世界』というテーマで国立歴史民俗博物館小川南氏、國學院大學鈴木靖氏、法政大学小口雅史氏、七飯町教育委員会横山英介氏、浪岡町教育委員会工藤清泰氏をパネリストとして招きミニシンポジウムを実施した。

また、遺物撮影の際、撮影場所として借り受けた橋本小学校で各学年総数159名の児童を対象に遺物の説明・写真撮影の見学会を実施した。



写真1 橋本小学校での見学会

第 章 遺跡の環境

第1節 遺跡の地理的環境

野木遺跡は、青森市大字野木字山口、合子沢字松森に所在している。青森市の地形は、北を陸奥湾に面して市街地が広がる青森平野、その西には標高50～150mの比較的開析の進んだ丘陵、東には東岳山地、南～南東には八甲田カルデラから噴出した火砕流堆積物によって構成された火山性台地が存在している。本遺跡の名を冠する野木地区・合子沢地区は、青森平野と火山性台地の境界付近に存在する牛館川、合子沢川流域にあたり、市街地からの距離は南方に約8kmである。この火山性台地は、八甲田連峰を源とする川によって開析され、川によって挟まれた幾筋もの舌状の丘陵が平野部に突き出すように分割されている。また、それぞれの舌状の低丘陵は緩傾斜の平坦面を有する。

本遺跡は、このような緩傾斜の平坦面をもつ舌状の丘陵の先端部付近にあたり、西側を流れる牛館川、東側を流れる合子沢川によって挟まれている。牛館川、合子沢川は、ともに八甲田連峰に源を発して北流し、同じく八甲田連峰に源を発する荒川と平野部で合流する。また、遺跡地内には、旧河川と思われる谷地形がいくつか存在している。遺跡の標高は50～90mである。

「野木」という地名は、山林や原野の雑木を切り払った開拓地であったことに由来している。江戸期には一時、開拓時に川に柴を架けて渡ったことから柴橋村と呼ばれたということである。『荒川村沿革誌 巻1・2』によると、「野木村に鍛冶沢あり以て考ふべし」とあり、また、野木に隣接する金浜地区の地名の起源について「附近より砂鉄出でしとも言う」としている。このことは、野木遺跡から検出した製鉄関連遺構との関連性が考えられる。

遺跡が所在する丘陵地一帯は、由来のとおり山林で、点在する平坦面を利用した畑が所々にみられる。丘陵地北側の平野部には水田地帯が広がっている。丘陵地と水田地帯の境界付近を主要地方道青森環状野内線が東西に走り、青森環状野内線に面して、遺跡北東側には青森市畜場、その北西側には総合流通団地、さらにその南側に南部工業団地が存在する。

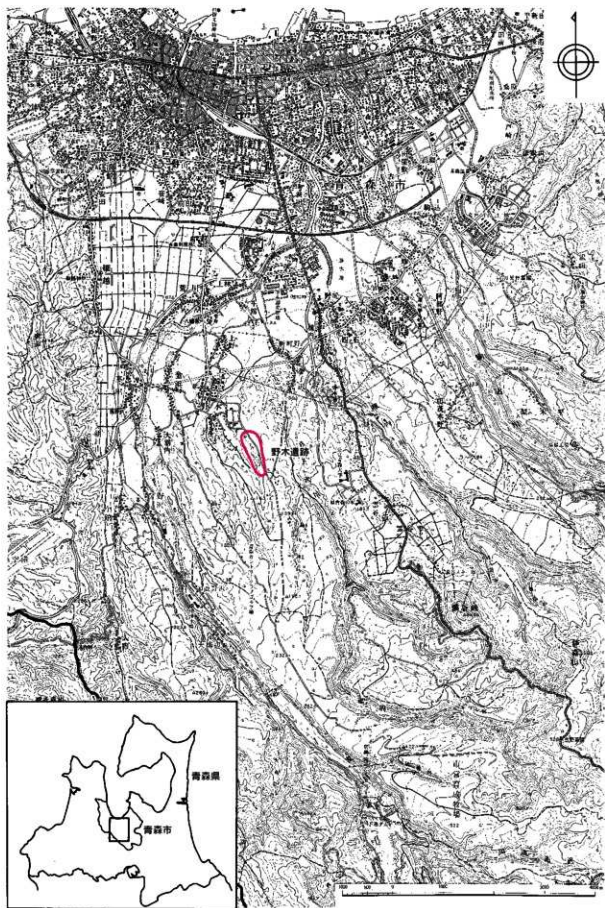
第2節 遺跡の歴史的環境

野木遺跡が所在する舌状の低丘陵は、八甲田連峰を源とする川によって開析をうけ、形成されたものである。この丘陵の周辺には、同じく八甲田連峰を源とする川の開析によって形成された同様の舌状の低丘陵がいくつも存在している。また、入内川の西～北西側には、標高50～150mの比較的開析の進んだ丘陵が広がっている。野木遺跡周辺の半径約4km以内に所在する遺跡は、舌状の低丘陵上の平坦地や、入内川の北西～西側に広がる標高50～150mの比較的開析の進んだ丘陵の縁辺部に存在している。野木遺跡は平安時代を主体とし、縄文時代前期末の円筒下層d式、円筒上層a式土器に伴う遺構も少数ではあるが検出されている。野木遺跡周辺に所在する遺跡の所属時期は、縄文時代早期～中世にわたり、そのうち、舌状の丘陵上の平坦地に立地する遺跡は、縄文時代前期～後期、平安時代の遺跡が多く、入内川の西～北西側の丘陵縁辺部に立地する遺跡は、平安時代を主体とする遺跡が多い。以下、野木遺跡周辺に所在する遺跡について、時期ごとに概観する。

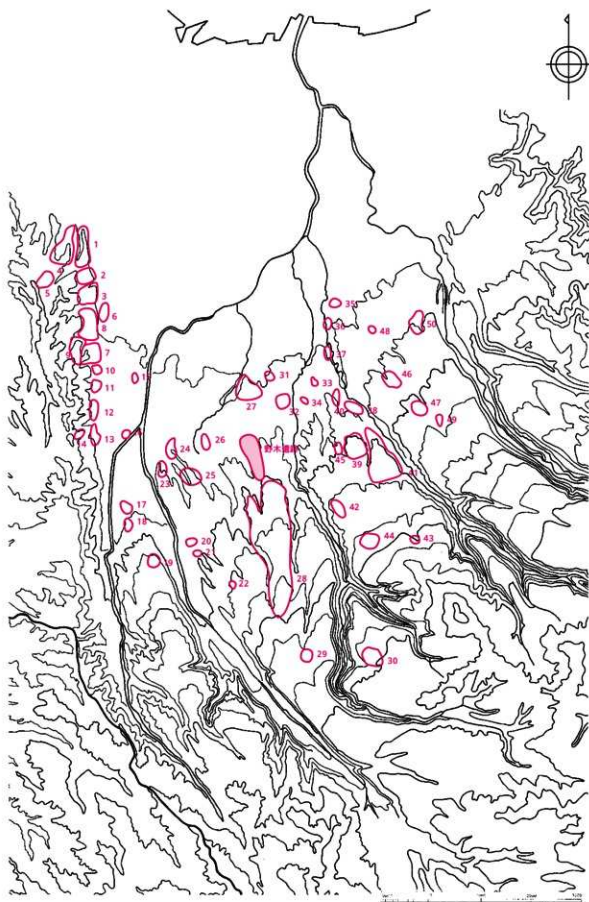
縄文時代前期・中期に帰属する主な遺跡には、山吹(1)遺跡、新町野遺跡、横内(1)・(2)遺

跡、桜峯(1)・(2)遺跡がある。山吹(1)遺跡は、荒川と牛館川に挟まれた舌状の丘陵の平坦面上に立地しており、当委員会が平成2年度に発掘調査を実施している。前期末の円筒下層d₁式土器～後期前半の十腰内式土器が出土しており、円筒上層c式、d₁式土器期の遺物を主体とする。石囲炉をもつ竪穴式住居跡など、縄文時代中期中葉の集落跡の一部を検出している(青森市教育委員会 1991)。新町野遺跡は、野木遺跡と同一丘陵上に立地しており、平成7年度に青森県埋蔵文化財調査センター(以下、県埋文センター)による試掘調査、平成8年度に当委員会による試掘調査、平成9・10年度に県埋文センター、当委員会による発掘調査が実施されている。調査の結果、縄文時代と平安時代の複合遺跡であることが判明しており、縄文時代については、円筒下層d₁式土器を中心とする遺物、当該期の大型竪穴式住居跡、フラスコ状土坑、Tピットなどが検出され、平安時代の遺構も多数検出されている(青森市教育委員会 1996c、青森県教育委員会 1997a)。横内(1)・(2)遺跡、桜峯(1)・(2)遺跡は、合子沢川と横内川に挟まれた丘陵の先端部付近に立地している。横内(1)・(2)遺跡は、平成5年度に当委員会が発掘調査を実施しており、調査の結果、横内(1)遺跡では、縄文時代早期～中期までの遺物が出土し、円筒下層b₁式土器を伴う竪穴式住居跡1軒、円筒下層d₁式土器を伴う竪穴式住居跡2軒(テラスをもつ竪穴式住居跡1軒を含む)を検出し、横内(2)遺跡では、円筒下層d₁式土器、円筒上層a₁式土器を主体とする遺物のほか、当該期の土坑26基、平安時代の竪穴式住居跡1軒を検出している(青森市教育委員会 1994b)。桜峯(1)遺跡は、平成7・8年度に当委員会が発掘調査を実施しており、調査の結果、縄文時代前期～晩期、続縄文、平安時代の土器が出土している。円筒下層d₁式、円筒上層a₁式土器が主体を占め、竪穴式住居跡7軒、土坑54基、埋設土器遺構11基、遺物集中ブロック1カ所など縄文時代前期末～中期中葉の遺構を検出している(青森市教育委員会 1996e、1997b、1998c)。桜峯(2)遺跡は、平成6年度に当委員会が発掘調査を実施しており、調査の結果、縄文時代早期から平安時代の遺物が出土し、中期前半の円筒下層a₁・b₁式土器を主体としている。当該期の竪穴式住居跡1軒、土坑35基、縄文時代中期後半の配石遺構2基などを検出している(青森市教育委員会 1995b)。

縄文時代後期～晩期に帰属する主な遺跡には、細越遺跡、朝日山遺跡、朝日山(2)遺跡、小牧野遺跡、四ツ石遺跡、田茂木野遺跡がある。細越遺跡、朝日山遺跡、朝日山(2)遺跡は、入内川の西～北西側の丘陵縁辺部に立地している。細越遺跡は、昭和53年度に青森県教育委員会によって調査が実施されており、縄文時代晩期の遺物包含層が検出されている(青森県教育委員会 1979)。朝日山遺跡、朝日山(2)遺跡は、昭和58年度、平成2年度～平成4年度に、県埋文によって発掘調査が実施され、縄文時代晩期の土坑墓群が検出されており、その他、平安時代の大集落跡が検出されている(青森県教育委員会 1984、1993a、1994a)。小牧野遺跡は、入内川と荒川に挟まれた舌状の丘陵の平坦面上に位置している。縄文時代後期前半の環状列石を主体とする遺跡であり、後期前半の十腰内式土器や三角形岩版などを中心に縄文時代前期～平安時代までの遺物が出土している。平成2年度から当委員会が継続して調査を実施しており(青森市教育委員会 1993b、1996a、1997a、1998a)平成7年3月には、学術的重要性から国史跡に指定された。四ツ石遺跡と田茂木野遺跡は、横内川と駒込川に挟まれた舌状の丘陵の平坦地上に立地している。四ツ石遺跡は、昭和38、39年に当委員会が調査を実施しており、縄文時代後期前半の十腰内式土器を主体とする遺物のほか、当該期の配石遺構を検出している(青森市教育委員会 1965)。田茂木野遺跡は、昭和60年度に当委員会が発掘調査を実施しており、円筒上層e₁式土器、十腰内式土器のほか、竪穴式住居跡、炉跡1基、土坑1基を検出している。出土遺



第2図 野木遺跡位置図



第 3 図 野木遺跡と周辺の遺跡位置図

第1表 周辺の遺跡

番号	遺跡名	時期	種別	文献	遺跡番号
1	細越館遺跡	平安	集落跡	北林 1971	01066
2	栄山(1)遺跡	平安	散布地		01211
3	栄山(2)遺跡	縄文・平安	散布地		01212
4	栄山(3)遺跡	縄文・弥生・平安	散布地		01213
5	栄山(4)遺跡	平安	集落跡		01214
6	細越遺跡	縄文・晩・平安	集落跡	青森県教育委員会 1979	01103
7	朝日山遺跡	縄文・平安・中世	集落跡	青森県教育委員会 1984、1993a、1994a	01165
8	朝日山(2)遺跡	縄文・平安	散布地	青森県教育委員会 1993a、1994a	01197
9	朝日山(3)遺跡	縄文・平安	散布地	青森県教育委員会 1993a、1994a、1995、1997a	01198
10	朝日山(4)遺跡	平安	散布地	青森市教育委員会 1993a	01222
11	朝日山(5)遺跡	平安	散布地	青森市教育委員会 1993a	01223
12	朝日山(6)遺跡	平安	散布地	青森市教育委員会 1995a	01257
13	朝日山(7)遺跡	平安	散布地	青森市教育委員会 1995a	01258
14	高田蝦夷館跡	中世	館跡		01171
15	高田城跡	中世	館跡		01170
16	川瀬(1)遺跡	平安	散布地	青森市教育委員会 1994a	01238
17	小館遺跡	中世	館跡		01172
18	桜沢(2)遺跡	縄文	散布地	青森市教育委員会 1995a	01259
19	小竹野遺跡	縄文・前・中・後・晩・続縄文・平安	環状列石	青森市教育委員会 1993b、1996a、1997a、1998a	01176
20	山吹(1)遺跡	縄文・前・中・後	集落跡	青森市教育委員会 1991	01186
21	山吹(2)遺跡	縄文	散布地		01187
22	山吹(3)遺跡	縄文	散布地		01188
23	山吹(4)遺跡	縄文・平安	散布地		01189
24	葛野(1)遺跡	縄文	散布地	青森市教育委員会 1993a	01217
25	葛野(2)遺跡	縄文・前・中・後・晩・弥生・平安	集落跡	青森市教育委員会 1993a、1996b、1998b	01218
26	野木沢田遺跡	平安	散布地	青森市教育委員会 1993a	01216
27	新町野遺跡	縄文・前・後・平安	集落跡	青森市教育委員会 1996c、青森県教育委員会 1997b	01161
28	山口遺跡	縄文・前・後	散布地		01271
29	野木(2)遺跡	縄文	散布地	青森市教育委員会 1995a	01260
30	金子沢山城(1)遺跡	縄文	散布地	青森市教育委員会 1994a	01246
31	金子沢松改(1)遺跡	縄文	散布地	青森市教育委員会 1995a	01261
32	金子沢松改(2)遺跡	平安	散布地	青森市教育委員会 1995a	01262
33	楳内(1)遺跡	縄文・前・中	散布地	青森市教育委員会 1994b、三宅 1969	01164
34	楳内(2)遺跡	縄文・前・中・平安	集落跡	青森市教育委員会 1993a、1994b	01206
35	野尻野原(1)遺跡	平安	散布地	青森市教育委員会 1996d	01283
36	野尻館遺跡	中世	館跡		01173
37	楳内城跡	中世	館跡	青森市教育委員会 1987	01174
38	楳内池沢(1)遺跡	平安	散布地	青森市教育委員会 1996d	01284
39	桜沢(1)遺跡	縄文・前・中・後・晩・平安	集落跡	青森市教育委員会 1993a、1996e、1997b、1998c	01207
40	桜沢(2)遺跡	縄文・前・中・後・晩・平安	集落跡	青森市教育委員会 1994a、1995b	01208
41	嶺山遺跡	縄文	散布地		01209
42	菅谷山城(1)遺跡	縄文・平安	散布地		01247
43	菅谷山吹(1)遺跡	縄文	散布地	青森市教育委員会 1992	01199
44	菅谷山吹(2)遺跡	縄文	散布地	青森市教育委員会 1995a	01263
45	菅谷山吹(3)遺跡	縄文	散布地	青森市教育委員会 1996d	01285
46	回ツ石(1)遺跡	縄文・中・後	集落跡	青森市教育委員会 1965	01028
47	回ツ石(2)遺跡	縄文・中・後	散布地		01194
48	大矢沢里丸(1)遺跡	縄文	散布地	青森市教育委員会 1995a	01236
49	田茂木野遺跡	縄文・前・中・後・晩	散布地	青森市教育委員会 1986	01160
50	阿部野遺跡	縄文・早・後・平安	集落跡	藤田 1975、藤西 1979	01050

物は、縄文時代後期前半の十層内 式土器を主体としている（青森市教育委員会 1986）。

古墳時代に帰属する遺跡には、細越館遺跡がある。細越館遺跡は入内川の西～北西側の丘陵縁辺部に立地している。発掘調査は行われていないが、県内ではこれまで出土例のない、南小泉 式に比定される土師器が採集されている。

平安時代に帰属する主な遺跡には、朝日山遺跡、朝日山 2・3 遺跡、葛野 2 遺跡、新町野遺跡がある。朝日山遺跡、朝日山 2 遺跡、平成 9 年度に県埋文によって調査が実施された朝日山 3 遺跡は、縄文時代晩期の土坑墓群のほかに、平安時代の大集落跡が検出されており、多数の竪穴式住居跡、外周溝をもった竪穴式住居跡、製鉄炉、鋸冶炉、井戸跡などが検出されている。また、これまで市内で類例のない室町期に推定される建物跡が検出されている（青森県教育委員会 1984、1993a、1994a、1997a）、葛野(2) 遺跡は、荒川と牛館川に挟まれた舌状の丘陵の平坦地上に立地している。平成 8

年度と10年度に、当委員会が発掘調査を実施しており、9世紀後半から10世紀中頃の集落の一部を検出している（青森市教育委員会 1996b、1998b）。新町野遺跡では、縄文時代前期末を主体とする多数の遺構のほか、平安時代の円形周溝、竪穴式住居跡、土坑、製鉄関連遺構などが検出されている（青森市教育委員会 1996c、青森県教育委員会 1997b）。新町野遺跡は、野木遺跡と近接していることから、野木遺跡と極めて関連が深い遺跡であると考えられる。

中世以降に帰属する遺跡は、室町期の建物跡が検出された朝日山 3 遺跡以外には、現在のところ、確認されておらず、また、本遺跡周辺の事柄を記述した文献についても確認されていない。『日本地名大辞典』には、本遺跡が位置する野木という地名は、山林や原野の雑木を切り払った開拓地であったことに由来しており、江戸期には一時、開拓時に川に柴を架けて渡ったことから柴橋村と呼ばれたと記載されている。

第 3 節 本遺跡内の基本層序について

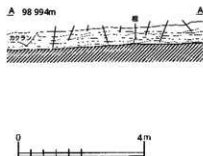
本遺跡内の基本層序については、第 2 章第 3 節で触れたが、当委員会が発掘調査参加時点で既に調査区内の大部分に表土処理がされていたため、遺構確認面からの調査が主体である状況であった。

基本層序については、調査時点で現地に残存していた土層ならびに県埋文センターで調査の土層堆積図を参照し対応したが、発掘調査前の土地利用状況が山林以外に荒蕪地、畑地等さまざまのであり、土層堆積が均一な堆積状況を呈していた訳ではないようである。

この状況は、本調査ならびに本報告とは前後するが、平成 11 年度に当委員会が実施した野木遺跡の県埋文センターの調査地区より南側の地点の試掘調査（青森市教育委員会 2000）で確認された基本層序においても同様であった。

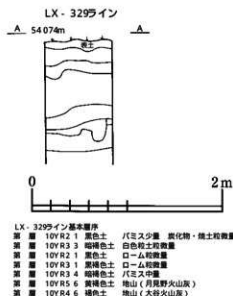
試掘調査で確認された基本層序中については白頭山 - 苫小牧火山灰（B - T m 火山灰）が混入する土層が確認されたが、本調査で確認した地点では火山灰を検出しなかった。

参考 平成 11 年度実施の試掘調査での基本層序



表土層	10YR17 1	10YR2 2	基本を含む
第 1 層	10YR2 1	黒色土	シルト質 しまりあり、塑性あり、粘性なし / パニス灰 2m前後堆積
		炭層含	
第 2 層	10YR17 1	黒色土	シルト質 しまりあり、塑性・粘性なし
第 3 層	10YR2 3	黒褐色土	シルト質 しまりあり、塑性、粘性なし、局所的に炭化物 10m前後を含む、パニス 2~5m堆積含む、中に B T m 堆積
第 4 層	10YR2 2	黒褐色土	シルト質 しまり弱、塑性あり、粘性なし、パニス灰 2~5m堆積含む
第 5 層	10YR3 3	暗褐色土	パニス灰よりシルト質 しまりややあり、塑性あり、粘性弱 炭化物 2m局所的に混入、炭層層
第 6 層	10YR5 6	黄褐色土	パニス灰 堆積層 月見野火山灰に相当
第 7 層	10YR4 4	褐色土	粘土質 堆積層 大谷火山灰に相当

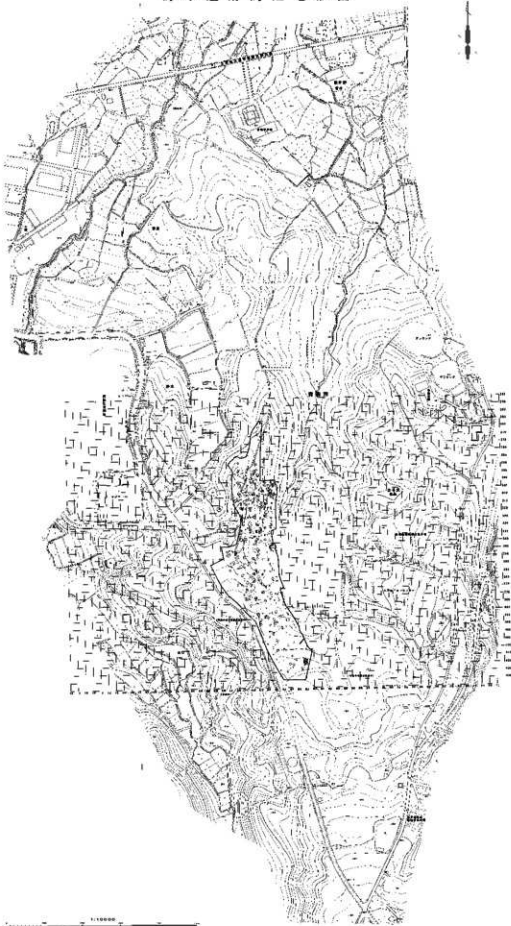
第 5 図 平成 11 年度試掘調査基本層序(13T)



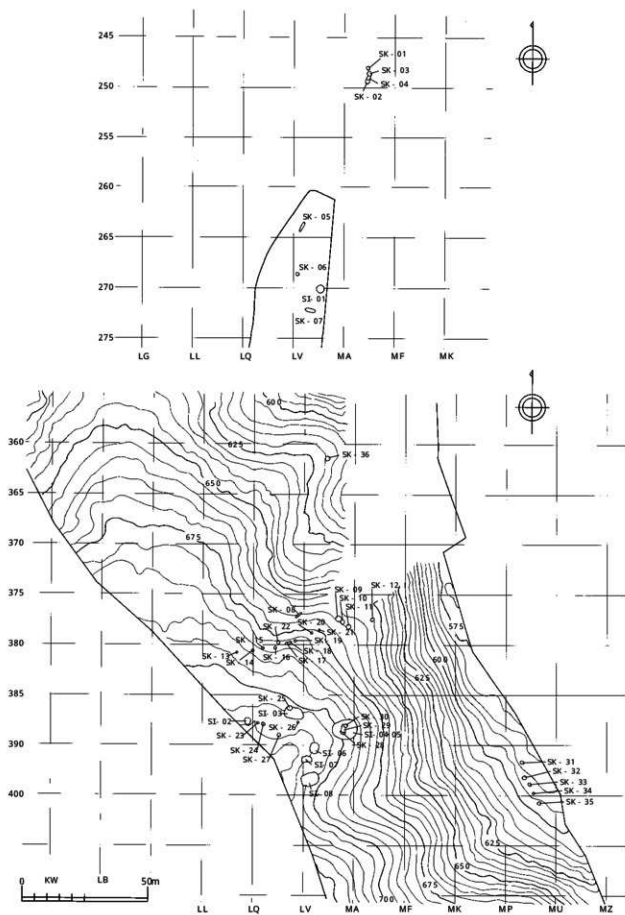
LX-3299ライン基本層序		
第 1 層	10YR2 1	黒色土 パニス少量 炭化物・粘土粒散見
第 2 層	10YR3 3	暗褐色土 白色粘土灰散見
第 3 層	10YR2 1	黒色土 ローム粒散見
第 4 層	10YR3 1	黒褐色土 ローム粒散見
第 5 層	10YR3 4	暗褐色土 パニス中層
第 6 層	10YR5 6	黄褐色土 堆山 (月見野火山灰)
第 7 層	10YR4 6	褐色土 堆山 (大谷火山灰)

第 4 図 基本層序

野木遺跡周辺地形図



第6図 北地区全体図



第 7 図 野木遺跡縄文時代遺構配置図

第 章 縄文時代

第1節 概要

本遺跡における縄文時代の遺構については、調査区北端グリッド265～273ラインならびにグリッド385～390ライン付近の2地点で主に検出した。内訳は、竪穴式住居跡8軒（重複も含む）、土坑36基である。このうち385～390ライン丘陵頂部付近の遺構群については、県埋文センター調査の西地点の調査区から検出した遺構群との関連性が想定され、集落域の検討については、両調査結果を併せた上で検討する必要がある。

遺物については、土器16箱、石器3箱が出土した。縄文時代に帰属する遺構からの出土以外に平安時代に帰属する遺構から出土する事例も見られた。遺構から出土した遺物は縄文時代前期末円筒下層d、式一中期初頭上層a式にかけての資料が主体を占める。また、遺構外からは縄文時代後期、晩期の資料等も出土しており、生活圏であったことが推定される。

第2節 検出遺構

1. 竪穴式住居跡

SI - 01(第8図)

[位置] グリッドLX - 269・270で検出した。

[重複] SP - 219と重複している。新旧関係はSP - 219がSI - 01の堆積土を切っており、本遺構が古い。

[平面形・規模] 不整形円形を呈し、324 300 20cmを測る。床面積は766㎡を測る。

[壁] 壁高は、北壁11cm、東壁12cm、南壁15cm、西壁11cmを測る。北壁側ではテラス部分にかけてならびに壁際からの立ち上がりはほぼ同様の角度で緩やかに外傾して立ち上がる。他の壁についても緩やかに外傾して立ち上がるものが多く見られる。北東壁側は二段落ちをしている。壁面はやや脆弱である。

[床] 大谷火山灰層の地山を床面としておりほぼ平坦である。床面は比較的堅緻である。

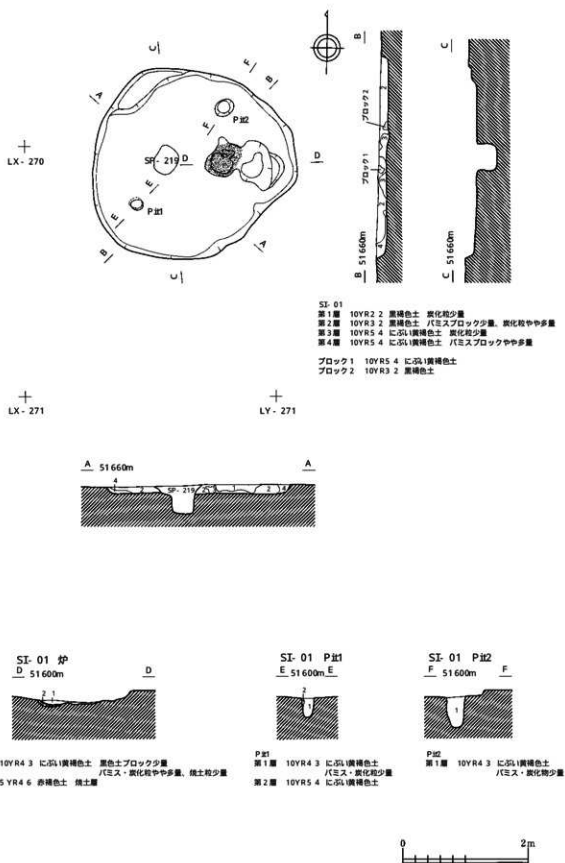
[壁溝] 検出していない。

[ピット] 2基検出した。いずれも柱穴状を呈する。Pit1は18 16 31cmを測り、底面は内側に入りこむ。Pit2は32 26 50cmを測る。

[炉] 住居中央部よりやや東側の地点から地床炉1基を検出した。浅い掘り込みがなされており、焼土範囲は63 47cmを測り、不整形を呈する。

[付属施設] なし。

[堆積土] 4層に分層した。第1～3層中には炭化粒を含んでいる。壁際の堆積土は月見野火山灰層の地山ブロック主体であり、壁の崩落土による成層であるが、住居中央に堆積する第3層ならびに第2層中にも同様のブロックが混入しており人為堆積と考えられる。



第8図 SI-01

S I - 02(第9図)

[位置] グリッドLP・387で検出した。

[重複] なし。

[平面形・規模] 不整形円形を呈し、268 240 34cmを測る。床面積は4.873㎡を測る。

[壁] 壁高は、北壁26cm、東壁28cm、南壁31cm、西壁30cmを測る。いずれの壁も急激に立ち上がる。壁面は堅緻である。

[床] 大谷火山灰層の地山を床面としておりほぼ平坦である。床面は比較的堅緻である。

[壁溝] 北東ならびに南東側に断続して検出した。深さは平均3cmと比較的浅い。

[ピット] 住居の壁柱穴として7基検出した。各ピットの規模は、Pit1 = 14 10 9 cm、Pit2 = 16 (6) 10cm、Pit3 = 15 (9) 5 cm、Pit4 = 20 (9) 11cm、Pit5 = 20 (12) 9 cm、Pit6 = 20 (12) 10cm、Pit7 = 16 13 7 cmを測る。やや外側へ傾斜した形で掘り込まれているものが多い。

[炉] 住居中央部付近から土器埋設炉1基を検出した。浅い掘り込みの中央部を柱穴状に掘り込み、口縁部を欠損した土器が設置されている。焼土面は土器外の部分がほとんどで36 13cmを測り、不整形を呈する。土器内の部分には焼土粒が少量含まれるのみである。

[付属施設] 南東壁側にPit8として取扱った46 32 33cmの柱穴状の掘り込みが認められ、その周りを6cmの高さで土手状にロームが盛り上げられていた。

[堆積土] 8層に分層した。第5層以下の堆積については、第5層に月見野火山灰主体の地山土層が堆積しており、人為堆積と考えられる。第3層以上の堆積については自然堆積と考えられる。

S I - 03(第10・11図)

[位置] グリッドLT・LU・LV・386・387で検出した。

[重複] S I - 217、S K - 25、S P - 209、210と重複している。新旧関係について削平のため明確でないものがあるが、S I - 217については、平安時代に帰属することから本遺構の方が古い。S K - 25とは削平のため新旧関係が不明で、S P - 209、210との関係は本遺構の方が古い。

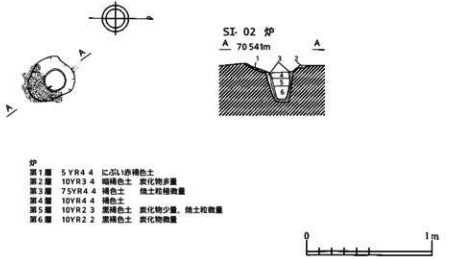
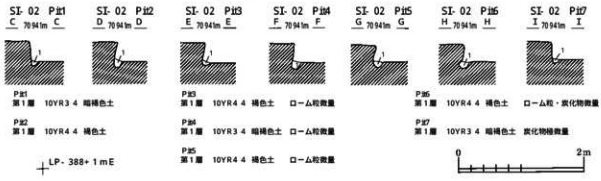
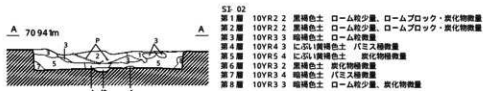
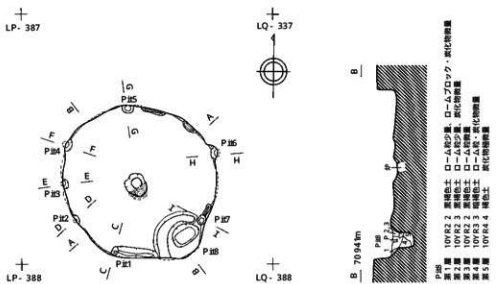
[平面形・規模] 削平を受けているため全体形は不明であるが、ほぼ長楕円形を呈するものと思われる。規模は短軸規模が不明で、残存長で長軸732 深さ23cmを測る。

[壁] 削平のため明確に壁を残存しているのは南壁側のみである。壁高は23cmを測る。壁は外傾しながら立ち上がる。壁面はやや脆弱である。

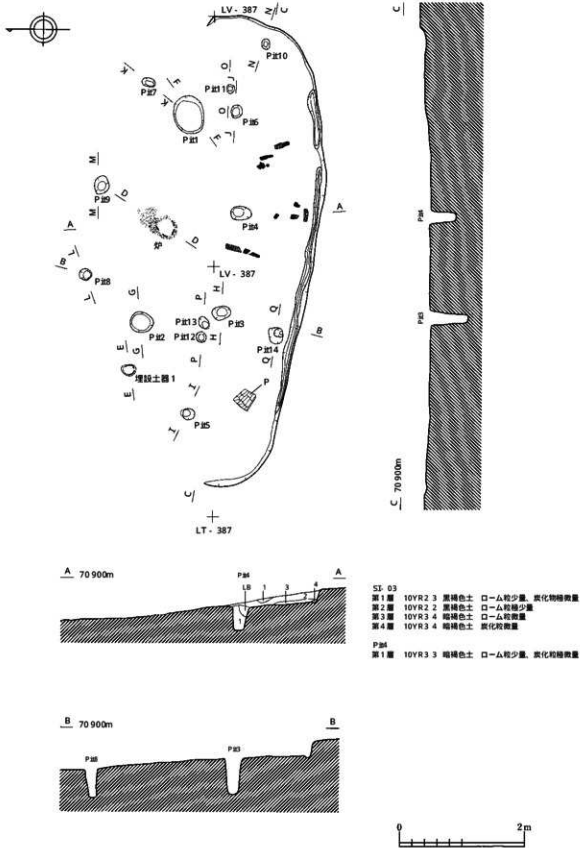
[床] 削平のため残存している部分は少ないが、大谷火山灰層地山を床面としており、ほぼ平坦である。床面は、比較的堅緻である。

[壁溝] 削平のため残存している部分は少ないが、断続的に南壁側から検出した。深さは平均3cmと比較的浅い。

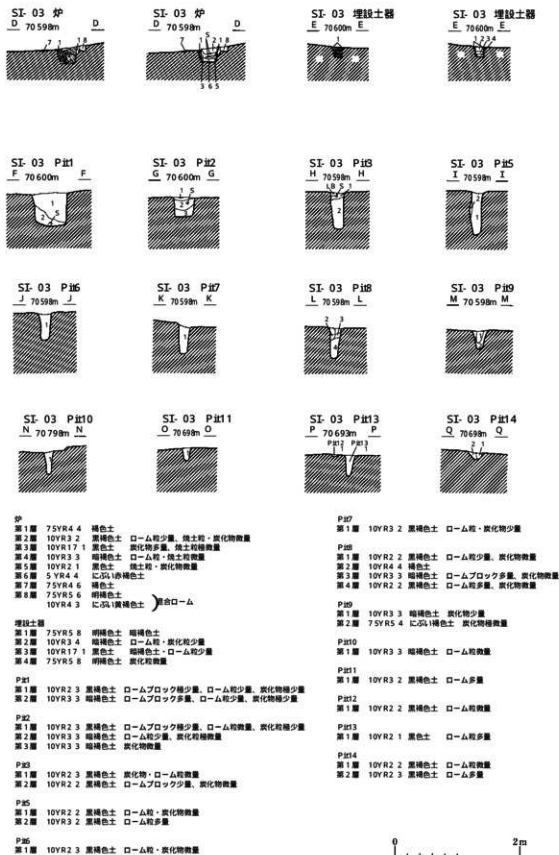
[ピット] 削平のため全容は不明であるが、残存しているピット14基を検出した。規模は、Pit1 = 62 48 55cm、Pit2 = 37 33 30cm、Pit3 = 32 22 55cm、Pit4 = 33 21 68cm、Pit5 = 18 18 68cm、Pit6 = 20 17 44cm、Pit7 = 22 13 50cm、Pit8 = 20 18 48cm、Pit9 = 30 25 27cm、Pit10 = 16 13 38cm、Pit11 = 14 13 19cm、Pit12 = 17 15 3cm、Pit13 = 21 16 33cm、Pit14 = 26 21 18cmを測る。



第9図 SI-02



第10図 SI 03



第1図 SI 03

[炉 土器埋設炉1基を検出した。焼土範囲は、67 38cmの範囲で不整形に広がっており、埋設土器周辺部46 35cmの範囲で赤変化の度合いが強く残存していた。埋設土器中第3層と第5層の層界面から自然礫2点が出土している。S I - 02と同様土器内の覆土は焼土化しておらず焼土粒と炭化物が微量含まれるのみである。

[付属施設 削平のため全容は不明であるが、住居内西側部分から埋設土器1基を検出した。

[堆積土 削平のため残存していた部分について4層に分層した。上層は黒褐色土主体の土層、中層から下層にかけては暗褐色土主体の土層であり自然堆積と考えられる。

S I - 04・05(第12～16図)

[位 置 グリッドL X - 388 L Y・L Z・M A - 387～389で検出した。

[重 複 S K - 28、S K - 29、S K - 30と重複している。S K - 28は本遺構の炉を切っており、本遺構が古いものと推定される。また、住居中央部付近には円形を呈すると思われる柱穴配置があり、住居跡の拡張もしくは重複の可能性が考えられる。

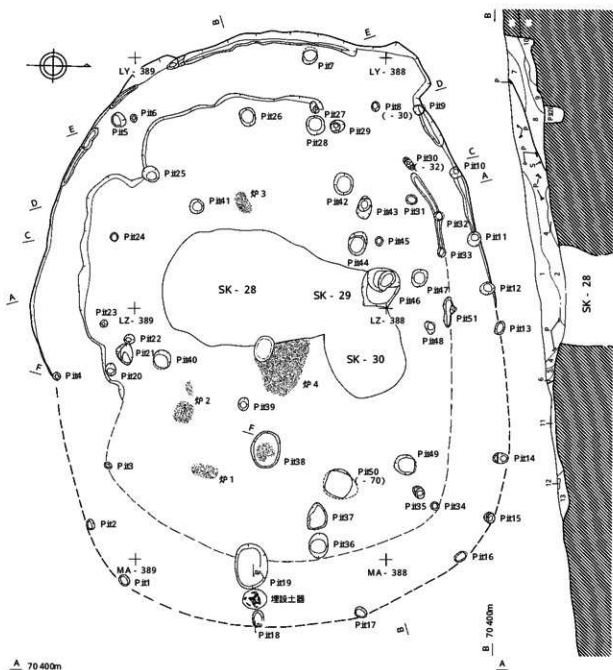
[平面形・規模 削平のため全体形は不明であるが、テラスを有する長楕円形を呈するものと推定される。北西壁側に小規模な張り出し部を有する。楕円形の住居の規模は(935) (735) 85cmを測る。

[壁 削平のため残存状況は悪く、北壁半分と西壁、南西壁側が残存している。壁高は、北壁で12cm、西壁で44cm、西南壁で10cmを測る。西壁側でテラスは緩やかに立ち上がり、壁際でやや急激に立ち上がる。南西壁側はテラスから外傾して立ち上がり、壁際も同様の傾斜で立ち上がる。北壁側はテラスの立ち上がりが不明瞭で壁際は西壁と同様急激に立ち上がる。壁面は堅緻である。

[床 削平により残存していない部分も見られるが、大谷火山灰層の地山を床面としており起伏がある。床面は堅緻である。

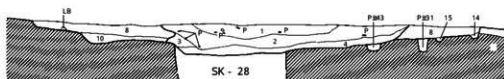
[壁 溝 削平のため全容は不明であるが、住居の北側～西側～南西壁際ならびにテラス部分の北側で断続的に検出した。深さは平均8 cmで北西壁側の張り出し部からは検出していない。

[ビット 住居内から51基のビットを検出した。前述のとおり重複の可能性もあり柱穴配置等について検討の余地はあるが、削平のため帰属関係は明示できない。そのため一括で提示する。P.it1 = 20 18 15cm、P.it2 = 17 13 15cm、P.it3 = 19 13 17cm、P.it4 = 12 12 18cm、P.it5 = 26 22 50cm、P.it6 = 13 10 18cm、P.it7 = 24 23 48cm、P.it8 = 16 13 30cm、P.it9 = 18 15 25cm、P.it10 = 18 (16) 32cm、P.it11 = 23 21 30cm、P.it12 = 25 20 24cm、P.it13 = 22 15 26cm、P.it14 = 25 15 18cm、P.it15 = 17 16 15cm、P.it16 = 19 14 16cm、P.it17 = 20 17 9cm、P.it18 = 29 18 12cm、P.it19 = 70 53 11cm、P.it20 = 21 17 18cm、P.it21 = 34 24 80cm、P.it22 = 17 16 10cm、P.it23 = 11 11 21cm、P.it24 = 13 13 27cm、P.it25 = 24 23 56cm、P.it26 = 30 24 30cm、P.it27 = 20 13 40cm、P.it28 = 31 30 74cm、P.it29 = 24 20 28cm、P.it30 = 23 11 32cm、P.it31 = 18 15 18cm、P.it32 = 14 13 27cm、P.it33 = 15 13 17cm、P.it34 = 15 14 10cm、P.it35 = 24 15 20cm、P.it36 = 40 31 68cm、P.it37 = 42 32 19cm、P.it38 = 59 47 25cm、P.it39 = 21 16 20cm、P.it40 = 30 27 56cm、P.it41 = 23 22 48cm、P.it42 = 35 31 30cm、P.it43 = 36 22 82cm、P.it44 = 39 30 30cm、P.it45 = 21 13 23cm、P.it46 = 60 60 110cm、P.it47 = 27 25 13cm、P.it48 = 22 13



A 70.400m

B 70.400m



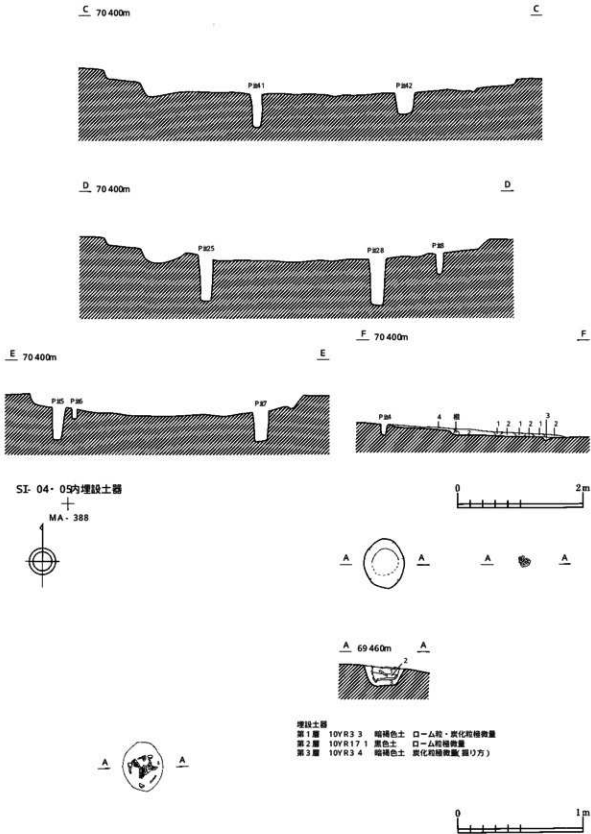
SI 04-05

- 第1層 10YR2 2 黄褐色土 土器片多量
- 第2層 10YR2 3 黄褐色土 土器片多量
- 第3層 10YR3 4 暗褐色土 □-ムブロク土混入
- 第4層 10YR3 4 暗褐色土 □-ムロク・炭化粒多量、黄褐色土混入
- 第5層 10YR2 1 黄褐色土
- 第6層 10YR3 4 暗褐色土 □-ムブロク土混入
- 第7層 10YR3 4 暗褐色土 黄褐色土混入
- 第8層 10YR3 4 暗褐色土 □-ムロク・炭化粒多量
- 第9層 10YR3 4 暗褐色土 □-ムロク・焼土粒少量

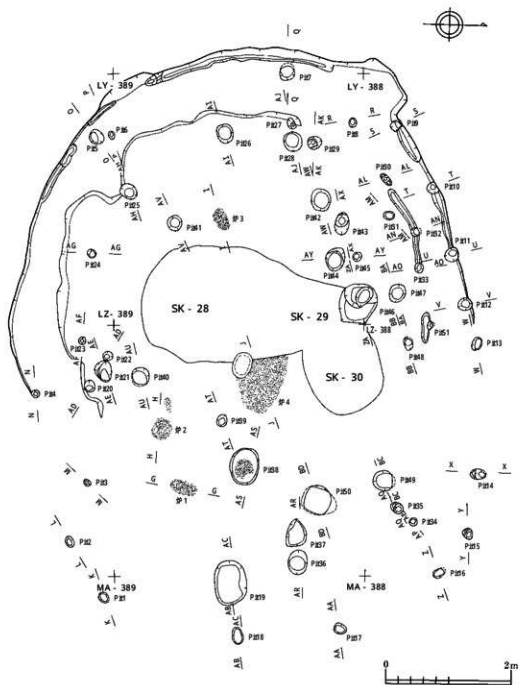
- 第10層 10YR3 4 暗褐色土
- 第11層 10YR2 2 黄褐色土
- 第12層 10YR2 2 黄褐色土 □-ムロク少量、炭化粒少量
- 第13層 10YR3 3 暗褐色土 片状土・□-ムロク少量、炭化粒少量
- 第14層 10YR3 3 暗褐色土 炭化粒・□-ムロク少量
- 第15層 10YR3 4 暗褐色土 炭化粒・□-ムロク少量

0 2m

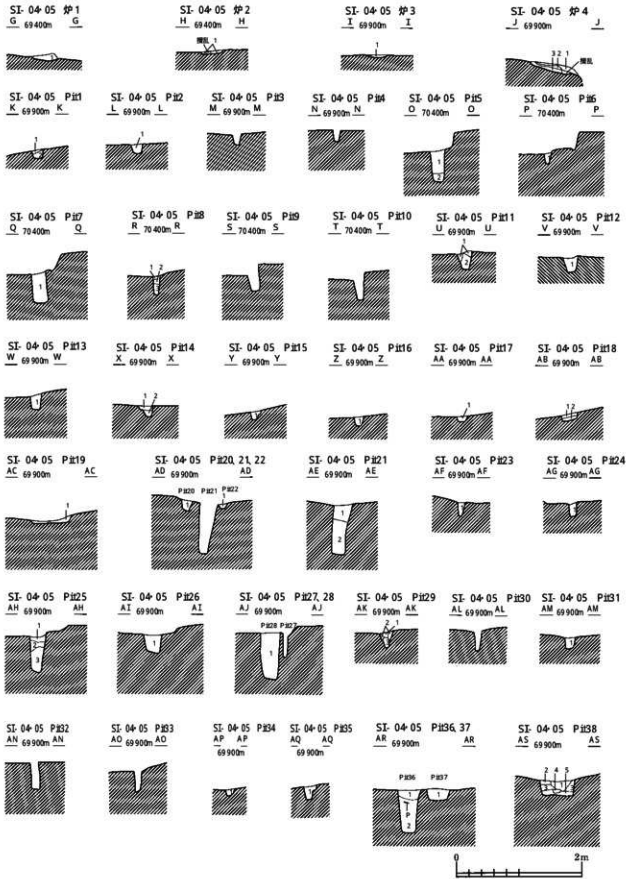
第12圖 SI 04-05



第 13 図 SI 04・ 05



第 14 圖 SI 04・05



第15図 SI 04・05

SI-04-05 P109
AT 69900m AT



SI-04-05 P140
AU 69900m AU



SI-04-05 P141
AV 69900m AV



SI-04-05 P142
AW 69900m AW



SI-04-05 P143
AX 69900m AX



SI-04-05 P144
AY 69900m AY



SI-04-05 P146
AZ 69900m AZ



SI-04-05 P147
BA 69900m BA



SI-04-05 P148
BB 69900m BB



SI-04-05 P149
BC 69900m BC



SI-04-05 P150
BD 69900m BD



- P109
第1層 5YR3 6 暗赤褐色土 穴底土少量、底部の炭化灰少量
- P140
第1層 5YR4 6 赤褐色土
- P141
第1層 5YR5 6 暗赤褐色土
- P142
第1層 10YR3 4 暗褐色土 炭化灰少量、粘土粒中量
第2層 7YR4 4 褐色土 底部の炭化灰少量(焼土層)
第3層 5YR4 4 赤褐色土 穴底土少量(焼土層)

- P143
第1層 10YR3 2 暗褐色土 底部の炭化灰少量
第2層 10YR4 6 褐色土 穴底土少量、底部の炭化灰少量
- P144
第1層 10YR4 4 褐色土 底部の炭化灰中量
- P146
第1層 10YR4 6 褐色土 炭化灰・穴底土少量
第2層 10YR4 4 褐色土 炭化灰・穴底土少量
- P147
第1層 10YR4 3 赤褐色土 炭化灰中量、穴底土少量
- P148
第1層 10YR4 6 褐色土 炭化灰少量

- P149
第1層 10YR3 3 暗褐色土 炭化灰少量、穴底土中量
第2層 10YR4 4 褐色土 炭化灰少量
第3層 10YR3 4 暗褐色土 炭化灰中量、穴底土少量
- P150
第1層 10YR3 3 暗褐色土 穴底土中量、炭化灰少量
第2層 10YR2 3 暗褐色土 穴底土中量、炭化灰少量

- P151
第1層 10YR3 3 暗褐色土 穴底土中量、炭化灰少量
第2層 10YR2 3 暗褐色土 穴底土中量、炭化灰少量
- P152
第1層 10YR3 4 暗褐色土 穴底土少量、穴底土中量、炭化灰少量
- P153
第1層 10YR2 3 暗褐色土 穴底土少量、穴底土中量、炭化灰少量

- P154
第1層 10YR3 4 暗褐色土 穴底土中量、穴底土少量
第2層 10YR2 3 暗褐色土 穴底土中量、炭化灰少量
- P155
第1層 10YR2 2 暗褐色土 穴底土少量、炭化灰少量
- P156
第1層 10YR3 3 暗褐色土 穴底土中量、炭化灰少量
- P157
第1層 10YR4 3 赤褐色土 炭化灰少量

- P158
第1層 10YR3 3 暗褐色土 炭化灰少量
第2層 10YR4 6 褐色土 炭化灰少量
- P159
第1層 10YR3 3 暗褐色土 炭化灰少量、穴底土中量
- P160
第1層 10YR2 3 暗褐色土 穴底土中量、底部の炭化灰少量

- P161
第1層 10YR3 2 暗褐色土 炭化灰・穴底土中量
第2層 10YR4 6 褐色土 底部の炭化灰少量
- P162
第1層 10YR2 3 暗褐色土 穴底土中量、底部の炭化灰少量
- P163
第1層 10YR3 3 暗褐色土 炭化灰中量、穴底土少量
- P164
第1層 10YR3 3 暗褐色土 穴底土少量、炭化灰少量

- P165
第1層 10YR3 3 暗褐色土 穴底土少量、炭化灰少量
第2層 10YR3 2 暗褐色土 穴底土少量、炭化灰少量
第3層 10YR2 3 暗褐色土 穴底土少量、炭化灰少量
- P166
第1層 10YR4 6 褐色土 穴底土少量、炭化灰少量
- P167
第1層 10YR3 2 暗褐色土 炭化灰少量、穴底土少量
- P168
第1層 10YR3 3 暗褐色土 炭化灰少量、穴底土中量

- P169
第1層 10YR3 3 暗褐色土 炭化灰少量、穴底土中量
第2層 10YR2 2 暗褐色土 穴底土少量、炭化灰少量
- P170
第1層 10YR3 3 暗褐色土 炭化灰少量、穴底土中量
- P171
第1層 10YR3 3 暗褐色土 炭化灰少量、穴底土中量
- P172
第1層 10YR3 3 暗褐色土 炭化灰少量、穴底土中量

- P173
第1層 10YR3 3 暗褐色土 炭化灰少量、穴底土中量
- P174
第1層 10YR3 3 暗褐色土 炭化灰少量、穴底土中量
- P175
第1層 10YR3 3 暗褐色土 炭化灰少量、穴底土中量
- P176
第1層 10YR3 3 暗褐色土 炭化灰少量、穴底土中量

- P177
第1層 10YR3 3 暗褐色土 炭化灰少量、穴底土中量
- P178
第1層 10YR3 3 暗褐色土 炭化灰少量、穴底土中量
- P179
第1層 10YR3 3 暗褐色土 炭化灰少量、穴底土中量
- P180
第1層 10YR3 3 暗褐色土 炭化灰少量、穴底土中量

- P181
第1層 10YR3 3 暗褐色土 炭化灰少量、穴底土中量
- P182
第1層 10YR3 3 暗褐色土 炭化灰少量、穴底土中量
- P183
第1層 10YR3 3 暗褐色土 炭化灰少量、穴底土中量
- P184
第1層 10YR3 3 暗褐色土 炭化灰少量、穴底土中量



- P185
第1層 10YR3 2 暗褐色土 炭化灰・穴底土中量
第2層 10YR4 6 褐色土 炭化灰少量
第3層 10YR2 2 暗褐色土 穴底土少量
第4層 10YR2 1 褐色土 炭化灰中量、穴底土少量
第5層 10YR3 4 暗褐色土 炭化灰少量

- P187
第1層 10YR2 2 暗褐色土 穴底土中量
第2層 10YR3 3 暗褐色土 炭化灰・穴底土少量

- P188
第1層 10YR3 4 暗褐色土 穴底土少量、炭化灰少量
第2層 10YR2 2 暗褐色土 穴底土少量、炭化灰少量
第3層 10YR2 3 暗褐色土 穴底土少量、炭化灰少量

- P189
第1層 10YR3 3 暗褐色土 穴底土中量、炭化灰少量
第2層 10YR4 6 褐色土 炭化灰少量

- P190
第1層 10YR3 3 暗褐色土 炭化灰少量、穴底土中量
第2層 10YR2 3 暗褐色土 炭化灰少量、穴底土中量

- P191
第1層 10YR3 3 暗褐色土 炭化灰少量、穴底土中量
- P192
第1層 10YR3 3 暗褐色土 炭化灰少量、穴底土中量

- P193
第1層 10YR3 3 暗褐色土 炭化灰少量、穴底土中量
- P194
第1層 10YR3 3 暗褐色土 炭化灰少量、穴底土中量

- P195
第1層 10YR3 3 暗褐色土 炭化灰少量、穴底土中量
- P196
第1層 10YR3 3 暗褐色土 炭化灰少量、穴底土中量

- P197
第1層 10YR3 3 暗褐色土 炭化灰少量、穴底土中量
- P198
第1層 10YR3 3 暗褐色土 炭化灰少量、穴底土中量

- P199
第1層 10YR3 3 暗褐色土 炭化灰少量、穴底土中量
- P200
第1層 10YR2 3 暗褐色土 穴底土中量、炭化灰少量

32cm、P₄₉= 33 31 60cm、P₅₀= 44 41 70cm、P₅₁= 14 7 12cmを測る。このうち、柱穴状の掘り方を持つピットは、P₅、7、21、25、26、28、36、40、41、42、43、44、46、49、50であり、他のピットは、壁柱穴やその他のピットの部類に属する。西壁側に深さを持つピット類が集中し、P₂₆は住居外へ傾斜をつけた形で掘り込みが行われている。

[炉 住居内で床面が焼土化している地点を4箇所検出した。このうち明確に地床炉として認定可能なものは炉4で、SK-28・29によって切られているが86 83cmの長楕円形状の範囲で焼土面が広がっていた。他は、炉1が45 21cmの長楕円状、炉2が33 30cmの隅丸方形状、炉3が37 20cmの不整長楕円形状を呈する。比熱の度合いは各炉とも赤変化し硬化している。また、P₃₈として取り扱ったピットの覆土第4層から焼土層を検出した。

[付属施設 削平を受けていたが、住居東側の地点から埋設土器遺構1基を検出した。39 32 16cmの掘り込み部に土器を埋設していた。

[堆積土 15層に分層した。このうち1～6層までの成層は切り合っているSK-28・29・30の廃絶後に堆積がなされたものであり本住居と直接関連するものではない。それ以下の層については住居廃絶後の自然堆積と考えられる。

SI-06(第17図)

[位置 グリッドLV・LW-389・390で検出した。

[重複 なし。

[平面形・規模 楕円形を呈し、400 332 42cmを測る。床面積は10752㎡を測る。

[壁 壁高は、北壁30cm、西壁35cm、南壁23cm、東壁23cmを測る。壁は外傾しながら立ち上がる。壁面はやや脆弱である。

[床 大谷火山灰層の地山を床面としておりほぼ平坦である。床面は堅緻である。

[壁溝 東壁側を除き検出した。南壁側が一部断続するが、それ以外は繋がっている。深さは平均5cmを測る。

[ピット 住居北側の部分から1基検出した。規模は25 20 9cmを測る。

[炉 住居中央部から1基検出した。82 58cmの長楕円形に焼土範囲が広がっており、比較的赤変化の度合いが強い。中心部に黒褐色土ならびに褐色土の土層堆積が見られ、不整円形状を呈する。

[付属施設 北東壁側に60 45 47cmの柱穴状の掘り込みが認められ、その周りを10cmの高さで土手状にロームが盛り上げられていた。

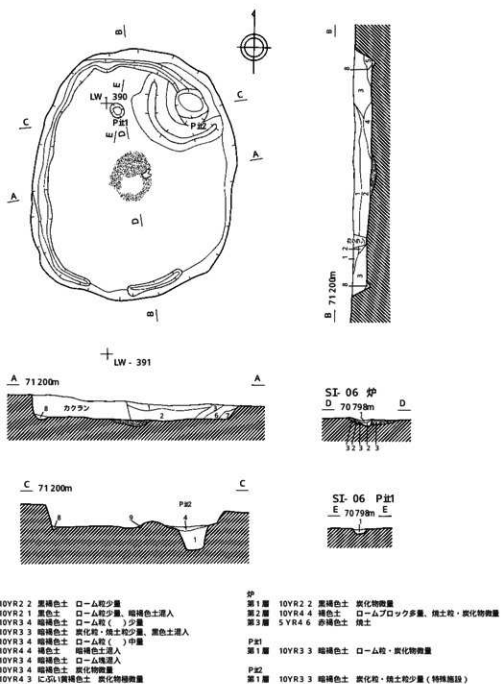
[堆積土 住居西側部分が攪乱を受けているが、それ以外の部分については、9層に分層した。東側の部分については、壁際にロームブロックが認められ、壁の崩落土である。上層には黒褐色土主体、下層には暗褐色土主体の土層の堆積状況が認められ、自然堆積と考えられる。

SI-07(第18・19図)

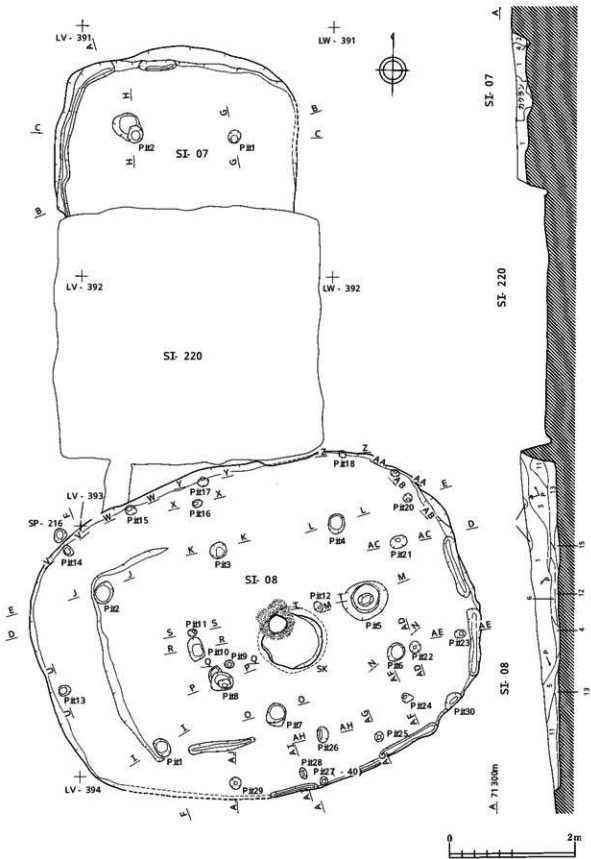
[位置 グリッドLU・LV-391で検出した。

[重複 SI-220と重複している。本遺構が切られており、本遺構の方が古い。

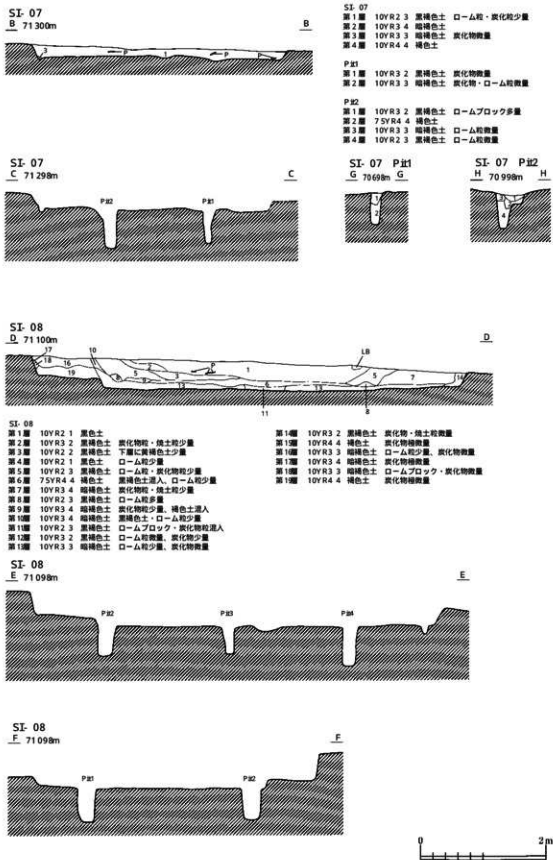
[平面形・規模 切り合いのため全体形は不明であるが、隅丸長方形を呈するものと推定される。規模について、長軸幅は残存長で260cm、短軸380 深さ24cmを測る。



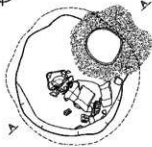
第1図 SI 06



第18圖 SI 07・08



第19図 SI 07、08



SI-08 炉

A. 70 39m



SI-08 炉・SK

A. 70 39m



LW-393

SI-08 炉		SK	
第1層	10YR2 1	黒色土	ローム粒・焼土粒少量、炭化物少量
第2層	10YR2 2	黒褐色土	ローム粒、焼土粒少量、炭化物少量
第3層	10YR3 2	黒褐色土	炭化物少量、ローム多量、焼土粒少量
第4層	75YR4 4	褐色土	炭化物少量
第5層	10YR4 4	褐色土	炭化物少量
第6層	5YR3 4	暗赤褐色土	炭化物少量
第7層	75YR2 2	黒褐色土	焼土粒少量
第8層	10YR3 3	黒褐色土	焼土粒少量
第9層	75YR3 3	黒褐色土	炭化物、焼土粒少量
第10層	5YR4 4	にじみ赤褐色土	
第11層	75YR2 2	黒褐色土	焼土粒少量
第12層	75YR2 3	黒褐色土	焼土粒多量
第13層	75YR2 1	黒色土	焼土粒少量
第14層	75YR2 1	黒色土	ロームブロック多量、焼土粒少量
SK			
第1層	10YR2 2	黒褐色土	ローム粒少量、炭化物多量、焼土粒少量
第2層	10YR1 1	黒色土	ローム粒少量、炭化物多量
第3層	10YR2 1	黒色土	ローム粒少量、炭化物多量



SI-08 P#1
I. 70 69m I.



SI-08 P#2
J. 70 69m J.



SI-08 P#3
K. 70 69m K.



SI-08 P#4
L. 70 69m L.



SI-08 P#5
M. 70 69m M.



SI-08 P#6
N. 70 69m N.



SI-08 P#7
O. 70 69m O.



SI-08 P#8
P. 70 69m P.



SI-08 P#9
Q. 70 69m Q.



SI-08 P#10
R. 70 69m R.



SI-08 P#11
S. 70 69m S.



SI-08 P#12
T. 70 69m T.



SI-08 P#13
U. 70 69m U.



SI-08 P#14
V. 70 69m V.



SI-08 P#15
W. 70 69m W.



SI-08 P#16
X. 70 69m X.



SI-08 P#17
Y. 70 69m Y.



SI-08 P#18
Z. 70 69m Z.



SI-08 P#20
AB. 70 69m AB.



SI-08 P#21
AC. 70 69m AC.



SI-08 P#22
AD. 70 69m AD.



SI-08 P#23
AE. 70 69m AE.



SI-08 P#24
AF. 70 69m AF.



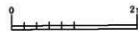
SI-08 P#25
AG. 70 69m AG.



SI-08 P#28
AJ. 70 69m AJ.



SI-08 P#29
AK. 70 69m AK.



第20図 SI-08

SI-08					
P#1					
第1層	10YR 2 3	黒褐色土	炭化物中量、ローム粒多量、焼土粒微量		
P#2					
第1層	10YR 2 3	黒褐色土	ローム粒多量、炭化物・焼土粒微量		
第2層	10YR 4 4	褐色土	炭化物粒微量		
P#3					
第1層	10YR 3 4	暗褐色土	炭化物微量		
第2層	10YR 4 4	褐色土	炭化物粒微量		
P#4					
第1層	10YR 2 2	黒褐色土	炭化物・ローム粒少量、焼土粒微量		
第2層	7.5YR 4 4	褐色土	炭化物多量		
P#5					
第1層	10YR 2 1	黒色土	炭化物・焼土粒微量		
第2層	10YR 2 3	黒褐色土	炭化物・ローム粒多量、焼土粒微量		
P#6					
第1層	10YR 2 2	黒褐色土	炭化物・ローム粒少量、焼土粒微量		
第2層	10YR 2 3	黒褐色土	ロームブロック多量、炭化物・焼土粒微量		
第3層	10YR 4 4	褐色土	ローム		
P#7					
第1層	10YR 2 2	黒褐色土	ローム粒少量、炭化物微量		
第2層	7.5YR 4 4	褐色土	炭化物粒微量、ローム		
P#8					
第1層	10YR 2 2	黒褐色土	炭化物・ローム粒微量		
第2層	10YR 3 3	暗褐色土	LtB少量、炭化物・焼土粒微量		
第3層	7.5YR 4 4	褐色土	ローム黒褐色土(10YR 2 2)少量		
P#9					
第1層	10YR 3 3	暗褐色土	炭化物粒微量		
第2層	2.5Y 8 3	淡黄色土	火山灰(B・Tm)?		
P#10					
第1層	10YR 3 3	暗褐色土	焼土粒・炭化物微量		
P#11					
第1層	10YR 3 3	暗褐色土	焼土粒・炭化物微量		
P#12					
第1層	10YR 2 2	黒褐色土	炭化物・ローム粒微量		
第2層	10YR 3 3	暗褐色土	ロームブロック少量、炭化物微量		
P#13					
第1層	10YR 3 3	暗褐色土	炭化物・ローム粒微量		
P#14					
第1層	10YR 2 3	黒褐色土	ロームブロック少量、炭化物微量		
P#15					
第1層	10YR 2 2	黒褐色土	ローム粒多量、炭化物微量		
P#16					
第1層	10YR 2 2	黒褐色土	ローム粒少量、炭化物微量		
P#18					
第1層	10YR 3 3	暗褐色土	ローム粒多量、炭化物・焼土粒微量		
P#19					
第1層	10YR 3 3	暗褐色土	炭化物・ローム粒微量		
P#20					
第1層	10YR 3 3	暗褐色土	炭化物微量、ロームブロック少量		
P#21					
第1層	10YR 4 3	褐色土	ローム粒多量、炭化物微量		
P#22					
第1層	10YR 3 3	暗褐色土	ローム粒多量、炭化物微量		
P#23					
第1層	10YR 3 3	暗褐色土	炭化物微量、ローム粒少量		
P#24					
第1層	10YR 3 3	暗褐色土	炭化物微量、ローム粒少量		
P#25					
第1層	10YR 3 3	暗褐色土	炭化物微量、ローム粒少量		
P#26					
第1層	10YR 3 3	暗褐色土	炭化物微量、ローム粒少量		
P#28					
第1層	10YR 3 3	暗褐色土	炭化物・焼土粒微量		
P#29					
第1層	10YR 3 3	暗褐色土	炭化物・ローム粒微量		

[壁] 壁高は、北壁22cm、東壁19cm、西壁21cmを測る。壁は外傾しながら立ち上がる。壁面は堅緻である。

[床] 大谷火山灰層の地山を床面としており、やや起伏が見られる。床面は堅緻である。

[壁溝] 切り合いのため全容は不明だが、北壁中央から西壁にかけて検出した。北壁側は断続的に検出した。

[ピット] 切り合いのため全容は不明だが、残存部から2基検出した。規模は、Pit1 = 21 20 53cm、Pit2 = 28 23 62cmを測る。このうちPit2には抜き取り痕を確認した。

[炉] 切り合いのため検出していない。

[付属施設] なし。

[堆積土] 切り合いのため堆積状況に欠落を生じているが、残存部分について4層に分層した。一部掘

乱により層序が乱されており、また土層堆積において土器が混入した黒褐色土の堆積が主体を占めており、人為堆積の可能性がある。

SI-08(第18～20図)

[位置] グリッドLU・393 LV・LW・392・393 LV・394で検出した。

[重複] SI-220と重複している。本遺構が切られており、本遺構が古い。

[平面形・規模] 楕円形を呈し、686 538 60cmを測る。床面積は、31742㎡を測る。また、住居西側の部分から浅いテラス状の部分を検出しており、テラスを有する住居である。

[壁] 壁高は、北壁55cm、東壁21cm、南壁11cm、西壁34cmを測る。南壁側は削平を受けているため、残存部分での形状となるが外傾しながら立ち上がり、また北壁側は、比較的急激に立ち上がる。壁面は堅緻である。

[床] 大谷火山灰層の地山を床面としており、ほぼ平坦である。床面は堅緻である。

[壁溝] 東壁ならびに南壁と南側のテラス部分から断続的に検出した。

[ピット] 29基のピットを検出した。このうち主柱穴と思われるピットは、P.it1、2、3、4、6、7で規模は、P.it1 = 32 22 61cm、P.it2 = 36 30 47cm、P.it3 = 26 25 45cm、P.it4 = 31 25 60cm、P.it6 = 31 26 73cm、P.it7 = 38 35 40cmを測る。それ以外のピットの規模は、P.it5 = 74 60 65cm、P.it8 = 40 36 33cm、P.it9 = 15 12 10cm、P.it10 = 35 23 31cm、P.it11 = 14 11 10cm、P.it12 = 17 13 32cm、P.it13 = 21 11 33cm、P.it14 = 19 13 26cm、P.it15 = 18 15 5 cm、P.it16 = 16 11 18cm、P.it17 = 18 12 18cm、P.it18 = 11 10 11cm、P.it19 = 14 10 18、P.it20 = 14 13 4 cm、P.it21 = 27 20 6cm、P.it22 = 18 17 26cm、P.it23 = 18 13 14cm、P.it24 = 18 16 7 cm、P.it25 = 15 15 8 cm、P.it26 = 25 17 6 cm、P.it27 = 14 13 40cm、P.it28 = 18 10 6 cm、P.it29 = 19 18 7 cmを測る。このうちP.it5とP.it10は炉を中心として等距離に位置し、棟持柱としての機能が考えられる。

[炉] 住居中央部で土器埋設炉を1基検出した。炉の構築以前に小規模なフラスコ状土坑があり、その土坑の規模は96 85 43cmを測る。土坑を埋め戻したのち新たに掘り込みを加え、土器を設置し炉の機能を充足させている。設置した土器は、底部を打ち欠き、胴部を正位に設置し、土器内部に打ち欠いた底部片を倒位に設置している。炉使用時には、床面より13cm沈下した状態で使用している。

[付属施設] なし。

[堆積土] 19層に分層した。第1層は黒色土で自然堆積層である。第3層以下見野火山灰層、大谷火山灰層主体のロームブロック等が含まれる土層が見られ、人為堆積の可能性が考えられる。

2. 土坑

SK - 01(第21図)

[位置] グリッドMC - 247・248で検出した。

[重複] なし。

[平面形・規模] 円形を呈し、200 178 158cmを測る。また、底面は円形を呈し、180 172cmを測る。

[断面形・壁] 袋状を呈する。急激に内傾して立ち上がり、頸部からやや緩やかに外傾しながら立ち上がる。月見野火山灰層ならびに大谷火山灰層の地山を壁面としており、月見野火山灰層に相当する部分の壁面はやや脆弱で、大谷火山灰層に相当する部分の壁面は堅緻である。

[底面] 大谷火山灰層の地山を底面としており、平坦である。底面は堅緻である。底面中央部には23 21 11cmの小ピットを検出した。

[堆積土] 13層に分層した。大谷火山灰層ベースのローム土の堆積が主体で人為堆積と考えられる。

SK - 02(第21図)

[位置] グリッドMC - 249で検出した。

[重複] SK - 04と重複している。SK - 04の堆積土を切っており、本遺構の方が新しい。

[平面形・規模] 楕円形を呈し、182 140 102cmを測る。また、底面は不整形円形を呈し、233 210cmを測る。

[断面形・壁] 袋状を呈する。切り合いを生じている北壁側は立ち上がりやや不規則であるが、内傾して立ち上がり、頸部下半からやや角度を変え立ち上がる。北壁側は堆積土を壁面としており、脆弱である。また、それ以外の壁については、SK - 01と同様月見野火山灰層と大谷火山灰層の地山を壁面としており、月見野火山灰層部分はやや脆弱で、大谷火山灰層部分は堅緻である。

[底面] 大谷火山灰層の地山を底面としており、やや湾曲している。底面は堅緻である。

[堆積土] 16層に分層した。大谷火山灰層ならびに月見野火山灰層ベースのローム土が底部中央付近に堆積しており、また土層そのものも黒色土とローム土が混合して堆積しており人為堆積と考えられる。

SK - 03(第21図)

[位置] グリッドMC - 248で検出した。

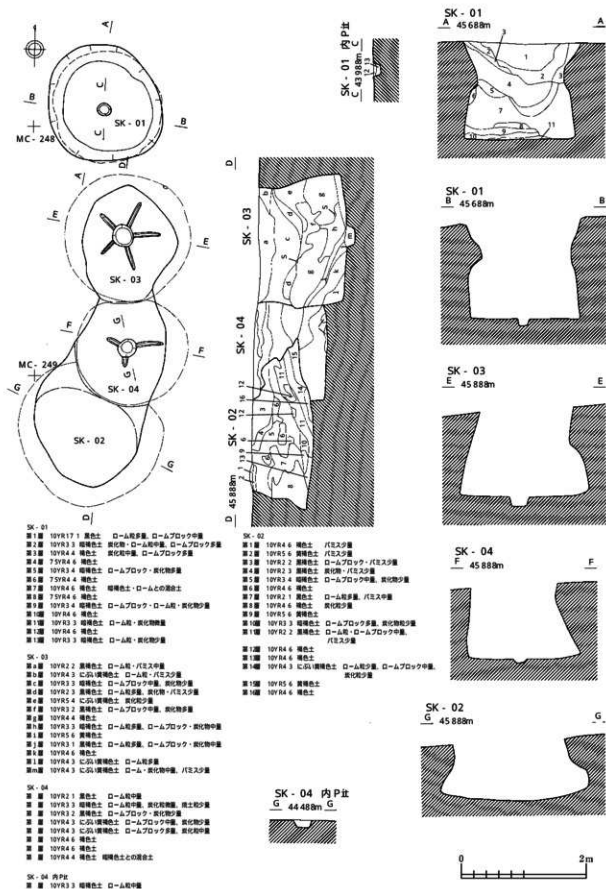
[重複] SK - 04と重複している。SK - 04の堆積土を切っており、本遺構の方が新しい。

[平面形・規模] 円形を呈し、186 150 142cmを測る。また、底面は不整形円形を呈し、206 200cmを測る。

[断面形・壁] 袋状を呈する。切り合いを生じている南壁側はやや外傾しながら立ち上がり頸部付近で一度内傾し、垂直に立ち上がる。また、西壁は内傾しながら立ち上がる。南壁側はSK - 04の堆積土を壁面としており、脆弱である。それ以外の壁についてはSK - 01・02と同様月見野火山灰と大谷火山灰層の地山を壁面としており、月見野火山灰層部分はやや脆弱で、大谷火山灰層部分は堅緻である。

[底面] 大谷火山灰層の地山を底面としており、ほぼ平坦である。底面は堅緻である。底面中央部には35 33 15cmの円形の小ピットを検出した。そのピットから放射状に浅い溝が5条伸びている。

[堆積土] 13層に分層した。大谷火山灰層ならびに月見野火山灰層のローム土が堆積の主体をなすが、



第2図 SK-01~04

壁の崩落土が主体であり、自然堆積と考えられる。

S K - 04(第 21図)

[位置] グリッドMC - 248・249で検出した。

[重複] S K - 02・03と重複している。いずれの土坑にも堆積土が切られており、本遺構の方が古い。

[平面形・規模] 切り合いのため開口部の形状は不明である。規模は、切り合いのため開口部長軸幅は不明で、短軸幅が140cm、深さが118cmを測る。また、底面は円形を呈し、177 173cmを測る。

[断面形・壁] 切り合いのため北壁ならびに南壁の形状は不明であるが、東西壁の形状は袋状を呈する。内傾して立ち上がり、東壁は頸部からやや外傾し、立ち上がる。月見野火山灰層ならびに大谷火山灰層の地山を壁面としており、月見野火山灰層の部分はやや脆弱で大谷火山灰層の部分については堅緻である。

[底面] 大谷火山灰層の地山を底面としており、やや起伏がある。底面は堅緻である。底面中央部には30 29 7 cmの円形の小ピットを検出した。そのピットから放射状に浅い溝が3条伸びている。

[堆積土] 重複により土層が改変を受けているが残存部分については8層に分層した。大谷火山灰層のローム土ならびに暗褐色土が堆積の主体を成しており、下層についてはローム土主体である。人為堆積と考えられる。

S K - 05(第 22図)

[位置] グリッドLV - 263・264で検出した。

[重複] なし。

[平面形・規模] 溝状を呈し、400 66 118cmを測る。

[断面形・壁] 南北壁の形状は袋状を呈し、東西壁の形状はV字形を呈する。南北壁は内傾しながら立ち上がり、頸部付近でやや角度を変え立ち上がる。また、東西壁は急激に外傾しながら立ち上がり、頸部付近でやや緩やかに立ち上がる。大谷火山灰層の地山を壁面としており、堅緻である。

[底面] 大谷火山灰層の地山を底面としており、やや起伏がある。底面は堅緻である。

[堆積土] 5層に分層した。月見野火山灰層のローム土が堆積しているが自然崩落による成層であり、自然堆積と考えられる。

S K - 06(第 22図)

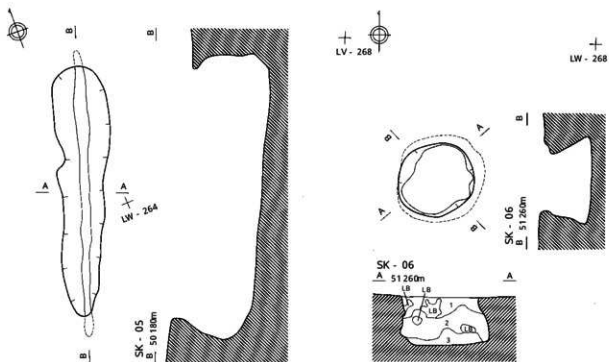
[位置] グリッドLV - 268で検出した。

[重複] なし。

[平面形・規模] 不整円形を呈し、126 116 78cmを測る。また、底面は不整円形を呈し、150 140cmを測る。

[断面形・壁] 袋状を呈する。北西壁ならびに南東壁側は直線的に内傾しながら立ち上がり、北東壁ならびに南西壁側はやや直立した形で立ち上がり、途中で緩やかに外傾しながら立ち上がる。大谷火山灰層の地山を壁面としており、堅緻である。

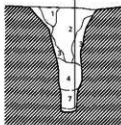
[底面] 大谷火山灰層の地山を底面としており、ほぼ平坦である。底面は堅緻である。



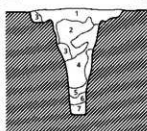
SK - 05
A 50.180m



SK - 07
B 51.700m

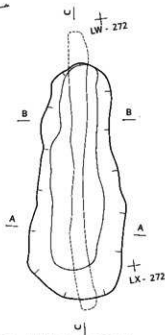


SK - 07
A 51.700m



- SK - 05
第1層 10YR3 3 暗褐色土 炭褐色土やや多量
第2層 10YR4 3 に近い黄褐色土 炭褐色土多量
第3層 10YR2 1 黒色土 に近い黄褐色土多量、パミス少量
第4層 10YR5 4 に近い黄褐色土 ローム少量
第5層 10YR17 1 黒色土 ロームブロックやや多量

- SK - 06
第1層 10YR4 3 に近い黄褐色土 ロームブロック、炭化物、粘土粒少量
第2層 10YR3 2 黄褐色土 ロームブロックやや多量、炭化物、粘土粒少量
第3層 10YR5 4 に近い黄褐色土



- SK - 07
第1層 10YR2 2 黄褐色土 黒色土・パミス少量
第2層 10YR17 1 黒色土 黄褐色土・パミス少量
第3層 10YR4 3 に近い黄褐色土 ローム多量、パミス少量
第4層 10YR3 2 黄褐色土 ローム・パミス少量
第5層 10YR5 4 に近い黄褐色土
第6層 10YR17 1 黒色土
第7層 7.5YR4 6 褐色土
第8層 10YR3 2 黄褐色土 黒色土少量



0 2m

第2図 SK-05(上段左)、06(上段右)、07(下段)

[堆積土 3層に分層した。月見野火山灰層ベースのローム土ならびにロームブロックを多量に含む黒褐色土層が堆積しており、人為堆積と考えられる。

S K - 07(第22図)

[位置 グリッドLW・LX - 272で検出した。

[重複 なし。

[平面形・規模 溝状を呈し、380 108 170cmを測る。

[断面形・壁 東西壁軸の形状は袋状を呈し、南北壁軸の形状は柱穴状を呈する。東西壁は、急激に内傾しながら立ち上がり、頸部付近で角度を変えて立ち上がる。南北壁は急激に外傾しながら立ち上がり、頸部付近で角度を変え、緩やかに外傾しながら立ち上がる。大谷火山灰層の地山を壁面としており、堅緻である。

[底面 大谷火山灰層の地山を底面としており、やや起伏がある。底面は堅緻である。

[堆積土 8層に分層した。最下層に黒褐色土の堆積が見られ、その上位に大谷火山灰層ベースのローム土の堆積が見られる。層序は崩落土による堆積が主体で自然堆積と考えられる。

S K - 08(第23図)

[位置 グリッドLU - 376・377で検出した。

[重複 なし。

[平面形・規模 溝状を呈し、300 38 102cmを測る。

[断面形・壁 北東ならびに南西壁軸の形状は袋状を呈し、北西壁ならびに南東壁軸の形状は柱穴状を呈する。北東ならびに南西壁は、内傾しながら直線的に立ち上がる。また、北西壁ならびに南東壁は垂直に近い形で直線的に立ち上がる。月見野火山灰層ならびに大谷火山灰層の地山を壁面としており、月見野火山灰層の部分はやや脆弱であり、大谷火山灰層の部分は堅緻である。

[底面 大谷火山灰層の地山を底面としており、やや起伏がある。底面は堅緻である。

[堆積土 4層に分層した。上層に黒褐色土、中層に暗褐色土、下層に黒褐色土が堆積しており自然堆積と考えられる。

S K - 09(第23図)

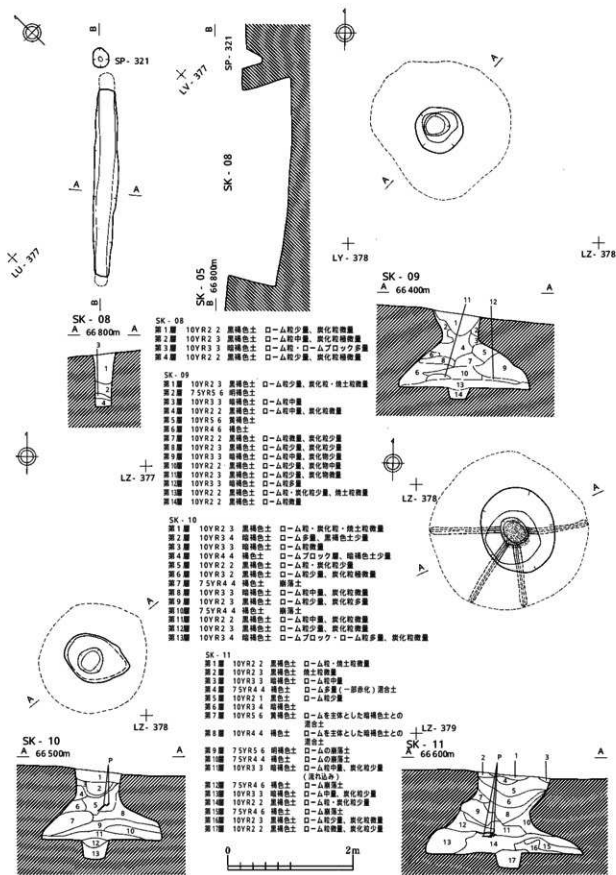
[位置 グリッドLY - 377で検出した。

[重複 S K - 10、S P - 207と重複している。S P - 207との関係は、本遺構がS P - 207の土層に切られており、本遺構の方が古い。また、S K - 10との関係は、土層崩落のため新旧関係は不明である。

[平面形・規模 平面形は円形を呈し、76 74 128cmを測る。底面は不整円形を呈し、226 202cmを測る。

[断面形・壁 袋状を呈する。内傾して立ち上がり、頸部付近で角度を変え外傾しながら立ち上がる。大谷火山灰層の地山を壁面としており、堅緻である。

[底面 大谷火山灰層の地山を底面としており、ほぼ平坦である。底面は堅緻である。底面中央部に40 35 17cmの小ピットを検出した。



第23図 SK-08(上段左) 09(上段右) 10(下段左) 11(下段右)

[堆積土 14層に分層した。壁の崩落が生じた堆積状況を示している。黒褐色土が主体を占める堆積状況をしており自然堆積と考えられる。

SK - 10(第23図)

[位置 グリッドLY - 377で検出した。

[重複 SK - 09と重複している。前述のとおり新旧関係は不明である。

[平面形・規模 開口部の形状は不整長楕円形を呈し、104 76 116cmを測る。底面は隅丸方形を呈し、186 170cmを測る。

[断面形・壁 袋状を呈する。内傾して立ち上がり、頸部付近でやや直立に近い形で外傾しながら立ち上がる。大谷火山灰層の地山を壁面としており、堅緻である。

[底面 大谷火山灰層の地山を底面としており、ほぼ平坦である。底面は堅緻である。底面中央部に43 41 30cmの小ビットを検出した。

[堆積土 13層に分層した。壁が崩落した堆積状況を示している。自然堆積と考えられる。

SK - 11(第23図)

[位置 グリッドLZ - 377・378で検出した。

[重複 なし。

[平面形・規模 楕円形を呈し、140 116 132cmを測る。底面の形状は円形を呈し、248 247cmを測る。

[断面形・壁 袋状を呈する。西壁側の立ち上がりは段状を呈し、頸部付近ではやや内傾して東壁側によった形で立ち上がる。大谷火山灰層の地山を壁面としており、堅緻である。

[底面 大谷火山灰層の地山を底面としており、やや起伏がある。底面は堅緻である。底面中央部に49 40 25cmのビットがあり、そこから放射状に浅い溝が壁際まで伸びている。

[堆積土 17層に分層した。壁が崩落した堆積状況を示している。自然堆積と考えられる。4層は焼土層である。

SK - 12(第24図)

[位置 グリッドMB - 377で検出した。

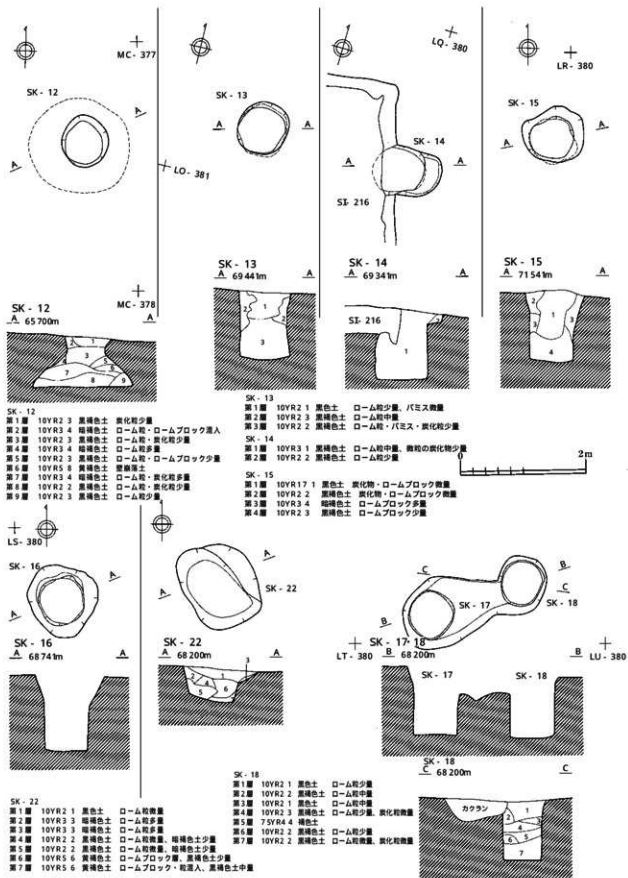
[重複 なし。

[平面形・規模 楕円形を呈し、84 74 82cmを測る。底面の形状は円形を呈し、160 158cmを測る。

[断面形・壁 袋状を呈する。内傾して立ち上がり頸部付近で外傾しながら立ち上がる。月見野火山灰層ならびに大谷火山灰層の地山を壁面としており、月見野火山灰層の部分はやや脆弱で大谷火山灰層の部分は堅緻である。

[底面 大谷火山灰層の地山を底面としており、ほぼ平坦である。底面は堅緻である。

[堆積土 9層に分層した。壁の崩落が生じた堆積状況を示している。自然堆積と考えられる。



第24図 SK-12~15(上段) 16~18 22(下段)

S K - 13(第 24 図)

[位 置 グリッド L O - 380 で検出した。

[重 複 なし。

[平面形・規模 円形を呈し、88 82 111cm を測る。

[断面形・壁 円筒状を呈する。垂直に近い形で急激に立ち上がる。大谷火山灰層の地山を壁面としており、堅緻である。

[底 面 大谷火山灰層の地山を底面としており、やや湾曲している。底面は堅緻である。

[堆積土 3 層に分層した。上層の壁際にはローム粒が多く含まれる土層の堆積が見られる。この堆積状況は S K - 15 等にも見られ、人為堆積と考えられる。

S K - 14(第 24 図)

[位 置 グリッド L P ・ L Q - 380 で検出した。

[重 複 S I - 216 と重複している。本遺構の堆積土が S I - 216 により切られているため、本遺構の方が古い。

[平面形・規模 切り合いのため開口部の形状は不明であるが底面は楕円形を呈する。規模は、開口部の長軸幅が不明で、短軸幅は 80cm、深さは 114cm を測る。

[断面形・壁 円筒形を呈し、東壁側は二段落ちの形状を持つ。ほぼ直立した形で立ち上がる。大谷火山灰層の地山を壁面としており、堅緻である。

[底 面 大谷火山灰層の地山を底面としており、ほぼ平坦である。底面は堅緻である。

[堆積土 切り合いのため西壁上部の堆積状況は不明であるが、残存している部分については 2 層に分層した。ローム粒を中量含み、人為堆積と考えられる。

S K - 15(第 24 図)

[位 置 グリッド L Q ・ L R - 380 で検出した。

[重 複 なし。

[平面形・規模 不整円形を呈し、96 76 116cm を測る。

[断面形・壁 緩い袋状を呈する。垂直に近い形で急激に立ち上がり、頸部付近からやや外傾して立ち上がる。大谷火山灰層の地山を壁面としており、堅緻である。

[底 面 大谷火山灰層の地山を底面としており、やや起伏がある。底面は堅緻である。

[堆積土 4 層に分層した。S K - 13 の堆積状況と似通った堆積をしている。人為堆積と考えられる。

S K - 16(第 24 図)

[位 置 グリッド L S - 380 で検出した。

[重 複 なし。

[平面形・規模 不整円形を呈し、121 112 123cm を測る。

[断面形・壁 緩い袋状を呈する。垂直に近い形で急激に立ち上がり、頸部付近から外傾しながら立ち上がる。大谷火山灰層の地山を壁面としており、堅緻である。

[底 面 大谷火山灰層の地山を底面としており、ほぼ平坦である。底面は堅緻である。

SK - 17(第24図)

[位置] グリッドLT - 379で検出した。

[重複] なし。東壁側の開口部上面は攪乱により削平されている。

[平面形・規模] 開口部上面は攪乱により削平を受けているため不明であるが、底面の形状は円形を呈する。開口部短軸幅は110cm、深さは110cmを測る。

[断面形・壁] 攪乱により削平を受けているため東壁上面の形状は不明であるが、他の壁は円筒形を呈する。垂直に近い形で急激に立ち上がり、頸部付近から外傾しながら立ち上がる。大谷火山灰層の地山を壁面としており、堅緻である。

[底面] 大谷火山灰層の地山を底面としており、ほぼ平坦である。底面は堅緻である。

SK - 18(第24図)

[位置] グリッドLT - 379で検出した。

[重複] なし。西壁側の開口部上面一部が攪乱により削平されている。

[平面形・規模] 開口部上面の一部が攪乱により削平を受けているが、ほぼ円形を呈するものと推定され、96(76)98cmを測る。

[断面形・壁] 攪乱により削平を受けているため西壁上面の形状は不明であるが、他の壁は円筒状を呈する。垂直に近い形で急激に立ち上がる。大谷火山灰層の地山を壁面としており、堅緻である。

[底面] 大谷火山灰層の地山を底面としており、やや湾曲している。底面は堅緻である。

[堆積土] 西壁側が攪乱により削平を受けており層序に影響があるが、残存部分については7層に分層した。中層にローム土の堆積が見られるが、壁の崩落として捉えることができる。自然堆積と考えられる。

SK - 19(第25図)

[位置] グリッドLU - 379で検出した。

[重複] なし。

[平面形・規模] 円形を呈し、80 78 116cmを測る。

[断面形・壁] 円筒形を呈する。垂直に近い形で急激に立ち上がる。大谷火山灰層の地山を壁面としており、堅緻である。

[底面] 大谷火山灰層の地山を底面としており、やや湾曲している。底面は堅緻である。

[堆積土] 9層に分層した。SK - 13と似通った堆積をしている。人為堆積と考えられる。

SK - 20(第25図)

[位置] グリッドLV - 378で検出した。

[重複] なし。

[平面形・規模] 円形を呈し、88 81 102cmを測る。

[断面形・壁] 円筒形を呈する。垂直に近い形で急激に立ち上がる。大谷火山灰層の地山を壁面としており、堅緻である。

[底面] 大谷火山灰層の地山を底面としており、やや湾曲している。底面は堅緻である。

[堆積土 10層に分層した。一般的にローム土が混入しており人為堆積と考えられる。

S K - 21(第 25図)

[位置 グリッドLW - 378で検出した。

[重複 なし。

[平面形・規模 隅丸方形を呈し、66 65 78cmを測る。

[断面形・壁 円筒形を呈する。垂直に近い形で急激に立ち上がる。大谷火山灰層の地山を壁面としており、堅緻である。

[底面 大谷火山灰層の地山を底面としており、やや傾斜を持つ。底面は堅緻である。

[堆積土 3層に分層した。S K - 13と似通った堆積をしている。人為堆積と考えられる。

S K - 22(第 24図)

[位置 グリッドL S - 379で検出した。

[重複 なし。

[平面形・規模 不整長楕円形を呈し、156 120 62cmを測る。

[断面形・壁 擂鉢状を呈する。東壁側は、やや急激に外傾しながら立ち上がり、頸部付近で角度を変え、緩やかに外傾しながら立ち上がる。それ以外の壁は外傾しながら立ち上がる。大谷火山灰層の地山を壁面としており、堅緻である。

[底面 大谷火山灰層の地山を底面としており、起伏がある。底面は堅緻である。

[堆積土 7層に分層した。一般的にローム土が混入しており人為堆積と考えられる。

S K - 23(第 25図)

[位置 グリッドL Q - 387で検出した。

[重複 なし。

[平面形・規模 不整円形を呈し、89 68 150cmを測る。底面の形状は楕円形を呈し、203 187cmを測る。

[断面形・壁 袋状を呈する。内傾しながら立ち上がり、頸部付近で角度を変え、外傾しながら立ち上がる。大谷火山灰層の地山を壁面としており、堅緻である。

[底面 大谷火山灰層の地山を底面としており、ほぼ平坦である。底面は堅緻である。底面中央部に35 31 9 cmの小ピットを検出した。

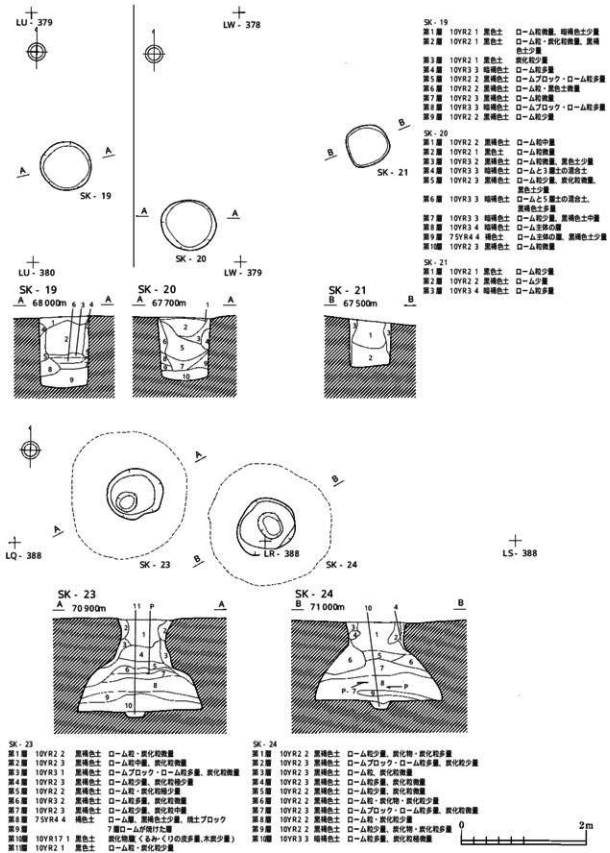
[堆積土 11層に分層した。10層から炭化物ならびに炭化した堅果類(くるみ・くり)を多量に検出した。その上層についてはローム土ならびに焼土ブロックが混入しており人為堆積と考えられる。

S K - 24(第 25図)

[位置 グリッドL Q・L R - 387・388で検出した。

[重複 なし。

[平面形・規模 不整円形を呈し、98 82 127cmを測る。底面の形状は不整楕円形を呈し、200 195cmを測る。



第25図 SK-19(上段左) 20 21(上段中央) 23 24(下段)

[断面形・壁 袋状を呈する。内傾しながら立ち上がり、頸部付近で角度を変え、外傾しながら立ち上がる。大谷火山灰層の地山を壁面としており、堅緻である。

[底面 大谷火山灰層の地山を底面としており、ほぼ平坦である。底面は堅緻である。底面中央部に 44 35 12cmの小ビットがある。

[堆積土 10層に分層した。7層中にロームブロックの混合層が見られ、人為堆積と考えられる。上層については自然堆積と考えられる。

SK - 25(第26図)

[位置 グリッドLT - 386で検出した。

[重複 なし。

[平面形・規模 円形を呈し、172 160 92cmを測る。底面の形状は不整円形を呈し、200 195cmを測る。

[断面形・壁 袋状を呈する。西壁側はくびれが緩く、直立に近く内傾しながら立ち上がる。他の壁は内傾しながら立ち上がり、頸部付近で外傾しながら立ち上がる。大谷火山灰層の地山を壁面としており、堅緻である。

[底面 大谷火山灰層の地山を底面としており、やや起伏がある。底面は堅緻である。

[堆積土 10層に分層した。層層において壁の崩落が生じている。上層の堆積土中には焼土粒が含まれる。自然堆積と考えられる。

SK - 26(第26図)

[位置 グリッドLU - 387で検出した。

[重複 なし。

[平面形・規模 円形を呈し、146 136 114cmを測る。底面の形状は不整円形を呈し、170 165cmを測る。

[断面形・壁 頸部が窄まった袋状を呈する。内傾して立ち上がり、頸部付近で緩やかに外傾しながら立ち上がる。大谷火山灰層の地山を壁面としており、堅緻である。

[底面 大谷火山灰層の地山を底面としており、起伏がある。底面は堅緻である。

[堆積土 6層に分層した。堆積土全般にローム粒が見られる。自然堆積と考えられる。

SK - 27(第26図)

[位置 グリッドLS - 388・389で検出した。

[重複 なし。

[平面形・規模 不整形を呈し、142 124 135cmを測る。底面の形状は不整円形を呈し、190 168cmを測る。

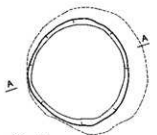
[断面形・壁 袋状を呈する。内傾して立ち上がり、頸部付近でやや直立に近い形で外傾しながら立ち上がる。大谷火山灰の地山を壁面としており、堅緻である。

[底面 大谷火山灰層の地山を底面としており、やや起伏がある。底面は堅緻である。

[堆積土 16層に分層した。最下層のビット覆土中には砂質土が混入している。部分的に壁の崩落が



LT-386



SK-25

A 70 500m

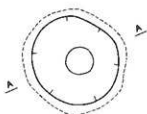


SK-25

- 第1層 10YR2 1 黒色土 ローム粒・炭化粒・焼土粒種微量混入
 第2層 10YR2 1 黒色土 焼土粒多量
 第3層 10YR2 1 黒色土 ローム・焼土ブロック・焼土粒微量、炭化物種微量
 第4層 10YR2 2 黒褐色土 ローム粒微量、炭化粒・焼土粒種微量、黒色土中量
 第5層 10YR2 2 黒褐色土 ローム粒・炭化粒少量
 第6層 10YR2 3 黒褐色土 ローム粒中量、炭化物種微量
 第7層 10YR2 2 黒褐色土 ローム粒中量、炭化物種微量
 第8層 10YR5 4暗褐色土と10YR4 4暗褐色土との混合土 黒褐色土混入
 第9層 10YR4 4 褐色土 ローム層
 第10層 10YR2 2 黒褐色土 ローム粒少量、炭化粒多量



LU-388



SK-26

A 71 000m

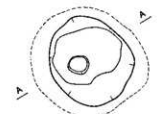


SK-26

- 第1層 10YR2 3 黒褐色土 ローム粒微量
 第2層 10YR2 2 黒褐色土 ローム粒少量、炭化粒微量、焼土粒種微量
 第3層 10YR4 4暗褐色土と10YR2 2暗褐色土との混合土
 第4層 10YR2 1 黒色土 ローム粒中量、炭化粒・焼土粒微量
 第5層 10YR3 3 暗褐色土 ローム粒多量、炭化粒微量
 第6層 10YR2 2 黒褐色土 ローム粒少量

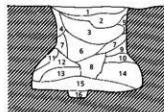


LT-389



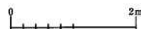
SK-27

A 71 100m



SK-27

- 第1層 10YR2 3 黒褐色土 ローム粒少量、暗褐色土混入
 第2層 10YR2 3 黒褐色土 ローム粒多量、暗褐色土多量
 第3層 10YR2 3 黒褐色土 ローム粒少量
 第4層 10YR2 3 黒褐色土 ローム粒多量
 第5層 10YR2 3 暗褐色土 ローム粒・ロームブロック多量
 第6層 10YR2 2 黒褐色土 ローム粒中量
 第7層 10YR2 3 黒褐色土 ローム粒・ロームブロック少量
 第8層 10YR2 2 黒褐色土 ローム粒少量
 第9層 10YR5 4 じいし黄褐色土 黒褐色土混入
 第10層 10YR2 3 黒褐色土 ローム中量
 第11層 10YR2 3 黒褐色土 ロームブロック多量
 第12層 10YR2 3 黒褐色土 ロームブロック多量、ローム粒少量
 第13層 10YR2 3 黒褐色土 ローム粒・ロームブロック多量
 第14層 10YR2 3 黒褐色土 ロームブロック多量
 第15層 10YR2 1 黒色土 ローム少量
 第16層 10YR2 2 黒褐色土 砂質土混入、ローム少量



第26図 SK-25(上段左)、SK-26(上段右)、SK-27(下段)

生じている。自然堆積と考えられる。

S K - 28(第 27・ 28図)

[位 置 グリッド L Y ・ L Z - 388で検出した。

[重 複 S I - 04・ 05, S K - 29, S K - 30と重複している。新旧関係は S I - 04・ 05の炉を S K - 29が切っている。S K - 29との新旧関係は 16層の大谷火山灰層のローム土が両遺構にまたがって堆積しており同時廃棄の可能性がある。また、S K - 30との関係は本遺構が S K - 30の堆積土を切っており、本遺構の方が新しい。

[平面形・規模 切り合いのため、開口部の形状・規模は不明である。深さは 176cmを測る。底面の形状についても切り合いのため南壁側が不明であるが、残存部から不整形円形を呈すると考えられ、196 (165) cmを測る。

[断面形・壁 袋状を呈する。南壁側は切り合いのため不明であるが、東西壁は内傾して立ち上がり、壁の低い位置から角度を変え、直立に近い形で立ち上がる。大谷火山灰層の地山を壁面としており、堅緻である。

[底 面 大谷火山灰層の地山を底面としており、堅緻である。底面中央部に 31 30 10cmの小ピットを検出した。

[堆積土 S K - 29と同時に堆積しており、底面ピットの堆積以外共通層として 17層に分層した。16層は大谷火山灰層ベースのローム土で最大 110cm堆積しており、堅くしまっている。上層から中層にかけて多量の縄文土器が廃棄されており、この堆積は S I - 04・ 05の 1〜6層の土層に関連する。人為堆積と考えられる。

S K - 29(第 27・ 28図)

[位 置 グリッド L Y - 387, L Y ・ L Z - 388で検出した。

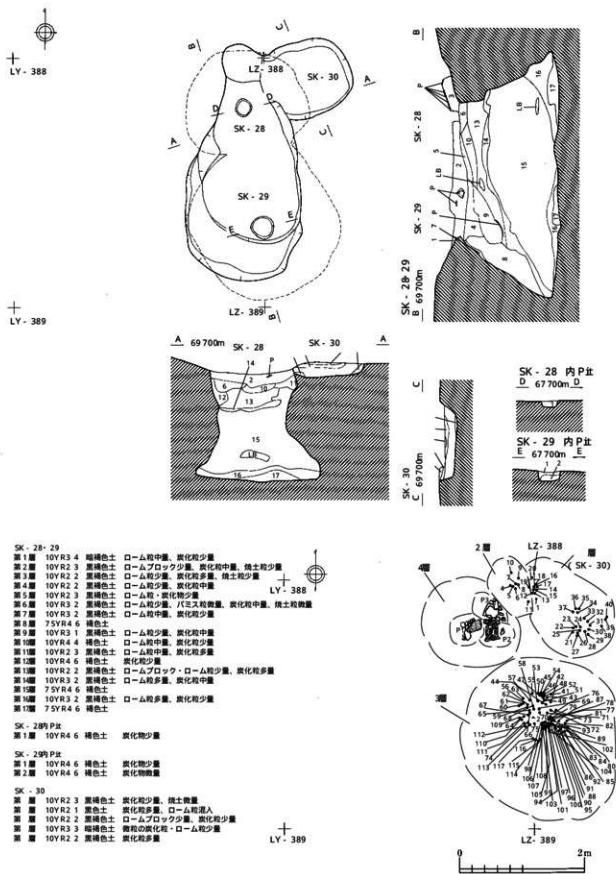
[重 複 S I - 04・ 05, S K - 28と重複している。新旧関係は S I - 04・ 05の炉を本遺構が切っており、本遺構の方が新しい。また、S K - 28との新旧関係は、堆積が両遺構にまたがっており、同時廃棄の可能性がある。

[平面形・規模 切り合いのため北壁側の開口部の形状は不明である。規模は東西軸で 134cm、深さ 176cmを測る。底面の形状についても切り合いのため北壁側が不明であるが、残存部から不整形円形を呈すると考えられ、240 221cmを測る。

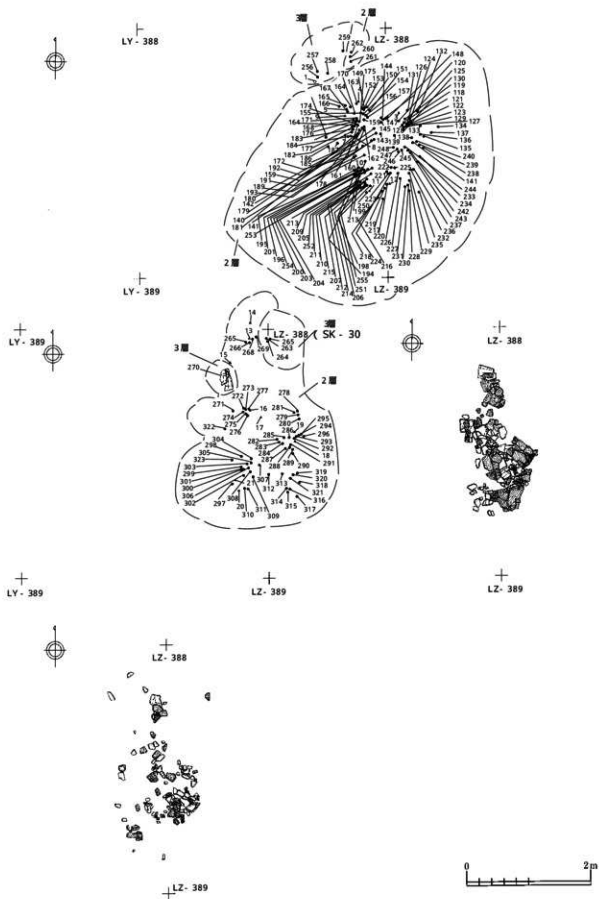
[断面形・壁 袋状を呈する。北壁側は切り合いのため不明であるが、西壁はやや垂直に近い形で立ち上がる。東壁は内傾しながら立ち上がり、頸部付近で角度を変え、垂直に近い形で立ち上がる。大谷火山灰層の地山を壁面としており、堅緻である。

[底 面 大谷火山灰の地山を底面としており、堅緻である。底面中央部に 37 36 16cmの小ピットを検出した。

[堆積土 S K - 28と同様である。小ピットについては炭化粒を含む大谷火山灰層ベースのローム土主体の土層が堆積している。



第2図 SK-28~30



第 28 図 SK-28~30

SK-30(第27・28図)

[位置] グリッドLZ-387・388で検出した。

[重複] SI-04・05ならびにSK-28と重複している。新旧関係は、本遺構の堆積土がSI-04・05の土層を切っており、またSK-28の土層に切られておりSI-04・05<SK-30<SK-28である。

[平面形・規模] 切り合いのため西壁側の形状は不明であるが、楕円形を呈するものと考えられる。長軸幅は不明で、短軸幅は120cm、深さ28cmを測る。

[断面形・壁] 逆台形状を呈する。西壁側は切り合いのため形状は不明であるが、他の壁はやや丸みを帯び外傾しながら立ち上がる。大谷火山灰層の地山を壁面としており、堅緻である。

[底面] 大谷火山灰層の地山を底面としており、やや傾斜を持つ。底面は堅緻である。

[堆積土] 5層に分層した。成層においてはSI-04・05の第1〜6層に関連がある。自然堆積と考えられる。

SK-31(第29図)

[位置] グリッドMQ-391で検出した。

[重複] なし。

[平面形・規模] 不整形円形を呈し、124 114 101cmを測る。

[断面形・壁] 円筒形状を呈する。垂直に近い形で外傾しながら立ち上がる。大谷火山灰層の地山を壁面としており、堅緻であるが、底部付近の壁面は含水量が多く、やや脆弱である。

[底面] 大谷火山灰層の地山を底面としており、やや起伏がある。底面は含水量が多く、やや脆弱である。また、底面中央部よりやや西壁よりの位置から16 15 16cmの小ピットを検出した。

[堆積土] 5層に分層した。第1、2層については自然堆積である。第3、4層については大谷火山灰層主体のローム土が堆積している。人為堆積の可能性がある。

SK-32(第29図)

[位置] グリッドMQ-393で検出した。

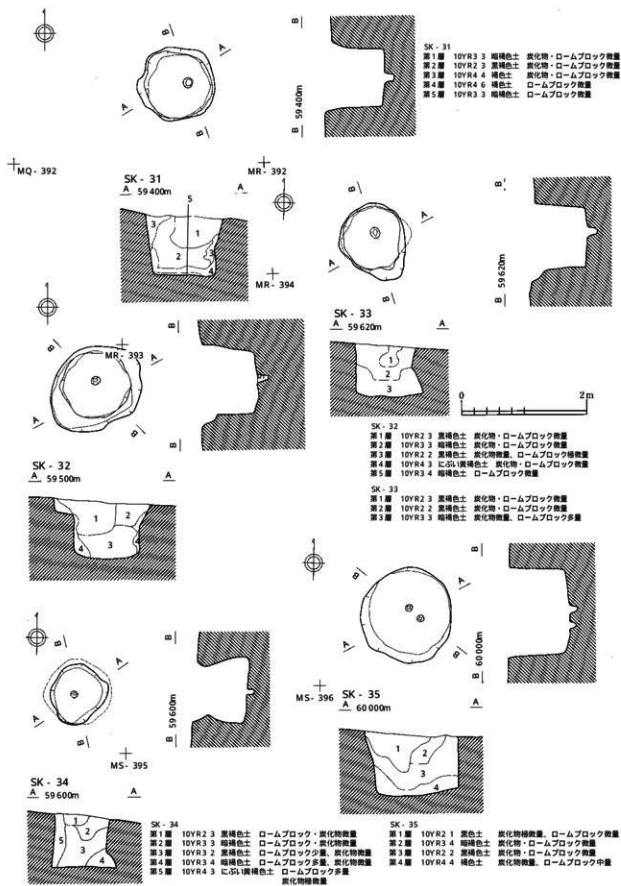
[重複] なし。

[平面形・規模] 不整形円形を呈し、160 126 100cmを測る。

[断面形・壁] 円筒形状を呈する。西壁側は二段落ちの形状を呈する。垂直に近い形で外傾しながら立ち上がる。大谷火山灰層の地山を壁面としており、堅緻であるが、底部付近の壁面は含水量が多く、やや脆弱である。

[底面] 大谷火山灰層の地山を底面としており、やや起伏がある。底面は含水量が多く、やや脆弱である。また、底面中央部よりやや北壁側の部分から15 14 18cmの小ピットを検出した。

[堆積土] 5層に分層した。壁の崩落が生じている。堆積土中に炭化粒、ロームブロック等が見られる。自然堆積と考えられる。



第29図 SK-31~35

SK - 33(第29図)

[位置 グリッドMR - 393・394で検出した。

[重複 なし。

[平面形・規模 不整形を呈し、126 104 88cmを測る。

[断面形・壁 緩い袋状を呈する。南壁側は二段落ちの形状を呈する。西壁は内傾しながら立ち上がり、頸部付近で垂直に近い形で外傾しながら立ち上がる。南壁は垂直に近い形で外傾しながら立ち上がり、頸部付近で角度を変え、緩やかに外傾しながら立ち上がる。他の壁は垂直に近い形で外傾しながら立ち上がる。大谷火山灰層の地山を壁面としており、堅緻であるが、底部付近の壁面は含水量が多く、やや脆弱である。

[底面 大谷火山灰層の地山を底面としており、起伏がある。底面は含水量が多く、やや脆弱である。また、底面中央部よりやや北東側の部分から18 15 16cmの小ピットを検出した。

[堆積土 3層に分層した。堆積土中に炭化粒、ロームブロック等が見られる。自然堆積と考えられる。

SK - 34(第29図)

[位置 グリッドMR - 394で検出した。

[重複 なし。

[平面形・規模 不整形を呈し、98 90 88cmを測る。

[断面形・壁 袋状を呈する。内傾しながら立ち上がり、頸部付近で外傾しながら立ち上がる。西壁はやや垂直に近い形で外傾しながら立ち上がる。大谷火山灰層の地山を壁面としており堅緻であるが、底部付近の壁面は含水量が多く、やや脆弱である。

[底面 大谷火山灰層の地山を底面としており、ほぼ平坦である。底面は含水量が多く、やや脆弱である。また、底面中央部から11 10 12cmの小ピットを検出した。

[堆積土 5層に分層した。土層崩落による成層である。自然堆積と考えられる。

SK - 35(第29図)

[位置 グリッドMS - 395で検出した。

[重複 なし。

[平面形・規模 円形を呈し、154 150 107cmを測る。

[断面形・壁 鍋底状を呈する。垂直に近い形で外傾しながら立ち上がる。大谷火山灰層の地山を壁面としており、堅緻であるが、底部付近の壁面は含水量が多く、やや脆弱である。

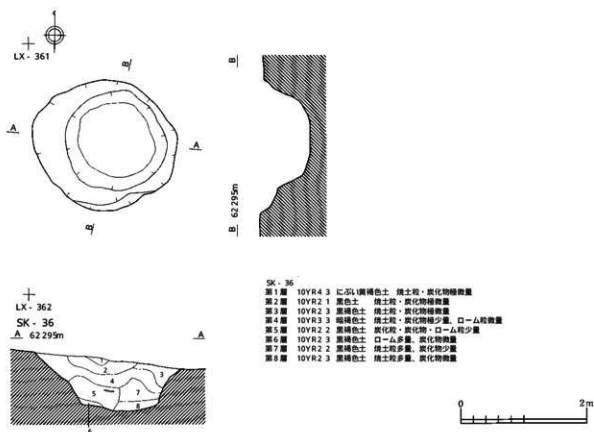
[底面 大谷火山灰層の地山を底面としており、東壁から西壁にかけて傾斜がある。底面は含水量が多く、やや脆弱である。また、底面中央部よりやや北東側から11 11 15cm、東側から13 11 10cmの小ピットを検出した。

[堆積土 4層に分層した。底面付近は壁の崩落による成層である。自然堆積と考えられる。

SK - 36(第30図)

[位置 グリッドLX - 36Tで検出した。

[重複 なし。



第30図 SK - 36

[平面形・規模 楕円形を呈し、230 210 90cmを測る。

[断面形・壁 掘鉢状を呈する。段状に立ち上がり、壁面は堅緻である。

[底面 大谷火山灰層の地山を底面としており、窪んだ形状を呈している。底面は堅緻である。

[堆積土 8層に分層した。第1層～4層と5層～8層の成層が異なっており、土層には平安時代の遺物の混入が見られる。第5層中から縄文時代晩期の土器片が出土している。

第3節 出土遺物

1. 土器

縄文土器は、ダンポール16箱の出土があった。縄文時代の遺構に伴った遺物のほか、平安時代の住居跡の覆土中に混入した出土例もある。

記述に際して、基本的に時代毎に群に大別し、型式毎に類別したが出土土器の主体が縄文時代前期末葉から中期初頭に相当するものであり、該期の土器については過渡期の土器として群として取り扱い、文様構成により細別した。細別に際して胴部地文のみのものについてはxという属性を付与した。器種については文様構成を主属性としたため、付随させる提示方法をとった。縄文時代に帰属する遺構内出土のものについては遺構ごとに資料提示した。また、平安時代の覆土中から出土した遺物については、遺構外資料と同等の取扱いとした。

第 群 縄文時代前期末葉から中期初頭に帰属するもの

1 類 円筒下層 d₂ 式-円筒上層 a 式に相当する資料

a. 口縁部文様帯が圧痕文により構成されるもの。

縄ならびに結条体の側面圧痕ならびに縄の背面圧痕等により文様帯が構成されるもの。

横位、斜位、縦位等を組み合わせ構成される。側面圧痕間に背面圧痕や半裁竹管による刺突文が組み合わせられる場合がある。

胴部文様帯との区画は綾結文（結節回転文）により区画されるものが多く見られる。胴部地文については、単節ならびに複節斜縄文や羽状縄文（LR・RL結束第1種）ならびに木目状燃糸文（単軸結条体第1A類）等が施されるものがほとんどであり、この傾向はb～dについても同様である。

b. 口縁部文様帯が圧痕文+貼付隆帯により構成されるもの。

文様帯の構成に貼付隆帯が加わり、aと同様縄ならびに結条体の側面圧痕ならびに縄の背面圧痕等により文様帯が構成されるもの。

波状口縁を呈するものが多く見られ、貼付隆帯については、穿状、逆穿状、逆T字状、ボタン状が主に見られ、細い粘土紐の貼付隆帯については、縦位、横位ならびに斜位を組み合わせ構成される場合も見られる。貼付隆帯部分には側面圧痕文が主に施される。また、構状把手状の貼付も見られる。

c. 口縁部文様帯が圧痕文+微隆帯により構成されるもの。

口頸部との境界部分に微隆帯をつくり出し、微隆帯部分には縄の横位の側面圧痕や半裁竹管による刺突文等が施される。

d. 口縁部文様帯が回転文により構成されるもの

口縁部文様帯が綾結文のみにより構成されるものでSK-11から出土した（第44図3）。

e. 口縁部文様帯が無いもの。

胴部地文と同様の構成が口縁部にも施されるのみのもの。あるいは第 44 図 2 に図示した S K - 11 出土の土器のように胴部にヘラ状の工具により文様が描かれ、口縁部は斜縄文のみという構成のものについても含めた。また、第 51 図 1、2、6 のように口縁部に地文を施した後（一部貼付隆帯が伴うものもある。）口縁部の地文を消さずに圧痕文を施す土器が数点出土した。出土状況が、製品として使用され、廃棄された状況であるため、文様構成として完成したものとして捉えられることができるが、明確な文様帯構成を作り上げたとは考えにくく、本類に取り扱った。

x . 胴部地文のみのもの。

口縁部文様帯の情報が欠損等により捉えられないものを一律して取り扱った。胎土等の特徴から明確に判断できないものについても含まれる。

第 群 縄文時代中期に属するもの

- 1 類 円筒上層 b 式に相当する資料
- 2 類 大木 8 b 式併行期に相当する資料

第 群 縄文時代後期に属するもの

- 1 類 十腰内 b 式に相当する資料

第 群 縄文時代晩期に属するもの

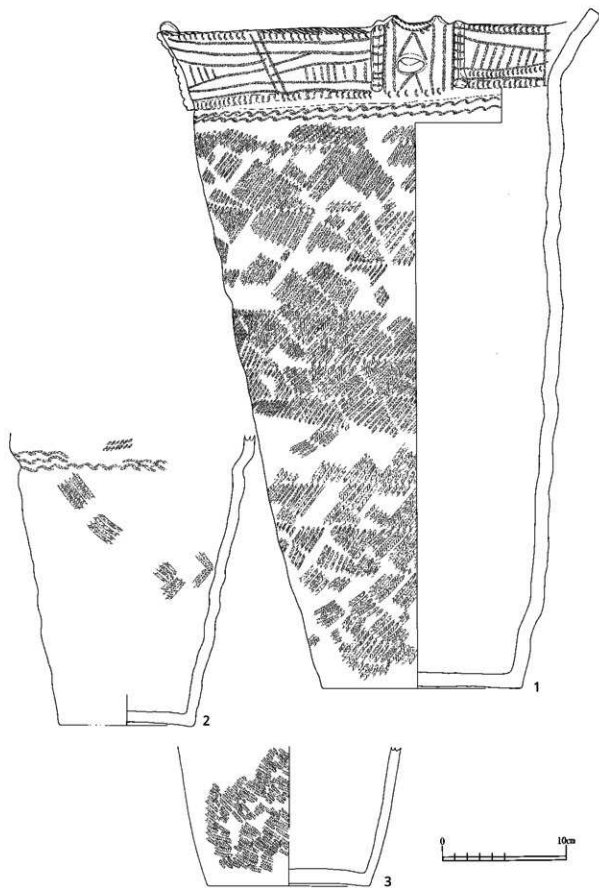
- 1 類 大洞 B 式に相当する資料
- 2 類 大洞 A ~ A 式に相当する資料

遺構内出土土器

S I - 02 (第 31 図)

3 点図示した。第 31 図 1 は覆土第 2 層から出土した土器で、第 群 1 類 b に属する。口唇部に R 斜縄文が施される。縦位の貼付隆帯を施した後、口縁部文様帯は横位ならびに斜位に R 圧痕を施し、口唇部ならびに頸部境界部分に半裁竹管を刺突し、さらに縦位の側面圧痕文を施している。

貼付隆帯は 2 個一単位で 4 箇所に施され、隆帯で区画された中央部分は孔が穿たれ、縦位ならびに斜位の側面圧痕文により構成される。口縁部は波状を呈する。口縁部と胴部の文様の区画帯には綾絡文が施される。胴部の地文は羽状縄文が施される。2 は土器埋設炉として使用された土器で、口縁部上半部が欠損している。摩滅が激しく、詳細について不明な部分も否めないが、第 群 1 類 a に属したものと考えられる。摩滅が激しいため、図上で表現できなかった部分もあるが、口縁部文様帯は R L 圧痕が施され、頸部との区画については綾絡文が施されたものと考えられる。胴部地文については羽状縄文が施されたものと考えられる。3 は覆土出土の胴部下半から底部にかけての土器で、第 群 1 類 x に属する。胴部には R L 斜縄文が施され、胎土中に纖維の混入痕が見られる。



第3圖 SI 02

S I - 03(第32図)

9点図示した。第32図1は床面直上から出土した土器で、第群1類bに属する。波状口縁を呈し、口唇部には工具等によるキザミが施される。口縁部文様帯は波状口縁部の頂部の位置に欠損しているがT字状の隆帯、ならびにRの鋸歯状圧痕文の接点部分に瘤状の隆帯が施され、横位ならびに縦位の側面圧痕文が施される。口頸部と胸部地文との区画帯は明瞭でなく、胸部地文が残存するのみである。胸部地文は多輪結条体が施され、口縁部文様帯の隆帯が貼られた部分の直下の胸部地文上に綾結文を縦位に施している。2は覆土出土の口縁部片で、第群1類bに属する。口唇部にはL R斜縄文が施されている。口縁部文様帯は破片資料であるため詳細は不明であるが、細い粘土紐を貼付け、L R圧痕が縦位に施される。隆帯以外の部分についてもL R圧痕が横位に施されている。3は埋設炉第2層出土の口縁部片で第群1類aに属すると考えられる。波状口縁を呈し、口唇部にはL R斜縄文が施される。口縁部文様帯はL R圧痕を斜位ならびに縦位に組み合わせ施している。4は床面出土の口縁部片で、3と同一個体の可能性が考えられる資料である。5は埋設炉出土の口縁部片で第群1類bに属する。波状口縁を呈し、一部欠損しているが、逆Y字状の貼付隆帯が施され、L圧痕が三叉状に施される。隆帯以外の部分にはL圧痕が横位に施される。口縁部の幅が狭く、比較的小型品の可能性が考えられる。胸部地文はL R斜縄文が施される。6はPⅡ2覆土第3層出土の口縁部片で、第群1類aに属する。風化の度合いが強く摩滅が著しいが、口縁部文様帯はL圧痕と半裁竹管を3段施している。7は、土器埋設炉覆土第6層から出土した胸部片で、9に図示した土器埋設炉に使用された土器の破片の一部であることが考えられる。いずれも第群1類xに属する。羽状縄文(L R)ならびに綾結文が施されている。8はPⅡ2覆土第3層出土の頸部～胸部にかけての破片で、第群1類xに属する。羽状縄文(L R・R L)ならびに綾結文が施されている。

S I - 04・05(第33～40図)

72点図示した。しかしながら、出土層位については第1層主体の出土で、本遺構第1層出土の土器とS K - 28・29出土の土器片に接合関係がある点と土層堆積状況から、本遺構第1層出土の土器群についてはS K - 28・29に帰属した可能性が高いものと考えられる。S K - 28・29として取り扱った資料については住居の床面以下の資料について取扱い、別途層番号を付与していたため、本土器群の資料提示に際しては本遺構内のものとして取扱い記述する。

第群1類aに属するもの

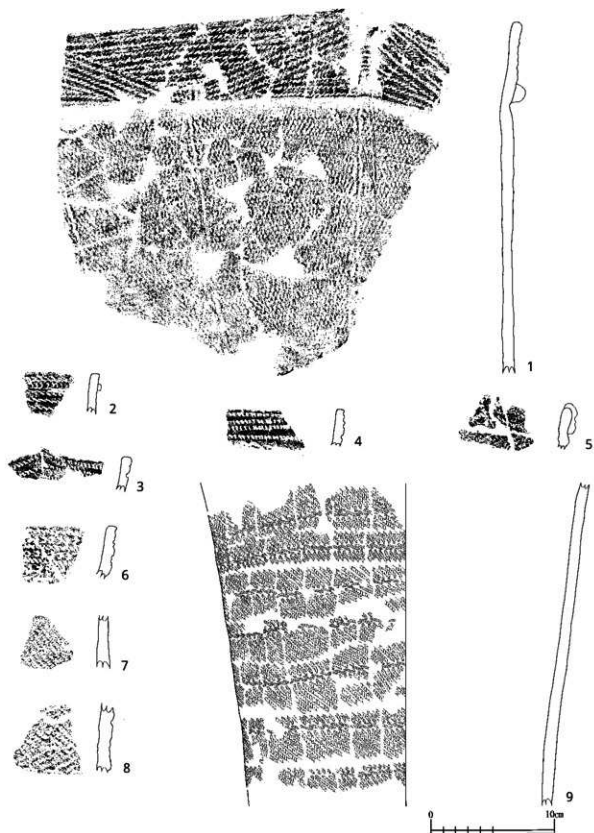
第33図1、2、4、5、10、第34図3、4、7、8、9、10、13、14、16

第36図1、2、6、7、第37図1～8、第38図2～4、第39図1～5、第40図1

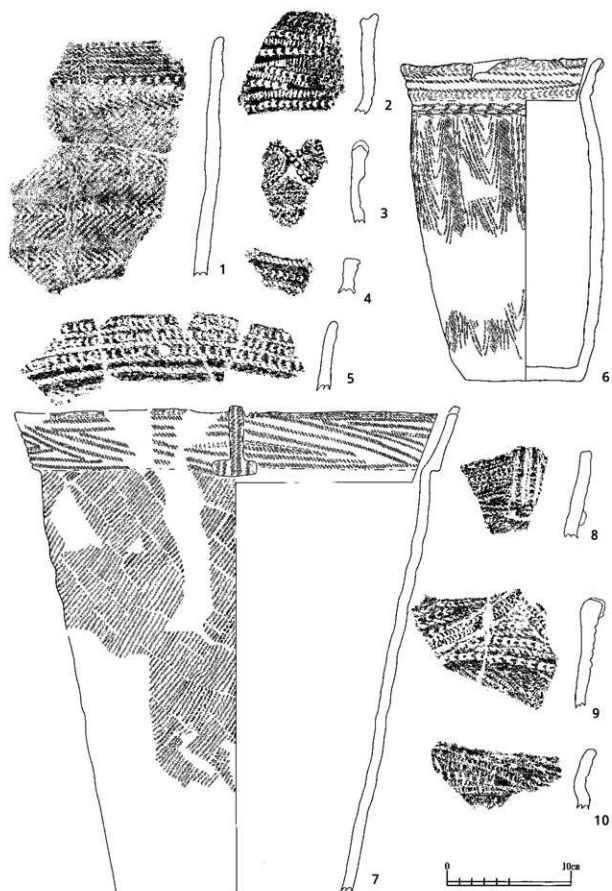
口縁部文様帯にはL圧痕、R圧痕もしくはL R圧痕、R L圧痕が主に施され、半裁竹管等による刺突が組み合わされるものが見られる。(第33図1、4、5、6、第34図3、4)それ以外に結条体圧痕と半裁竹管による刺突文が組み合わされるもの(第33図2)や半裁竹管に加えて爪状の刺突が組み合わされるものがある。(第33図10)

第群1類bに属するもの

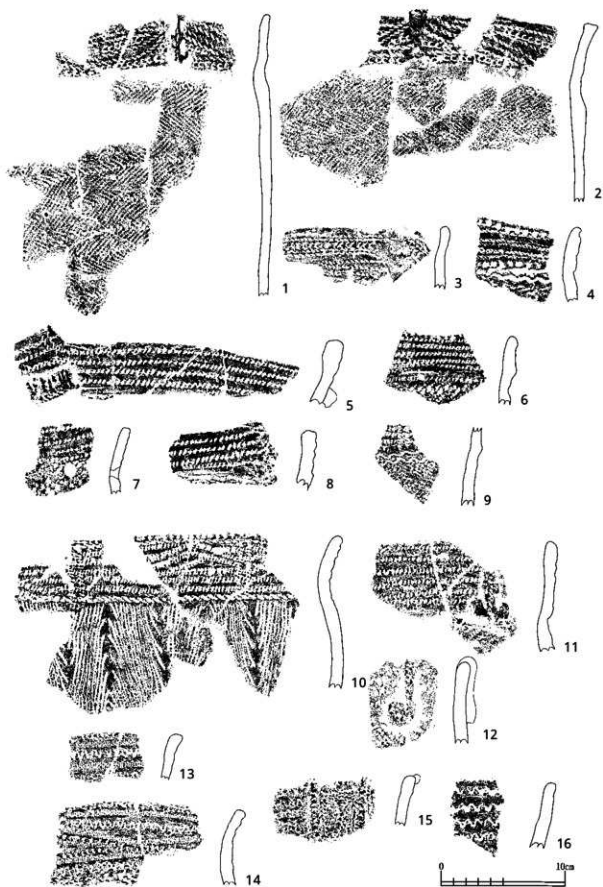
第33図3、7、8、9、第34図1、2、11、12第35図1～10、第36図3～5、第38図1、第40



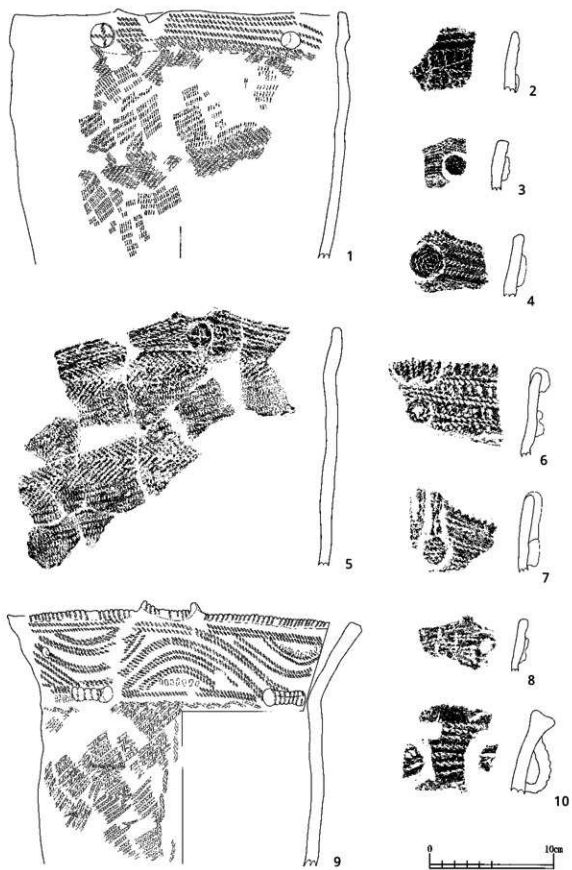
第32圖 SI 03



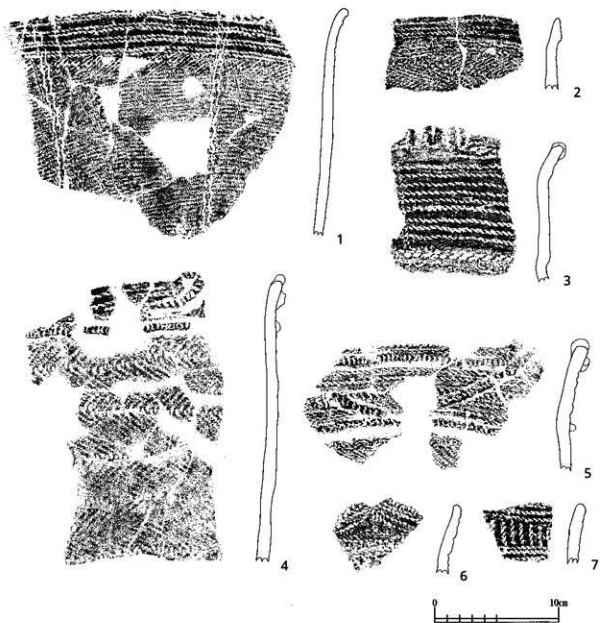
第33圖 SI 04・05



第34圖 SI 04・05



第 35 圖 SI 04・05



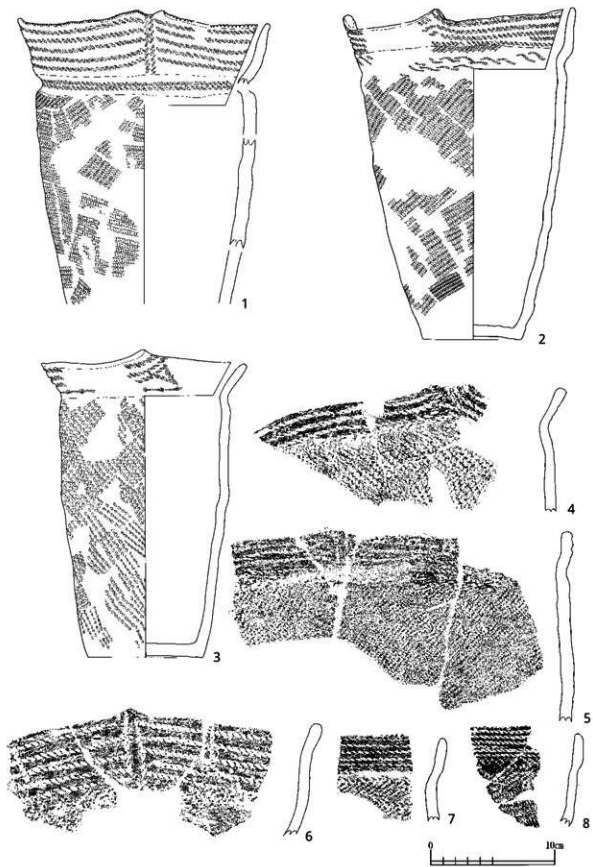
第34図 SI 04・05

図2

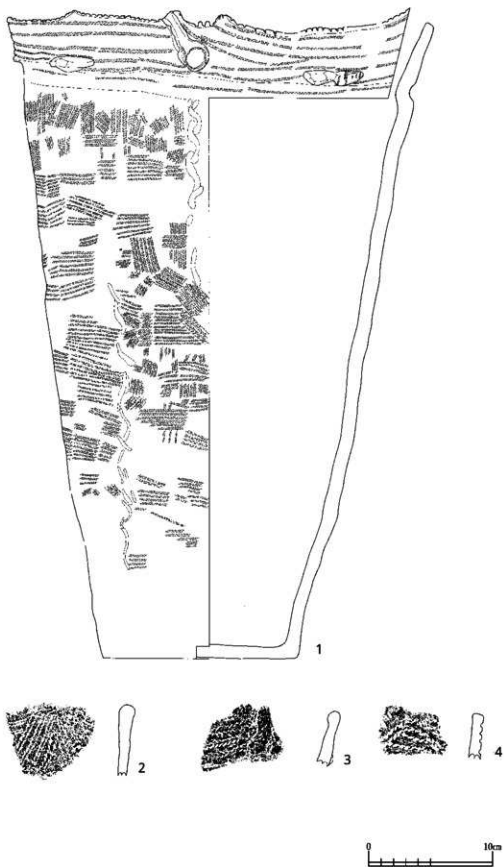
口縁部文様帯はaと同様L圧痕、R圧痕もしくはLR、RL圧痕が主に施され、半截竹管等による刺突が組み合わされるものが見られる。(第33図7～9、第34図1、2)このうち第33図8は貼付隆帯部分を半截竹管で押し引いている。

第 群1類cに属するもの

第33図6、第34図6、15



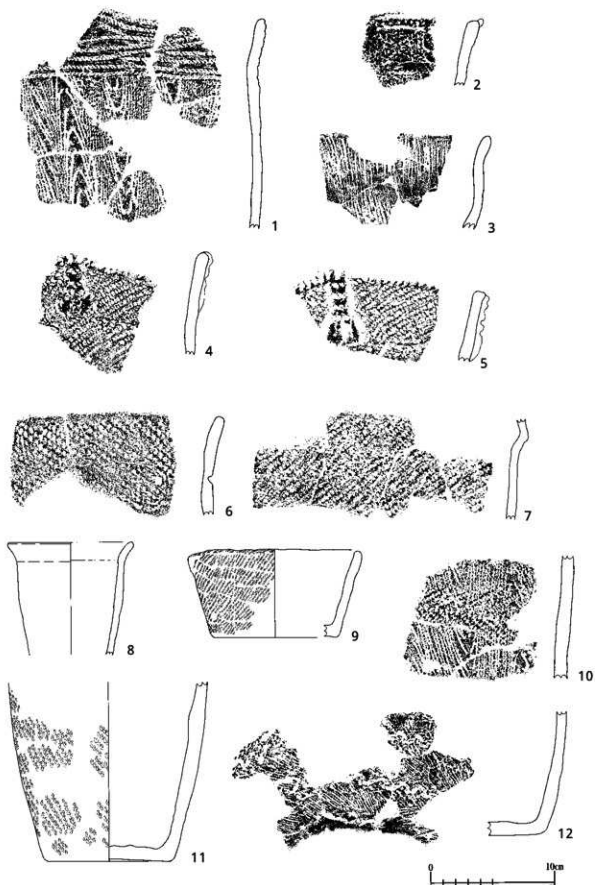
第3圖 SI 04・05



第38圖 SI 04・05



第39図 SI 04・05



第40圖 SI 04・05

口頸部部分を横方向のナデにより隆起させ微隆帯を作出している。第33図6は微隆帯部分ならびに口唇部直下部分に半裁竹管による刺突がなされている。口頸部と胴部の境界には綾結文が施されている。胴部地文は木目状燃糸文が施されている。第34図15は細い棒にL Rを巻きつけた結条体圧痕が口縁部ならびに微隆帯を挟んだ頸部に施されている。

第 群 1類 e に属するもの

第40図3～9

第40図3はヘラ状の工具による条痕文で小型の深鉢土器である。第40図4、5は文様帯の幅が異なるが施文手法ならびに胎土が類似していることから同一個体もしくは同一製作者による製品であると考えられる。口唇部にL R圧痕が施され、胴部地文と同様口縁部にもL R斜縄文が施されている。貼付隆帯は逆T字状のものが貼られ、横位ならびに縦位のL R圧痕が施されている。第40図6は平滑な口縁部片でR L斜縄文が施されている。頸部付近に孔を穿とうとした痕跡が残存しており、貫通していない。第40図7は口縁部上半部が欠損しているが、L R斜縄文が施されている。口縁部はやや内傾した立ち上がり有する。第40図8はミニチュアの深鉢形の土器で無文である。第40図9は鉢形の土器でLが施されている。

第 群 1類 x に属するもの

第40図10～12

第40図10は木目状燃糸文が地文に施されたのち羽状縄文が施されている。第40図11は胴部下半から底部にかけての資料でR L R斜縄文が施されている。第40図12は胴部下半から底部にかけての資料でRが施されたのち綾結文が施されている。

SI - 06(第41図1～3)

3点図示した。1は覆土出土の口縁部片で第 群 1類 a に属する。口唇部ならびに口縁部文様帯にR圧痕が施されている。2は床面出土の口縁部片で摩滅が激しく第 群 1類 b に属したものと考えられる。粘土紐を貼り付けたと考えられる隆帯が斜位にあり、隆帯上には半裁竹管による刺突が施されている。隆帯部分以外について圧痕文が施されたものと考えられるが、摩滅により詳細は不明である。3は覆土出土の胴部片で第 群 1類 x に属する。木目状燃糸文を施している。

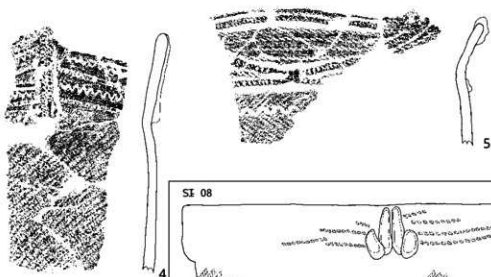
SI - 07(第41図4～8)

5点図示した。4は覆土出土の口縁部～胴部にかけての破片で第 群 1類 b に属する。波状口縁を呈し、口唇部は摩滅により詳細は不明であるが刺突痕が残存している。口縁部文様帯は結条体圧痕ならびに貼付隆帯が施され、隆帯上には半裁竹管による刺突文が施されている。胴部地文はL R斜縄文が施されている。内面の摩滅ならびに剥離の度合いが激しい。5は床面直上ならびに覆土出土の口縁部～胴部破片で第 群 1類 b に属する。波状口縁を呈し、口唇部にはL R斜縄文が施されている。口縁部文様帯にはL R圧痕が施された後、口唇部直下ならびに口頸部の部分に横位に細い粘土紐による隆帯の貼り付けがなされ、波状口縁の頂部から鋸歯状に口頸部分に貼られた隆帯に接するように細い粘土紐を斜位に貼付けがなされている。隆帯の接点部分には瘤状の隆帯が付けられている。隆帯上にはR圧痕が施され

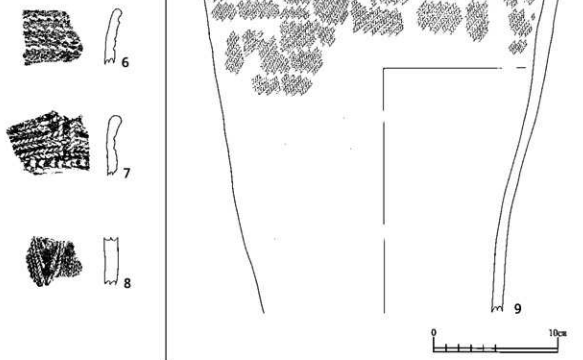
SI 06



SI 07



SI 08



第4圖 SI 06・07・08

ている。胴部地文には羽状縄文が施され、頸部付近には綾結文が1段施されている。6は床面直上出土の口縁部片で第 群1類aに属する。口縁部文様帯はL R 圧痕がほどこされ、胴部地文はL R 斜縄文が施される。7は覆土出土の口縁部片で第 群1類aに属する。波状口縁を呈し、口唇部はL R 斜縄文が施される。口縁部文様帯はLとR 2本一組の平行圧痕文が施された後、波状口縁部の頂部から縦位にL 圧痕が施され、頸部との境界部分には半載竹管による刺突文が施されている。8は覆土出土の胴部片で第 群1類xに属する。木目状燃糸文が施される。

SI - 08(第41図9、第42図1~9)

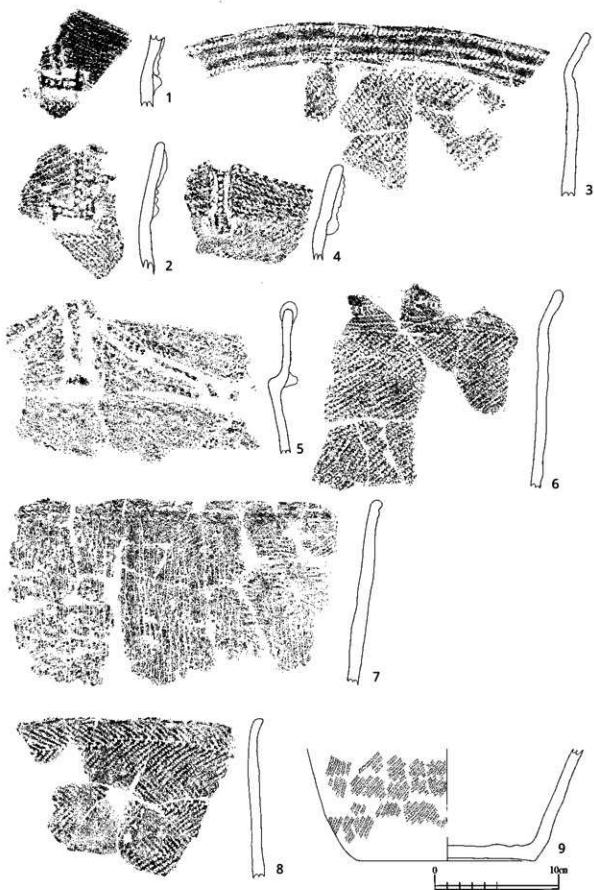
10点図示した。第41図9は土器埋設炉として使用された土器で、第 群1類bに属する。摩滅の度合いが激しく口縁部についても欠損率が高い。口縁部文様帯にはL R 圧痕が施され、貼付隆帯が施される。胴部地文はL R 斜縄文が施される。第42図1、2はいずれもSK - 1 覆土出土の口縁部片で、同一個体であると考えられ第 群1類bに属する。波状口縁を呈し、口縁部文様帯にはLとRの2本一組の鋸歯形圧痕が施され、波状口縁の頂部直下には逆T字形の貼付隆帯が施され、半載竹管による刺突文が施される。頸部の文様帯の境界についても半載竹管による刺突文が横位に施される。胴部地文は羽状縄文が施される。第42図3は覆土出土の口縁部片で、第 群1類aに属する。口唇部にはL R 斜縄文が、口縁部文様帯にはL R 圧痕が平行に施され、胴部地文にはL R 斜縄文が施される。第42図4は土器埋設炉内覆土出土の口縁部片で第 群1類bに属する。波状口縁を呈し、口縁部文様帯にはL R 圧痕が施され、波状口縁の頂部直下にはI字状の貼付隆帯が施され縦位のL R 圧痕ならびに刺突文が施される。口唇部ならびに頸部境界部分には半載竹管による刺突文が施される。第42図5は床面直上出土の口縁部片で、第 群1類bに属する。やや受け口状の形状を呈する。文様については、摩滅の度合いが激しく詳細について不明な部分もあるが、L R 圧痕を横位ならびに斜位に組み合わせ、圧痕の間に半載竹管による刺突文が施される。細い粘土紐を縦位ならびに斜位に貼付け、半載竹管による刺突文が施される。第42図6は、覆土出土の口縁部~胴部にかけての破片で、第 群1類aに属する。口縁部文様帯はL 圧痕を縦位ならびに横位に施し、爪形状の刺突が施されている。頸部と胴部地文の境界は平行のL 圧痕によって区切られている。胴部地文はL R 斜縄文が施されている。第42図7は、覆土出土の口縁部~胴部にかけての破片で、第 群1類aに属する。口縁部文様帯はL R 圧痕が施されている。胴部地文はL R 斜縄文ならびに部分的に縦走させた後、鋭利なヘラ状の工具による条痕文が施されている。第42図8は床面直上出土の口縁部~胴部にかけての破片で、第 群1類eに属する。口唇部にはL R 斜縄文が施され、口縁部~胴部にかけて羽状縄文が施される。第42図9は覆土出土の胴部下~底部にかけての土器で第 群1類xに属する。胴部地文にL R 斜縄文が施されている。胎土中に赤色粒の混入率が高い。

SK - 04(第43図1)

1点図示した。第43図1は覆土2層出土の口縁部片で、第 群1類に属する。波状口縁を呈し、櫛歯状沈線文が施されている。

SK - 09(第43図2~5)

4点図示した。2は底面出土の土器で、第 群1類aに属する。波状口縁を呈し、口縁部文様帯には

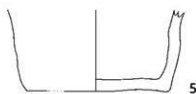
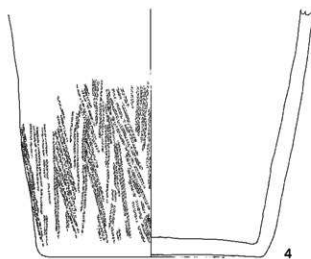
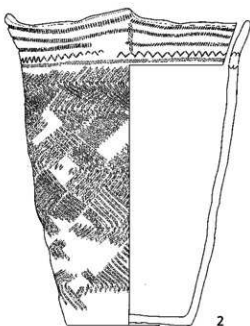


第4圖 SI 08

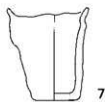
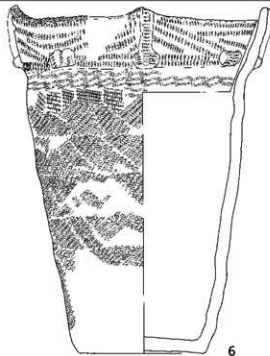
SK-04



SK-09



SK-10



第 43 圖 SK-04・09・10

結条体圧痕が施される。頸部と胴部の境界にはR圧痕が一条施される。胴部地文は羽状縄文が施されている。3は底面出土の口縁部片で、第 群1類aに属する。口縁部文様帯は結条体圧痕を横位ならびに斜位に施している。胴部地文は羽状縄文を施している。4は底面出土の胴部～底部にかけての土器で第 群1類xに属する。木目状摺糸文が施されている。5は底面出土の胴部下半から底部にかけての土器で第 群1類xに属する。摩滅の度合いが激しく、詳細については不明である。底面に煮沸痕が残存している。

S K - 10(第43図6～9)

4点図示した。6は第5層出土ならびにS I - 215床面出土の破片と接合関係が見られた土器で、第 群1類bに属する。波状口縁を呈し、口唇部にはL R斜縄文が施される。口縁部文様帯は結条体圧痕が施され、波状口縁の頂部からI字状の貼付隆帯が施される。また、波状口縁の中間点の口縁部文様帯には瘤状の貼付隆帯が施され、それぞれの隆帯上にも結条体圧痕が施される。頸部には綾結文が施される。胴部地文にはL R斜縄文が施されている。内面の底部～胴部半部にかけて煮沸痕が残存している。7～9は底面ならびに覆土出土のミニチュア土器で、9については地文にL R縄文が施されている。

S K - 11(第44図)

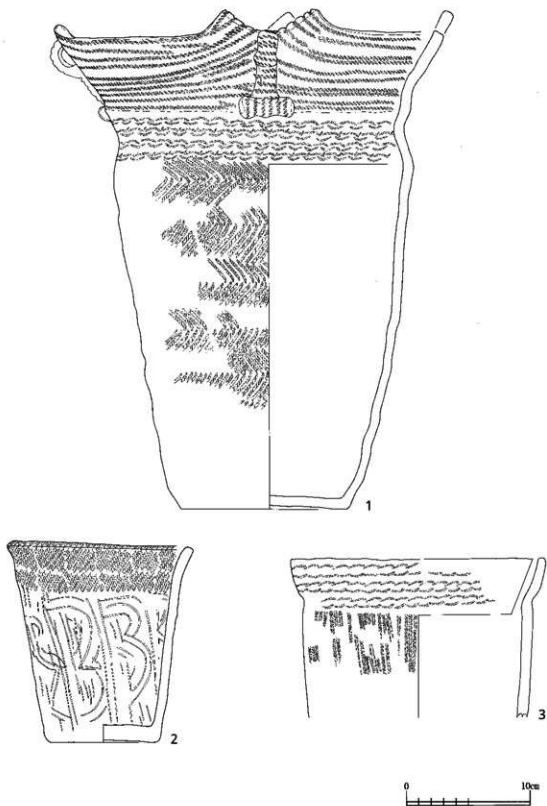
3点図示した。1はS I - 04・05出土の破片と接合関係が見られた土器で、第 群1類bに属する。6個の小突起を有し、2個一単位の部分が2箇所、1個一単位の部分が2箇所あり、対称関係に位置する。口縁部文様帯にはL R圧痕が横位ならびに斜位に施され、突起部分には逆T字状の貼付隆帯が施され、L R圧痕が横位ならびに縦位に施されている。口縁部文様帯と胴部文様帯の境界である頸部には綾結文が施されている。胴部地文は羽状縄文が施されている。内面側底部～胴部下半にかけてならびに底面に煮沸痕が残存している。2は14層から出土した土器で第 群1類eに属する。平縁で口縁部にはL R斜縄文が施されるのみである。胴部には2本一単位の鋭利なへら状の工具で縦位に描画した後、一部ナデ消し、数字の3字あるいはS字状に曲線を描画し、さらに縦位に工具を走らせ描画している。明確なモチーフは不明である。3は覆土出土の口縁部～胴部にかけての破片で第 群1類dに属する。口縁部は綾結文のみによって構成されている。胴部地文は単軸結条体1類が施されている。

S K - 12(第45図1, 2)

遺構間接合資料1点を含め2点図示した。1は底面出土の破片とS K - 18出土の破片で接合関係が見られたミニチュア土器である。L R斜縄文が施されている。2は覆土出土の口縁部～胴部にかけての破片で、第 群1類bに属する。口縁部は波状を呈し、L Rの山形圧痕ならびに平行圧痕により口縁部文様帯は構成される。波状口縁頂部直下には横長の穿孔がなされている。頸部との区画帯には原体を換えたやや幅広のL R圧痕ならびに先端が鋭利な工具による刺突文が施されている。頸部には綾結文が施され、胴部地文には羽状縄文ならびに綾結文が施されている。

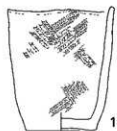
S K - 18(第45図1)

S K - 12出土破片と遺構間接合関係にあった1点のみの出土であった。



第 44 図 SK - 11

SK- 12・ 18



1

SK- 12



2

SK- 23



3

SK- 24



4



5



8



6



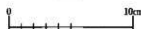
7



9



10



第49圖 SK- 12・ 18・ 23・ 24

S K - 23(第45図3)

1点図示した。3は底面直上出土の口縁部へ胴部にかけての破片で、第 群1類bに属する。口縁部文様帯の幅が狭く、L R 圧痕ならびに半戟竹管による刺突文が施される。貼付隆帯は筒状に丸めたものを縦位に貼付け、隆帯上にはL R 圧痕が施されている。胴部地文はL R 斜縄文が施されている。

S K - 24(第45図4～10)

7点図示した。4は、第10層底面から出土した口縁部片で、第 群1類aに属する。摩滅ならびに風化の度合いが激しく詳細については不明であるが、口唇部ならびに頸部との区画部分に刺突文が施され、口縁部文様帯にはL R 圧痕文が施されたものと考えられる。5は第10層から出土した口縁部片で第 群1類bに属する。口唇部にはL R 斜縄文が施され、口縁部にはL R 圧痕が施されている。貼付隆帯により突起が作出されており、L R 圧痕が縦位に施されている。6は覆土出土の口縁部へ胴部にかけての破片で、第 群1類aに属する。口唇部にはL R 斜縄文が施され、口縁部文様帯にはL R 圧痕が平行に施されている。胴部地文はL R 斜縄文が施されている。7は覆土出土の口縁部片で、第 群1類bに属する。口唇部にはR L 圧痕が施されている。口縁部文様帯はR L 圧痕が施され、逆T字状の貼付隆帯が施され、隆帯の上半部はR L 圧痕、下半部は工具による刺突文が施されている。8は覆土出土の口縁部へ胴部にかけての破片で、第 群1類bに属する。斜位ならびに横位の結条体圧痕により文様帯が構成され、ボタン状と細い粘土紐の組み合わせによる6字状の貼付隆帯が突起下部に施され、結条体圧痕ならびにL R 圧痕が施されている。頸部文様帯には綾結文が2段施され、胴部地文は羽状縄文が施されている。9は第10層出土の破片ならびにS I - 215床面出土の破片の遺構間接合が見られた土器で、第 群1類bに属する。口唇部には半戟竹管による刺突文が施されている。口縁部文様帯はL R 圧痕が平行に施され、逆J字上の貼付隆帯が施され突起を作出している。隆帯上にはL R 圧痕が上半部は平行に下半部は渦巻状に施されている。口縁部と頸部の境界には半戟竹管による刺突文が平行に施され、部分的に口縁部文様帯を消すように二段に施されている。頸部文様帯には綾結文が施され、胴部地文は羽状縄文が施されている。10は覆土出土のミニチュア土器で、底部のみが磨かれている。

S K - 28・29(第46～55図)

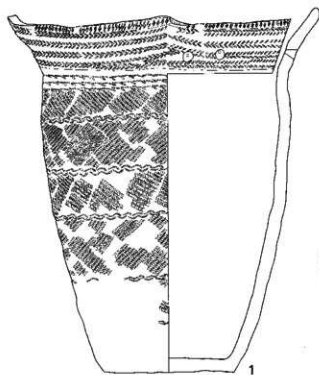
43点図示した。S I - 04・05で記述したとおり、本遺構と重複するS I - 04・05第1層出土の土器群については本遺構出土の土器と接合関係が確認でき、土層堆積状況から本遺構に帰属した可能性が高いものである。本遺構として取り扱った土器群についても第1層の資料と中層に堆積する第13・14層との間に接合関係がみられたことから土層堆積状況と併せて一括廃棄資料として捉えることのできる資料である。

第 群1類aに属するもの

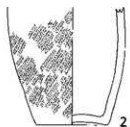
第46図1、第47図1、第48図10、第51図5、第52図2、第53図2、第55図1、2、4

第46図1は第1、13、14層出土の土器で、口唇部にはL R 圧痕が施され、口縁部文様帯にはL R ならびにR L を2本一組で組み合わせ平行圧痕を施している。補修孔が2つ穿たれている。頸部には綾結文が施され、胴部地文はR L 斜縄文ならびにL R 斜縄文と綾結文が施されている。第47図1は口縁部文様帯には単軸結条体圧痕が施され、胴部地文にはL R 斜縄文が施されている。第48図10ならびに第51図5は口縁部文様帯にL R 圧痕が施され、胴部地文にはL R 斜縄文が施されている。こ

第1、13、14層



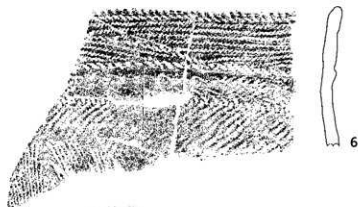
第16層



上層



第2層



第4図 SK-28・29

のうち第51図5は山形突起を2つ有している。第52図2は口唇部にL R斜縄文が施され、口縁部文様帯にはL R圧痕が平行に施されている。補修孔が2つ穿たれている。胴部地文は羽状縄文が施され、結節部分に綾結文が施されている。第55図1は砲弾状の形状を呈し、口唇部にはL R斜縄文が施されている。2個一対の突起を有し、口縁部文様帯はRを2本一組で横位ならびに斜位に、突起部分直下には縦位に施している。頸部には綾結文が施され、胴部地文は羽状縄文が施される。第55図2は山形突起を有し、口縁部文様帯にはL R圧痕が施され、胴部地文は羽状縄文が施される。第55図4は口縁部上半が欠損しているが、口縁部文様帯にはL R圧痕が施され、頸部との区画帯には半靱竹管による刺突文が施される。頸部には綾結文が施され、胴部地文はL R斜縄文が施される。

第 群1類bに属するもの

第46図3、5、7、8、第47図2～5、第48図2～4、9、第50図1、第52図1、3、4、第53図1、第54図1

aと同様口縁部に側面圧痕、刺突文が施され、隆帯により文様帯が構成される。隆帯はI字状(第47図3、第52図1)逆T字状(第48図4、第53図1)6字状(第47図5、第54図1)ボタン状(第47図4、第52図4)のほか細い粘土紐による曲線、平行線等が組み合わされたものが見られる。第50図1は口唇部に貼付隆帯を施しており、胴部前半部ならびに下半部に細い工具によりヘラ描きされている。また、第52図3はくびれが緩いがキャリバー状の形状を呈し、形状について大木系の影響を受けた可能性が考えられる。

第 群1類cに属するもの

第46図6、第49図1、第55図3

口縁部文様帯の施文手法については基本的にaと同様であるが、第46図6は地文に羽状縄文と木目状燃系文を施している。第49図1は微隆帯上に半靱竹管による刺突文が施されている。第55図3は突起を有し、R圧痕ならびにL R圧痕を組み合わせ、文様帯を作出している。

第 群1類eに属するもの

第48図1、6～8、第51図1～4 6

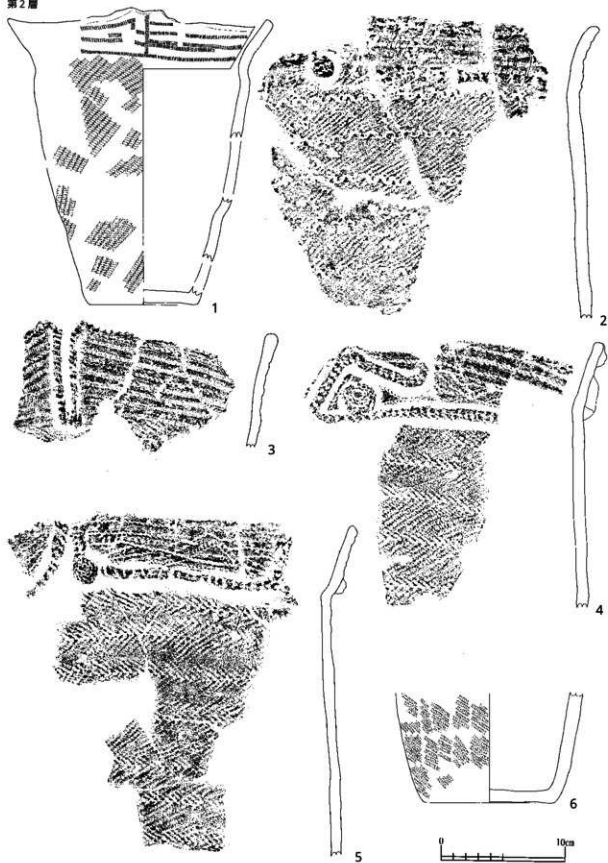
第48図1は浅鉢形の土器で口縁部にL R圧痕が施されているが明瞭な文様帯として認定できない。第48図6ならびに8は無文の鉢形土器である。第51図1、2は小型の深鉢形土器で、いずれもR L R斜縄文を施し、口縁部には貼付隆帯を施し、局所的にR L R圧痕が平行に施されている。第51図6についても同様の施文手法であるが、口縁部にR L斜縄文ならびにL圧痕が施され、頸部には条痕文が施されている。第51図3は突起を有し、口唇部にL R斜縄文が施され、口縁部から胴部地文には羽状縄文と綾結文が施されている。第51図4も3と同様突起を有し、羽状縄文が施される。

第 群1類xに属するもの

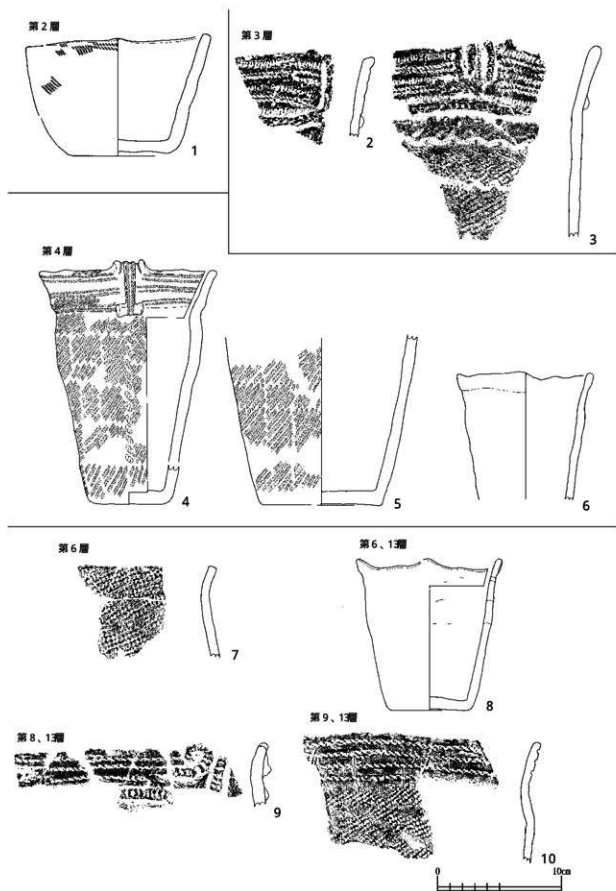
第46図2、4、第47図6、第48図5、第55図5

L R斜縄文のみのもの(第46図2、4、第48図5) R L斜縄文のみのもの(第47図6) 綾結文が伴うもの(第55図5)などが見られる。

第2層

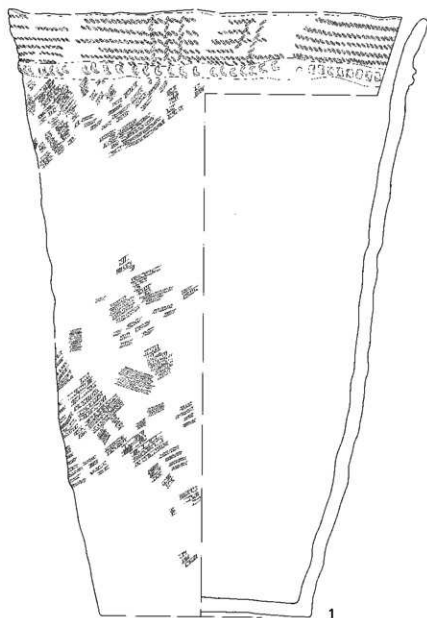


第4図 SK-28・29



第 48 圖 SK- 28・ 29

第1Q 1層下部



第49圖 SK-28・29

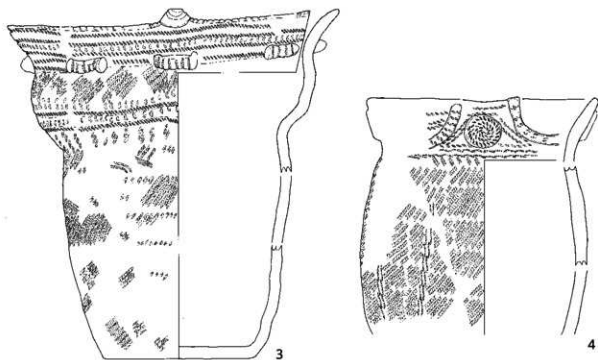
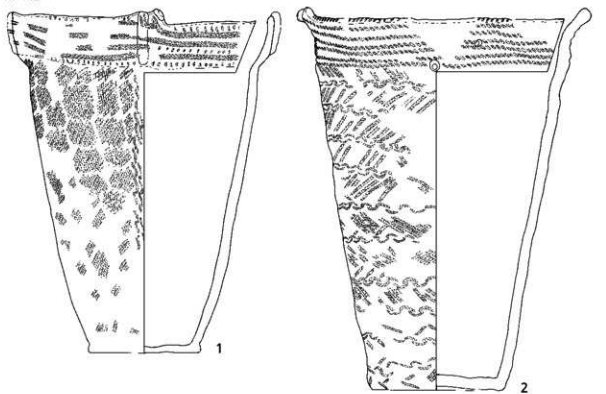


第50圖 SK-28・29



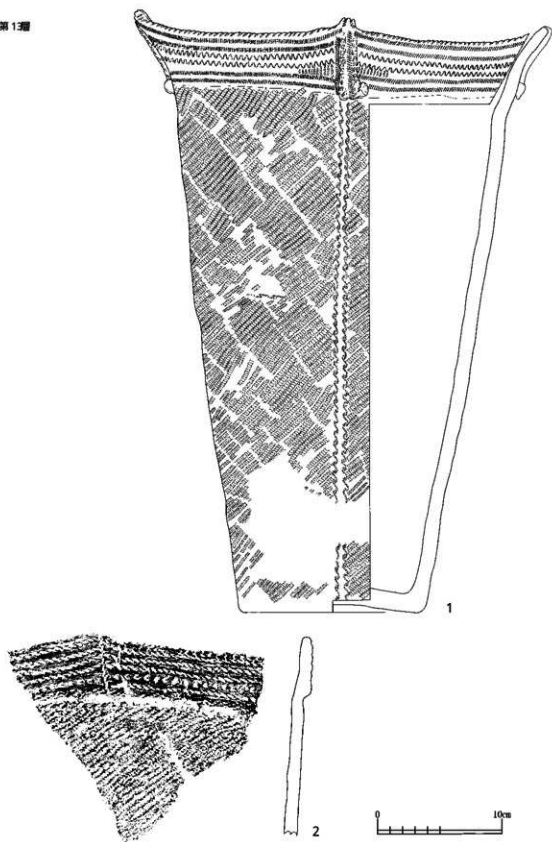
第5圖 SK-28・29

第 1 層



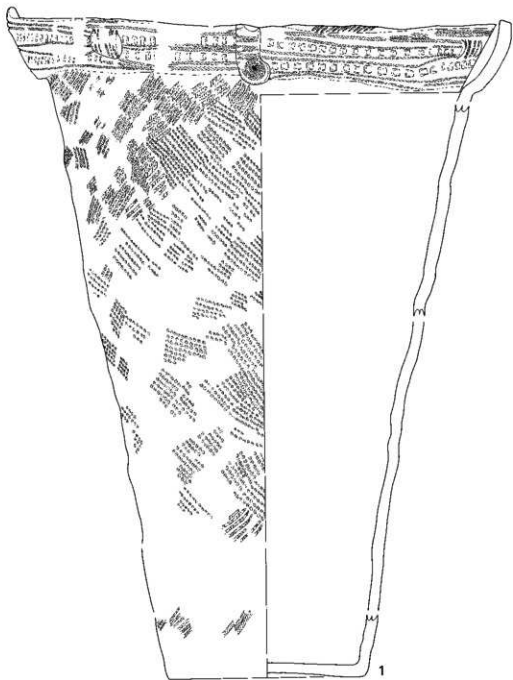
第 5 圖 SK - 28・29

第1圖



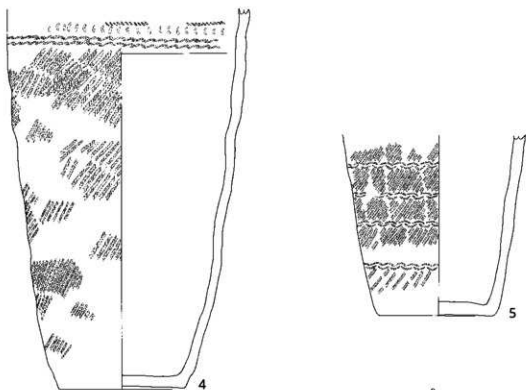
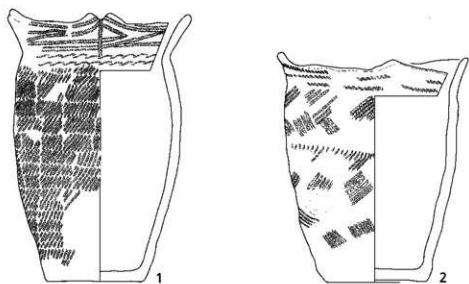
第5圖 SK- 28・29

第 13 圖



第 54 圖 SK - 28 · 29

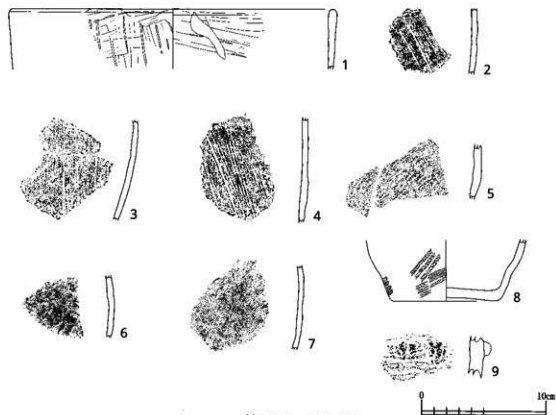
第14圖



第5圖 SK-28・29

SK - 36 (第 56 図)

9 点図示した。1～4 は覆土出土の同一個体で深鉢形の粗製土器である。第 2 群 2 類に属する。胎が脆く小礫をやや多く含む。外面はヘラ状の工具による条痕文で比較的浅い入りで痕跡があまり残存していない。5～8 は覆土出土の同一個体で鉢形の粗製土器である。第 2 群 2 類に属する。胎が脆く砂質がかっており、ぼそぼそした感がある。風化の度合いも激しい。地文に L R 斜縄文が施されている。9 は覆土出土の口縁部～頸部にかけての破片で第 1 群 1 類 b に属する。貼付隆帯が施され、縦位の L 圧痕が施されている。



第 56 図 SK - 36

遺構外出土土器

第 群1類 aに属するもの(第57図1~5、第58図1~21、第59図8、9)

縄ならびに絡糸体の側面圧痕を基本に背面圧痕や半截竹管や工具による刺突文が加わる。第58図7はL R圧痕に加えて細い工具により糸痕が施されている。

第 群1類 bに属するもの(第58図22~26、第59図1~5)

aの属性に貼付隆帯が加わるもので第58図25のように剝離したのも見られる。

第 群1類 cに属するもの(第59図6)

口縁部と頸部との境界に微隆帯を作出するもので、第59図6はLとRを2本一組に平行圧痕し、文様帯を構成する。

第 群1類 dに属するもの(第59図7)

口縁部文様帯に羽状縄文を施し、区画体にR圧痕を横位ならびに縦位に施している。

第 群1類 xに属するもの(第59図10~18、第60図1~18)

単節、複節、絡糸体回転施文等が主である。

第 群1類に属するもの(第60図19、20)

2点図示した。19はグリッドMQ - 394・395出土の口縁部から胴部にかけての破片で口縁部はRの平行圧痕間に馬蹄形圧痕を平行に巡らし、口唇部ならびに頸部文様帯の区画部分に粘土紐を貼り付け縦位にR圧痕を施し、さらに口唇部と頸部文様帯に貼られた粘土紐にY字状にたすき掛けるように貼り付けている。貼付け部分は横位ならびに縦位にR圧痕を施している。胴部地文は羽状縄文が施されている。20はグリッドMQ - 394出土の口縁部片で19と同一個体の可能性が高い。

また、第60図21、22はいずれも口縁部片で粘土紐の貼付けと貼付隆帯上に圧痕文が施されているが詳細な時期区分が破片資料であるため不明瞭な資料である。

第 群2類に属するもの(第60図23、24)

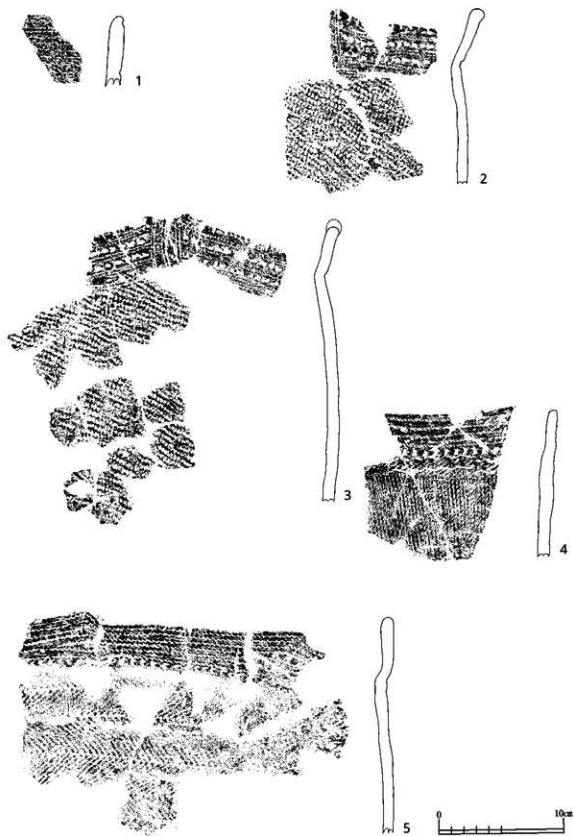
2点図示した。いずれもグリッドMC - 321出土の破片資料で同一個体片であると考えられる。地文にR L縄文を施し、草本系の工具で沈線を押し引いている。

第 群1類に属するもの(第61図1~3)

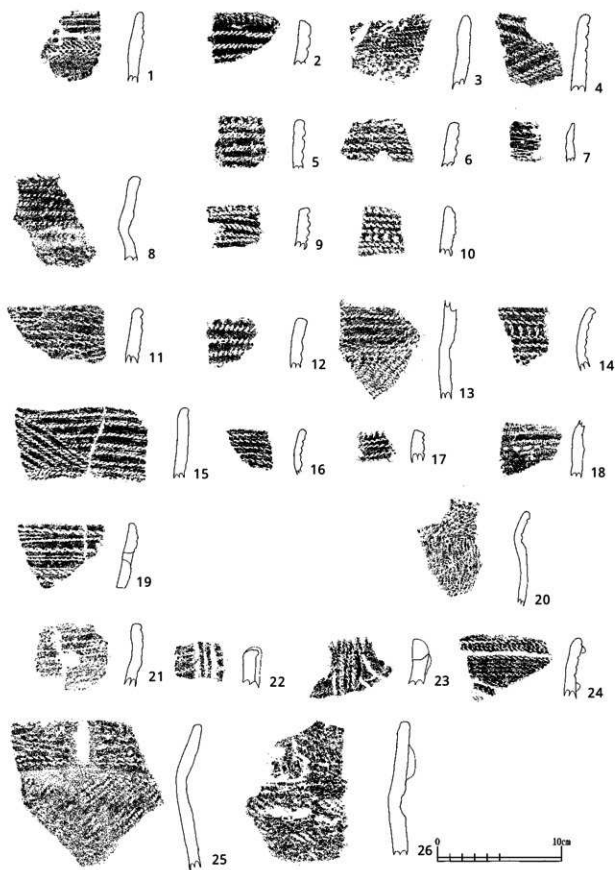
3点図示した。1は鉢形の胴部から底部にかけての土器で、幅の狭い工具により連結したS字状沈線文を呈したものと考えられる。2はグリッドLT - 291出土の鉢形の底部片で、無文である。3はS I - 59覆土混入の口縁部片で折返し口縁を呈し、地文にはR L斜縄文が施されている。

第 群1類に属するもの(第61図4~6)

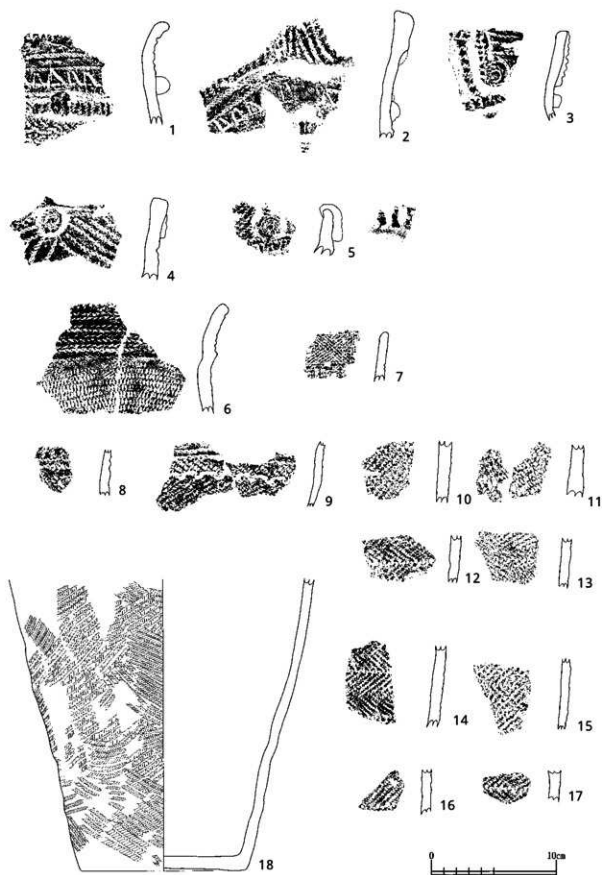
3点図示した。4はS I - 59味面出土の鉢形の口縁部片で、口縁部には山形突起を有し、口唇部直



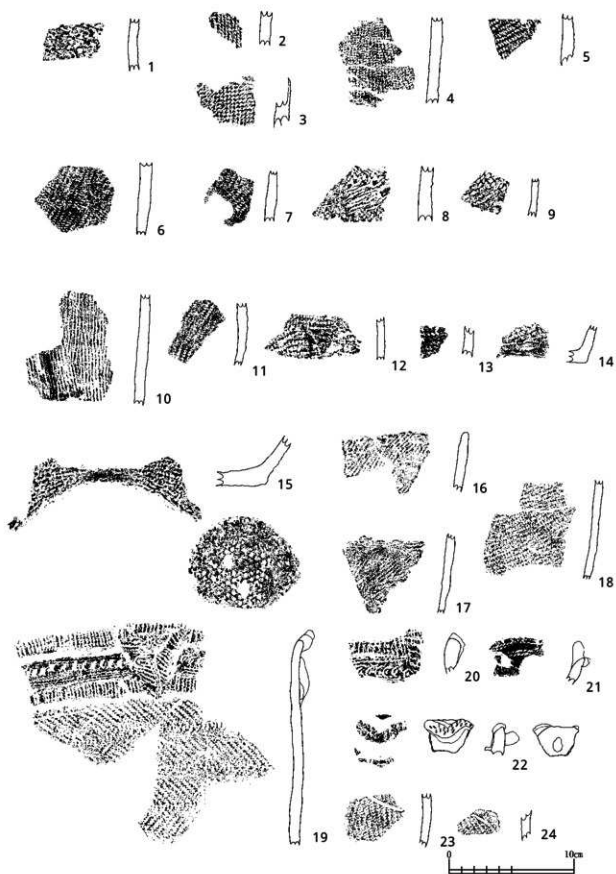
第5圖 遺構外出土器



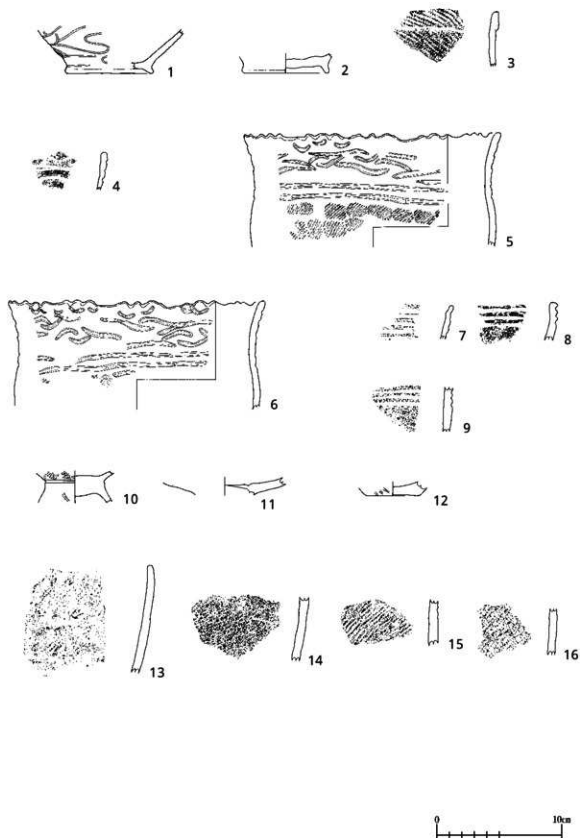
第58圖 遺構外出土土器



第59圖 遺構外出土器



第60圖 遺構外出土遺物



第 6 圖 遺構外出土遺物

下に三叉文が施されている。5、6はいずれもMA - 360出土の深鉢形の口縁部から胴部にかけての土器で、同一個体であると考えられる。波状口縁を呈し、口縁部文様帯には沈線による人組文が施されている。また、胴部地文にはLが施されている。胎が脆く、剥離の度合いが激しい。

第 群2類に属するもの(第61図7～17)

10点図示した。7はSK - 83覆土出土の鉢形の口縁部片で、RL斜縄文が施されたのち平行沈線文が4条施されている。8はSI - 90覆土出土の鉢形の口縁部片で、口縁部に平行沈線文3条施されている。9はSI - 73出土の深鉢もしくは鉢形の頸部から胴部にかけての破片で、頸部に平行沈線文が3条施されている。10はSI - 234硯面出土の台付浅鉢の脚部でRL縄文が施され、沈線文が1条施されている。11はSI - 225覆土出土の台付の胴部片で内面に沈線文が1条施されている。12はSI - 59覆土出土の底部で、地文にRL縄文が施されている。13～16は深鉢形粗製土器の口縁部ならびに胴部片で条痕文ならびにLR斜縄文が施されている。

2. 石器

発掘調査で出土した石器類は、石鏃 9 点、石槍 1 点、石錐 3 点、石匙 8 点、石筈 10 点、不定形石器 25 点、磨製石斧 3 点、打製石斧 1 点、半月状扁平打製石器 4 点、石錘 1 点、敲磨類 17 点、搬入礫 2 点、石皿 1 点、台石 1 点である。剥片・礫素材のものを合わせ総計 86 点が出土した。これらは調整痕あるいは使用痕が認められるもので、剥片・裂片は含まれていない。殆どが遺構内からの出土だが縄文時代に属さない遺構からの出土も多く、ここでは遺構内及び遺構外から出土した石器について併せて記述している。

石器の分類は器種によって大別し、各特長によって細分した。以下類型ごとに分類する。

A 群 石鏃 (第 62 図 - 1 ~ 9)

茎部の有無と基部の形状により、4 つに分類した。9 点出土した。使用石材は 1 点の玉髄を除き、全て珪質頁岩である。

類	凹基無茎鏃	1 点 (第 62 図 - 1)
類	平基無茎鏃	1 点 (第 62 図 - 2)
類	凸基有茎鏃	5 点 (第 62 図 - 3 ~ 7)
類	尖基・円基鏃	2 点 (第 62 図 - 8、9)

殆どが両面加工だが 2、5 ~ 7 には一次剥離面がみられる。7 は剥離による調整で茎部が作出されているが、未加工の縁辺を持っている。石鏃としての完成品であるかは不明である。8 は先頭部が厚手で若干摩滅していることから、石錐として使われた可能性も考えられる。

B 群 石槍 (第 62 図 - 10)

1 点のみ出土した。使用石材は頁岩である。形状は木葉形に近いが全体的に調整が粗い。未加工の縁辺を持ち、先頭部が意図的に作出されていない。基部付近にアスファルト状の付着がみられる。

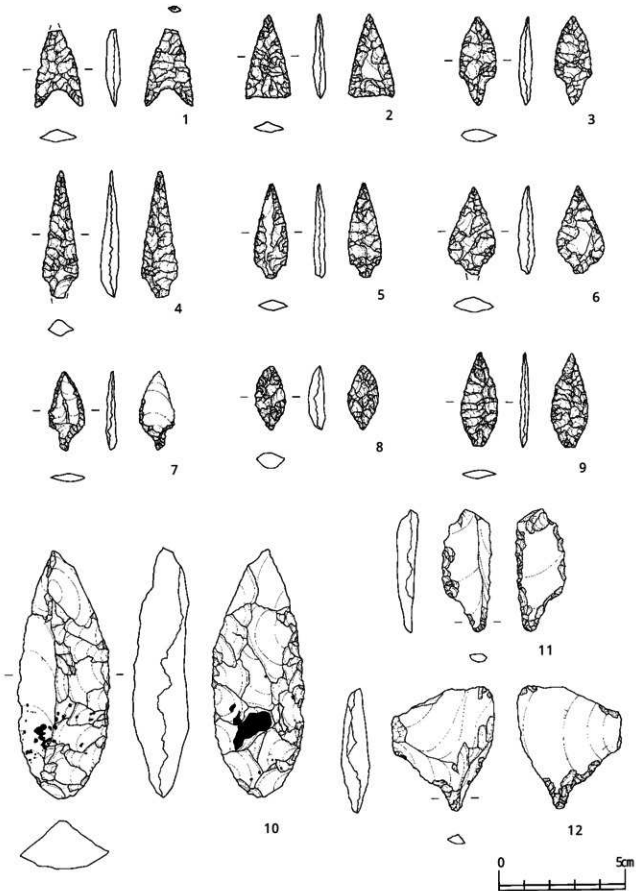
C 群 石錐 (第 62 図 - 11、12 第 63 図 - 13)

剥片の一部に剥離による調整で錐状の先端部を作出したものの。3 点出土した。使用石材は全て珪質頁岩である。11 の錐部は背・腹両面に短い調整剥離が施され、断面形は楕円形に近い。12 の錐部は背面側の右側縁に調整が施されていない。断面形は三角形を呈している。13 の錐部は微細な剥離が部分的にみられるのみで、断面形は三角形を呈している。つまみ部の加工はいずれも簡単なものにとどまっており、11 には背・腹両面の縁辺上に交互に短い調整剥離が施されているが、12、13 には殆ど調整が施されていない。

D 群 石匙 (第 63 図 - 14 ~ 20 第 64 図 - 21)

剥片を加工して刃部を作出し、つまみ状に加工した部分を作成したもの。つまみ部の位置関係によって大別し、更に形状により細分した。8 点出土した。使用石材は全て珪質頁岩である。

16 を除く全てが縦長の剥片を素材として使用している。14、17 ~ 20 はつまみがバルブ側に 15、21 はバルブと反対側にあり、16 はつまみが打撃方向線上に位置しない。使用の為と思われる光沢がみられるのは 3 点である。14 は腹面側、15 は背面側、17 は背・腹面の両面にあり、いずれも直線的な縁辺に光沢がみられる。



第6圖 出土石器

類 縦型 (第63図 - 14~20)

器体の長軸の軸線につまみ部を作出したものの。両側線の形状により細分した。

a 両側線の形状が異なるもの 5点 (第63図 - 14~18)

14は背面側の左側線が緩く外湾しており、右側線は直線的に加工されている。末端部の加工は少なく平坦である。15、16は背面側の左側線が内湾、右側線が直線的に加工されている。17は背面側の右側線が内湾、左側線が直線的に加工されており、礫面が残存している。18はつまみ部を両面から加工しているものの挟りは浅く、刃部の調整は行われていない。一部に使用の際の連続した刃こぼれが見られるが、石匙としての完成品であるかは不明である。

b 両側線の形状がほぼ対称なもの 2点 (第63図 - 19、20)

19は側線が平行で幅広な厚めの素材に調整剥離が施されている。重量が5~23g程度の他と比較し40.3gと重い。20は背面側の下端部に短い調整剥離が施されているが、つまみ部の調整は簡単なものにとどまっている。

類 横型 (第64図 - 21)

器体の長軸方向に対して斜行する位置につまみ部を作出したものの。つまみ部が背面側の右上部に位置し、体部は楕円形を呈している。

E群 石筥 (第64図 - 22~27、第65図 - 28~31)

筥状に整形され長軸の一端に両面又は片面調整の刃部を作出したものの。平面形態により2つに大別した。10点出土した。使用石材は1点の頁岩を除き、全て珪質頁岩である。

類 頭部幅が刃部より狭いもの (第64図 - 22~27)

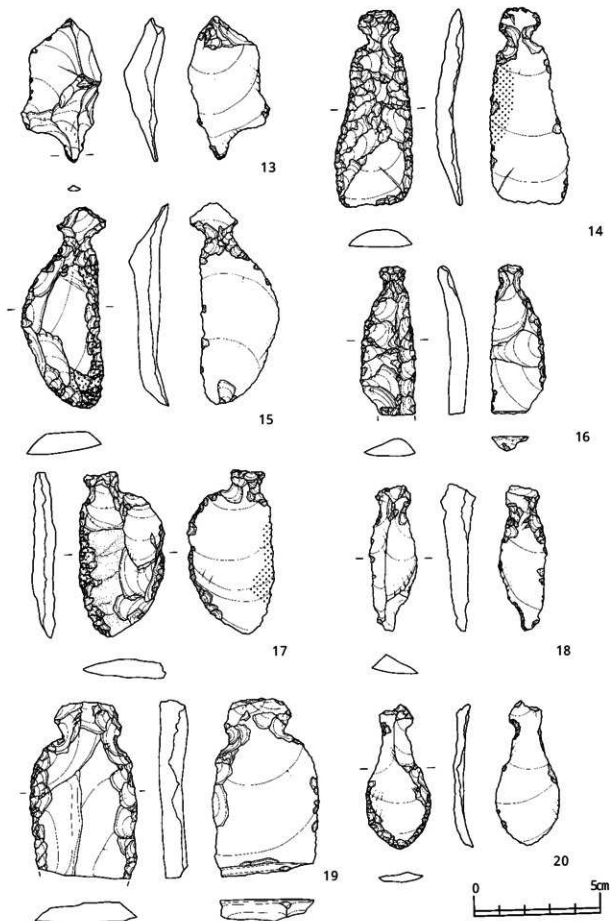
基部は粗い調整剥離で器面調整され、刃部は入念な調整剥離により整形されている。器長が4~6cm程度のものが多い。22~27のいずれも片刃で片刃である。22の基端は尖頭的に調整されており、使用の為と思われる光沢がみられ、石筥としての機能を有すると考えられる。25は器幅が狭く重量51gと軽い小型の器体で、片面のみに調整が施されている。26、27は基端部を欠損している。26は残存部の形状と調整から、基端部が尖頭的に整形されているものと推定される。27は刃先角が他と比較するとやや小さく、他の類型に属する可能性も考えられる。

類 両側線がほぼ平行なもの (第65図 - 28~31)

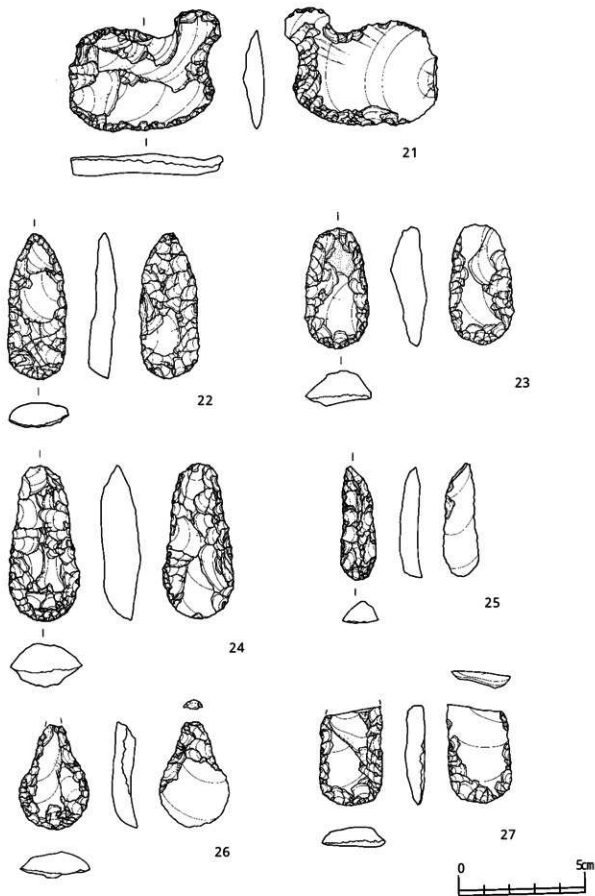
類と比較して全体的に調整が粗く、器長が8~10cmと大型である。いずれも横長の剥片を素材としておりそれを縦位に用いている。刃部は全て片刃である。28はS I - 04・05から出土したものを接合し完形に復元したものである。29~31は同一母岩から作出されており、同じS I - 04・05から出土している。

F群 不定形石器 (第65図 - 32、第66図~第70図)

素材剥片に何らかの加工が施されている定形化されていない石器を一括した。25点出土した。加工途中のもの、欠損品のうち本来の形態が推測できないものも含まれる。素材剥片の一部に調整剥離を施



第63圖 出土石器



第 64 図 出土石器

して刃部を作出しているだけのものが半数を占める。使用石材は1点の頁岩を除き、全て珪質頁岩である。

類 剥片の一部に刃部を作出しているだけのもの

(第65図-32、第66図-33-37、第67図-38-42、第68図-43-45)

剥片の縁辺に連続的な調整剥離を施すことによって、弧状もしくは直線的な刃部が作出されている。刃部調整は縁辺に片面もしくは両面から施されているが、刃部が作出される位置は多様である。32-38、40、41は緩斜度、39、44、45は急斜度に調整された刃部をもつ。42、43は急斜度と緩斜度に調整された刃部を併せ持つ。35はやや内湾する直線状の刃部の他に、2辺が鋭角を形作る縁辺に調整剥離が施されている。40、41は連続する調整剥離の一部に抉り部が作出されている。45はE群 類29-31と同じ同一母岩から作出され、同じSI-04・05から出土している。使用の為と思われる光沢がみられるのは33、35、40、42で、いずれも両面に光沢がみられる。

類 周縁全体あるいは器面全体に調整が及ぶもの

(第68図-46、47、第69図-48-52、第70図-53-56)

全て急斜度に調整された刃部をもつ。44、47は欠損部分の如何によっては、他の類型に属する可能性も考えられる。47は使用の為と思われる光沢がみられ、石匙の欠損品の可能性も考えられる。46、49は背面全体と腹面の周縁のみに調整が施されている。48、50は粗い両面加工である。51、52は肉厚で、断面形は台形状を呈する。51は背面の周縁のみ、52は背面の器面全体に調整が施され、どちらのバルブも除去されている。53-56は楕円形もしくは方形に近い剥片を素材としている。53、54は背・腹両面の周縁のみに調整が施されている。55は背面のほぼ全体と、腹面の周縁に調整が施されている。56は腹面のほぼ全体と、背面の周縁に調整が施されており、礫面が残存している。

G群 磨製石斧 (第71図-57-59)

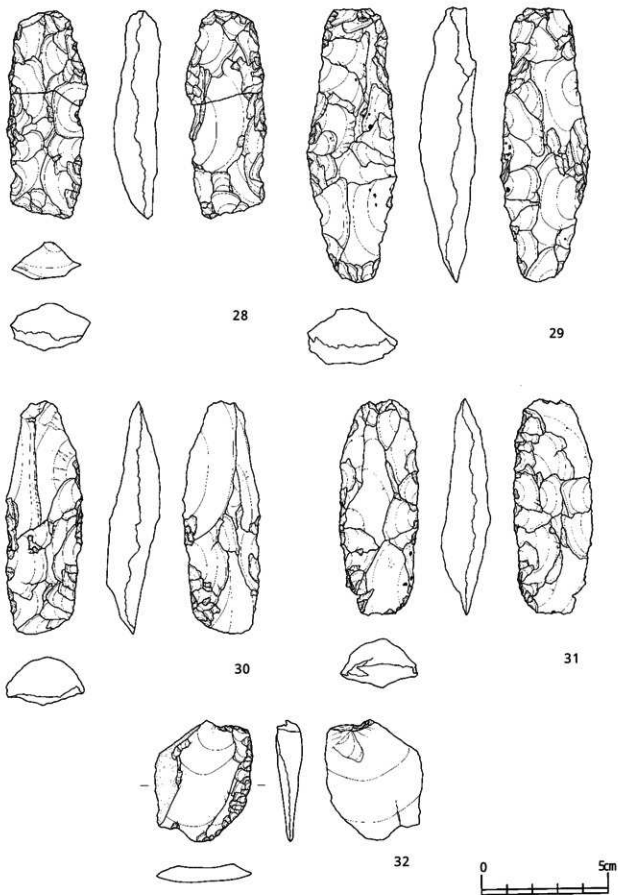
3点出土した。使用石材は粘板岩、閃緑岩、砂質凝灰岩である。58、59は欠損品で、58は平面上で横方向、59は斜めに折損している。刃部形状からみると57は直刃で片刃である。58、59は円刃で両刃である。刃部形状が直刃の57は刃部に対して垂直の線条痕、両刃の58、59には刃部に対し斜方向の線条痕がみられる。57の表面側の左側縁には擦切痕、右側縁には敲打痕が残存する。

H群 打製石斧 (第71図-60)

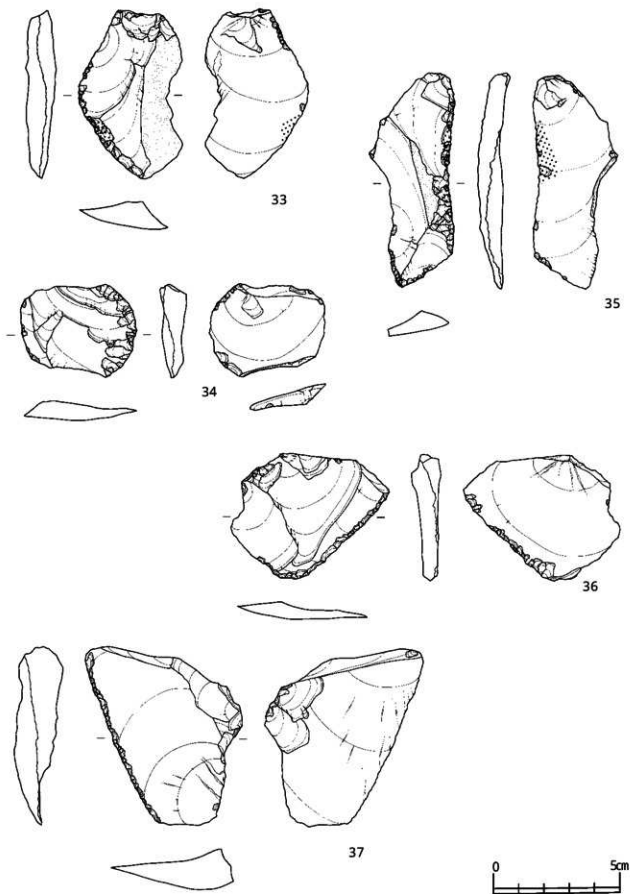
1点のみ出土した。使用石材は閃緑岩である。側縁部が直線的な短冊形を呈している。円刃で両刃である。器面に細かい敲打を加えた後、裏面の上半に器面中央まで及ぶ剥離が施され、右側縁に両面から、左側縁に片面からの剥離調整が施されている。基端の調整は裏面のみに施され、表面は礫面をそのまま残す。両側縁の稜線上に磨痕がみられる。

I群 半円状扁平打製石器 (第71図-61-64)

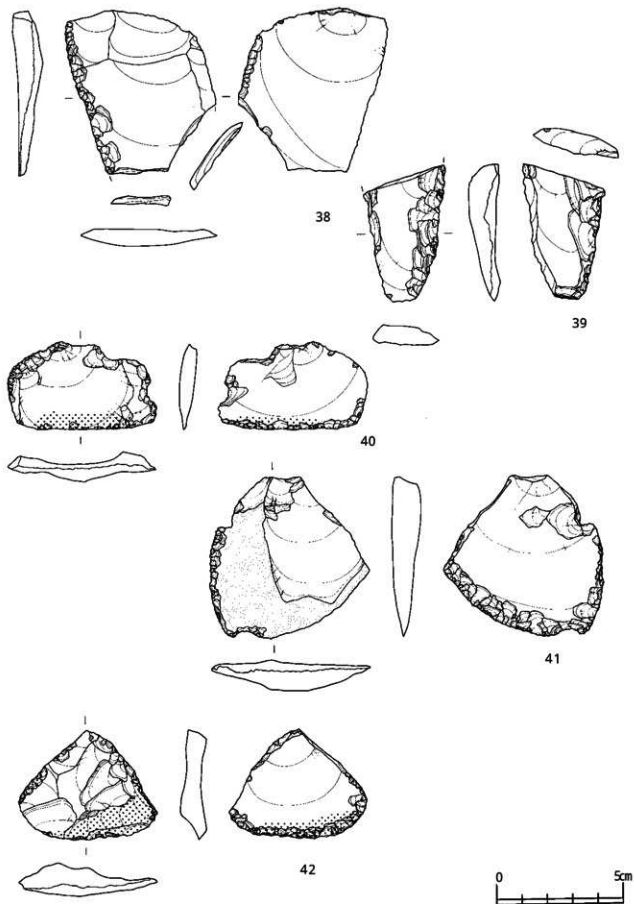
弧状の縁辺を有し対辺の直線部に刃部・機能面を有している。4点出土した。使用石材は全て安山岩である。不連続ではあるがほぼ周縁全体を剥離によって成形している61と、調整剥離が周縁全体に及



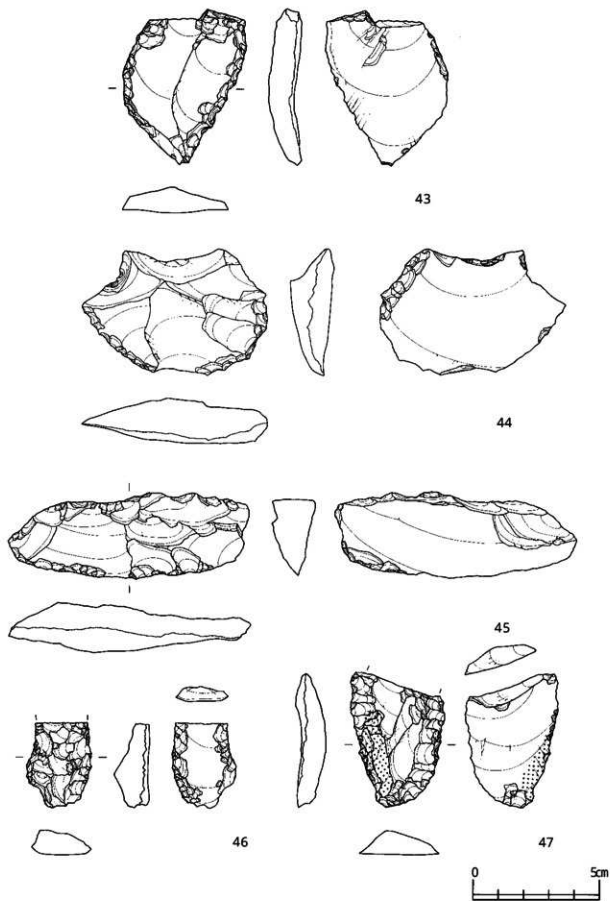
第 65 図 出土石器



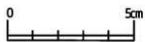
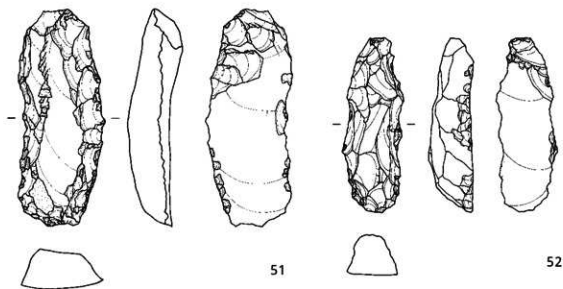
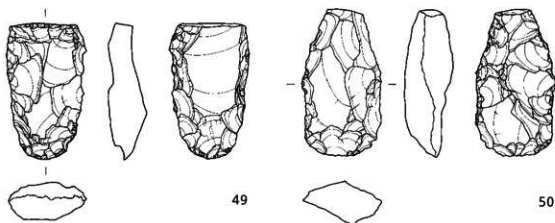
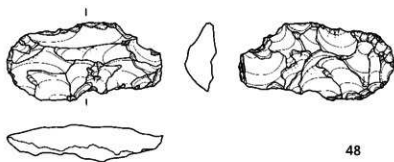
第64圖 出土石器



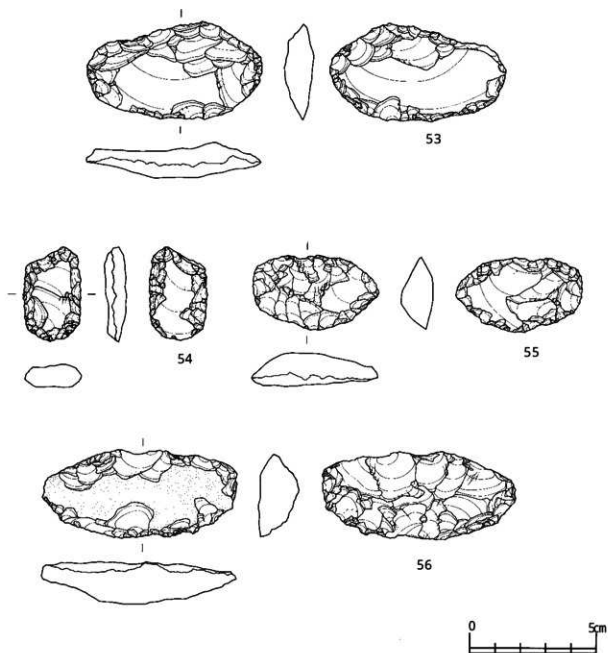
第 6 図 出土石器



第68圖 出土石器



第 69 図 出土石器



第70図 出土石器

ばず弧状の縁辺に礫面をそのまま残す62～64とがある。61～63の直線部にみられる層痕は部分的で、64の刃部は全体が擦られており幅広い。64には転用か併用かは不明であるが、平坦面に敲打痕がみられる。

J群 石錘（第70図 - 65）

扁平な自然礫を素材とした、いわゆる礫石錘である。1点のみ出土した。使用石材は安山岩である。長・短軸の両端、4か所を打ち欠いて抉り部を作出している。剥離はいずれも片面から施されている。

K群 敲磨類 (第72図 - 66~76, 第73図 - 77~80, 第74図 - 85, 86)

自然礫の稜または面に敲打痕、磨痕、凹み等の調整ないし使用の痕跡がみられるもの。使用痕の組み合わせにより細分した。17点出土した。使用石材は石英安山岩、安山岩が多く、他に珪質頁岩、流紋岩、溶結凝灰岩、泥岩がある。

類 単独で有するもの

a スリ 8点 (第72図 - 66~71, 第74図 - 85, 86)

66は扁平部2面を機能面としており、片面に溝状の摩滅がみられる。67~70は一側縁に磨痕がみられる。67, 68は扁平な小礫、69は三角柱状礫を用いており、70は礫破片である。71は扁平な礫の両側縁に磨痕がみられ、それを切る形の剥離がみられる。85は板状節理による扁平礫を利用している。86は他の磨石と形状をやや異にしており、小形で薄く断面形は開いたV字形を呈する。85・86のいずれにも煤状炭化物が付着している。

b タタキ 1点 (第72図 - 72)

やや厚みのある楕円礫を用いており、一側縁に敲打痕がみられる。

類 複合して有するもの

a スリ+タタキ 4点 (第72図 - 73~76)

扁平な楕円礫及び三角柱状礫を用いている。敲打痕は端部、側縁、扁平部に見られ多様性が認められるが、磨痕は主に側縁にみられる。76は機能面とする側縁からの剥離がみられる。

b タタキ+凹み 1点 (第73図 - 77)

扁平な礫を用いている。器面の中央部に集中して敲打痕と凹みがみられる。

c スリ+タタキ+凹み 3点 (第73図 - 78~80)

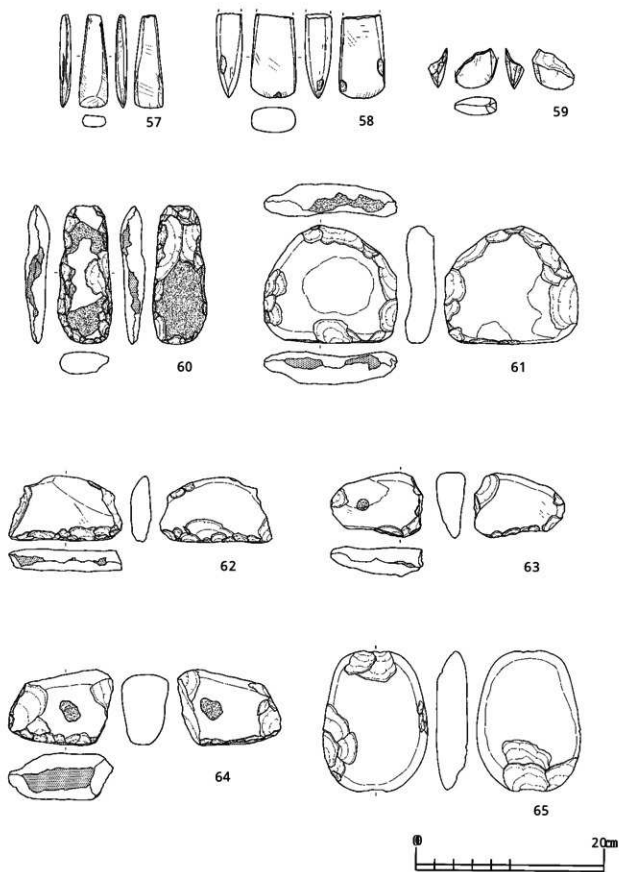
いずれも扁平な楕円礫を用いている。78は表面のみに凹みがみられ、一側縁に磨痕、両側縁の対応する位置に敲打痕がみられる。79, 80は器面の中軸線上で表裏の対応する位置に凹みがみられる他、扁平部の両面に磨痕がみられる。80の表面には凹みを切る形の溝状の摩滅がみられる。

L群 搬入礫 (第73図 - 81, 82)

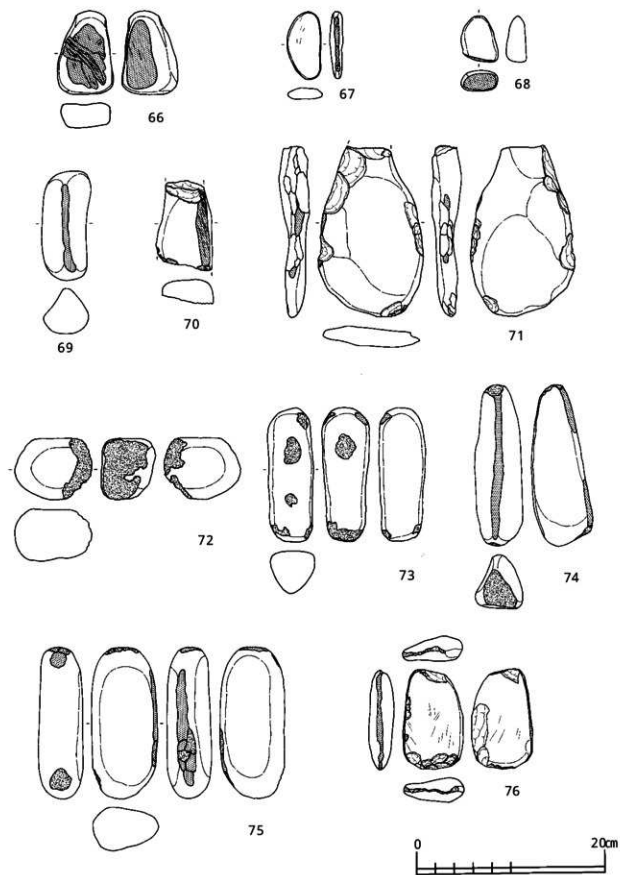
搬入された礫で、柱状節理による棒状の石英安山岩である。2点出土した。断面形は六角形を呈する。いずれの礫にも敲打痕、磨痕、凹み等の調整ないし使用の痕跡はみられない。

M群 台石・石皿 (第73図 - 83, 84)

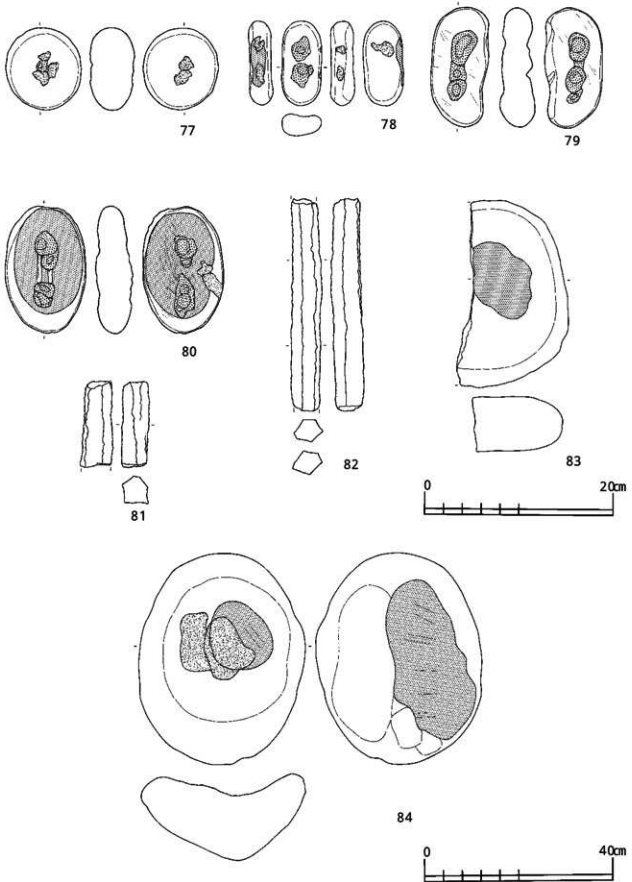
扁平・大型な礫を素材とし、器面に磨痕や敲打痕を残すものである。2点出土した。使用石材は石英安山岩、安山岩である。83は扁平な礫を利用した台石である。表面には磨痕がみられ、裏面には煤状の付着物が広範囲にみられる。84は大型の礫をそのまま利用した石皿で、両面を機能面としている。表面に磨りによる深く湾曲した凹部を有し、その上に敲打痕がみられる。裏面には磨りによる平坦面がみられる。



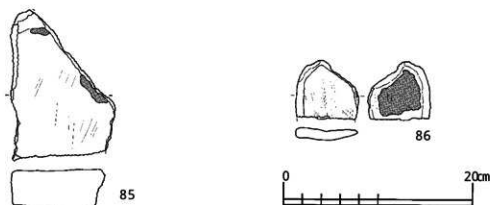
第7圖 出土石器



第 7 図 出土石器



第73図 出土石器



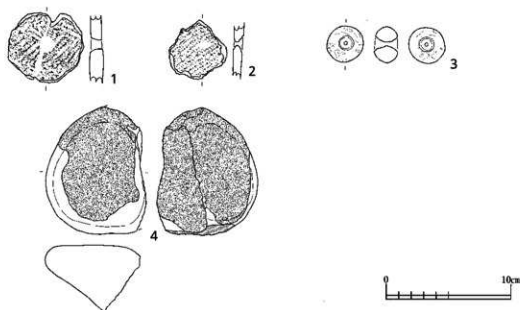
第 74 図 出土石器

3. 土製品

第 75 図 1 は、S K - 24 層土下層から出土した。56.5 × 61.1mm を測り、重さは 38g を量る。深鉢形土器の胴部片を隅丸方形に打ち欠き、中央部付近に 13.1mm の孔を穿っている。2 は、S K - 28・29 層土出土で、1 と同様深鉢形土器の胴部片を打ち欠いたものであるがやや不定形で 48.4 × 65.85mm を測る。重さ 12g を量る。中央部よりやや右寄りの部分に 13.6mm の孔を穿っている。

4. 石製品

第 75 図 3 は S K - 28・29 第 3 層から出土した有孔石製品である。30.29 × 18mm を測り、重さは 14g を量る。石質は凝灰岩である。算盤玉状に成形された後、両面から回転運動による擦り切りにより孔が穿たれており、孔部分には回転運動による擦痕が観察できる。4 は、石製品の範疇に属さないが S I - 08 ビット出土の被熱を受けた礫で、102 (805) 52mm を測り、重さは 464g を量る。外面にタール状付着物が観察されたのみで使用痕等は観察されなかった。



第 75 図 出土土製品・石製品

第 章 弥生時代

第1節 概要

本遺跡における弥生時代の資料は、土器のみで遺構やその他の遺物は確認されていない。

土器の出土状況は、平安時代の竪穴式住居跡の覆土ならびに遺構外出土が主体を占めており、住居跡出土のものは自然流土に含まれるものである。また、調査区280ラインから300ライン部分を中心に分布していることから、この周辺が往時の生活圏である可能性も想定される。しかし、本遺跡より西へ15km程離れた葛野(2)遺跡においても、こうした平安時代の住居跡の覆土から弥生時代の遺物が出土し(青森県教育委員会1999 第44集)、その出土状況に時間的逆転の現象がみられることから、より高所に生活圏を有していた可能性も考えられる。

第2節 出土遺物

1. 土器(第76図)

出土した土器は、時期的には弥生時代後期の念仏間式に相当するものである。いずれも破片資料で器種を特定することが困難であるため、ここでは文様について以下の7類に分類し、それぞれの特徴を述べる。

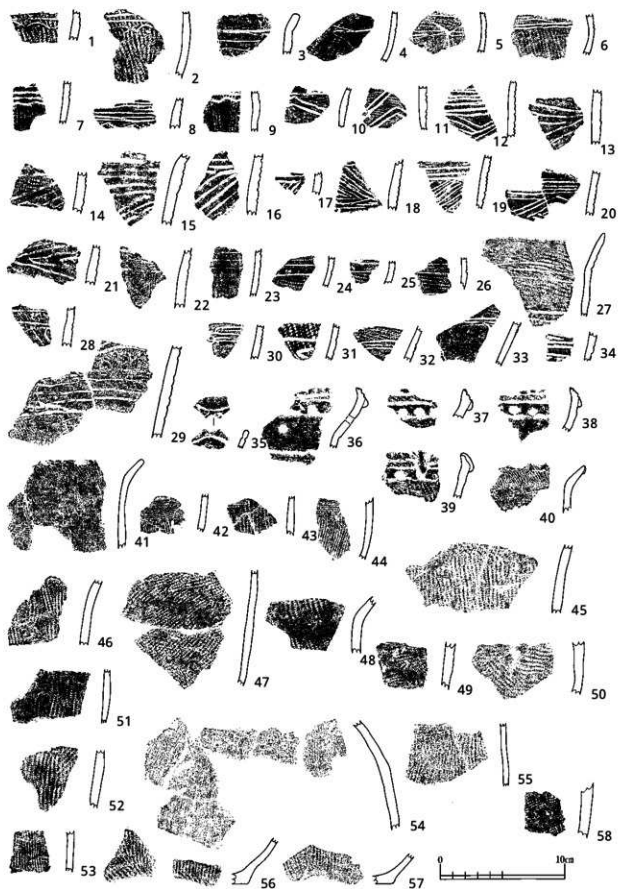
- 1類 沈線手法による連弧文を主体とするもの
- 2類 沈線手法による鋸歯状文を主体とするもの
- 3類 沈線手法による重山形文を主体とするもの
- 4類 沈線手法による重菱形文、重三角形文を主体とするもの
- 5類 その他の沈線手法によるもの
- 6類 口縁部に隆帯文が施されるもの
- 7類 縄文を主体とするもの

1類 沈線手法による連弧文を主体とするもの(第76図1・2)

2点とも同一個体とみられる。平行沈線文の直下に連弧文が施されており、弧の間隔は15mm前後で、地文として縦位のRL縄文が施されている。器種は襷形土器と推定される。

2類 沈線手法による鋸歯状文を主体とするもの(第76図3-9)

3と4は、鋸歯状文の間隔が30mm前後と長く、平行沈線文の直下に鋸歯状文が施されており、後者はRL縄文が施されている。5と6は、同一個体とみられ、平行沈線文の直下に鋸歯状文が施され、弧の間隔は15mm前後、上下の幅は3mm程度となっており平行沈線に近い。地文として縦位のRL縄文が施されているが、鋸歯状文直上の平行沈線文とさらに上段の平行沈線文の間には横位のRL縄文が充填されている。7-9は、いずれも平行沈線文の直下に鋸歯状文といえる。9の地文には、縦位のRLの帯縄文が施されている。器種は、3・5-9が襷形土器、4が壺形土器と推定される。



第 7 図 弥生土器

3類 沈線手法による重山形文を主体とするもの(第76図10~17)

10は、平行沈線文の直下に2重の山形文が施されている。11は、2重の山形文が2段に展開するもので、地文として斜位のRL縄文が施されている。12は、7条前後の平行沈線文の直下に3重の山形文が施されている。13~17は、平行沈線文の直下に2~4重の山形文が施されており、前二者には地文としてRL縄文が施されている。器種は、いずれも甕形土器と推定される。

4類 沈線手法による重菱形文、重三角形文を主体とするもの(第76図18~21)

18・19は、重菱形文の外側上方に重山形文が横位に展開するもので、その上部に平行沈線文が施されている。20は重三角形文と重菱形文が交互に展開するもので、その上部に平行沈線文が施されている。21は重三角形文が施されている。器種は、いずれも甕形土器と推定される。

5類 その他の沈線手法によるもの(第76図22~35)

いずれも文様の主体を把握することが難しいため、現存部での文様について記述する。

22・23は、3条の平行沈線文が施され、地文として縦位のRL縄文が施されている。24~26は横位のRLの帯縄文を2条の平行沈線文が挟むもので、前二者は2段構成となっている。27は、口縁部周辺と胴上半部に2段の平行沈線文が施され、地文として横位のRL縄文が施されている。28は、2条の平行沈線文直下に山形状やくの字状の沈線文が施されている。2条の平行沈線文間にはRL縄文が充填されている。29は、5条の平行沈線文と波状沈線文が施され、地文としてRL縄文が施されている。30・31は、変形工字文風の沈線文が施され、前者には横位のRL縄文、後者には縦位のRL縄文が施されている。32・33は、同一個体とみられ、2条の平行沈線文間に連続する短沈線が施され、その文様帯の直上には横位のRL縄文が施されている。34は、平行沈線文直下に列点文が施されている。35は、二又の突起が付される山形口縁に平行する沈線文が表裏両面に施されている。器種は、22~29が甕形土器、30~35が浅鉢形土器と推定される。

6類 口縁部に隆帯文が施されるもの(第76図36~40)

36~39は、同一個体とみられ、大きく外反する口頸部と内側に屈曲する口縁部との境に隆帯文が巡らされている。隆帯文は連続する押圧が加えられ、一部には口端部まで達する縦位の隆帯文が付されている。隆帯文の直上には2条の平行沈線文が施され、口端部には刻目が施されている。地文としてRL縄文が施されている。40は、外反する口縁部の上端に平行な隆帯文が施され、その直下に縦位のRL縄文が施されている。器種は、いずれも甕形土器である。

7類 縄文を主体とするもの(第76図41~58)

41~44は、胴部に横位の縄文による区画帯を有し、その直下に地文として縦位の縄文が施されるものである。縄文原体は44の区画帯部分(原体不明)を除きすべてRLである。45は、胴部に斜位のRL縄文による区画帯とその直下に縦位のRL縄文が施されている。46~57は、胴部や底部に地文として縦位あるいは斜位の縄文が施されるもので、49のLR縄文以外はすべてRL縄文である。58は、原体不明の縄文等の回転文を地文とするものである。器種は、54・55が壺形土器でほかは甕形土器と推定される。

報 告 書 抄 録

ふりがな	のびせいせきはくつちょうさほうこくしよ に ちようさがいはう。かんきょう。じょうもんじだい。やよいじだいへん							
書 名	野木遺跡発掘調査報告書 調査概要・環境・縄文時代・弥生時代編							
副 書 名								
巻 次								
シリーズ名	青森県埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第54巻 - 2							
編 著 者 名	木村淳一、設楽政健、児玉大成、松橋智佳子							
編 集 機 関	青森市教育委員会							
所 在 地	〒030-8555 青森県青森市中央一丁目22-5 TEL 017-734-1111							
発行年月日	西暦2001年3月21日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コ ー ド		北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
野 木	青森市大字 野木字山口	02201	210	40 50 38	140 45 15	19970512~ 19971121 19980420~ 19981106	69900	工業団地造成 (青森中核工業 団地造成工事) に伴う事前調査
所収遺跡名	種 別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
野 木	集落跡	縄文 弥生		竪穴住居跡 8軒 土坑 36基		縄文土器 弥生土器 石 器		

既刊埋蔵文化財関係報告書一覧

青森市の文化財 1	1962 『三内雲面遺跡調査概報』	＃	第38集	1998 『野木遺跡発掘調査報告書』
＃	2 1965 『四ツ石遺跡調査概報』	＃	第39集	1998 『市内遺跡詳細分布調査報告書』
＃	3 1967 『玉清水遺跡調査概報』	＃	第40集	1998 『小牧野遺跡発掘調査報告書』
＃	4 1970 『三内丸山遺跡調査概報』	＃	第41集	1998 『野木遺跡発掘調査概報』
＃	5 1971 『野木和遺跡調査報告書』	＃	第42集	1998 『熊沢遺跡発掘調査概報』
＃	6 1971 『玉清水 遺跡発掘調査報告書』	＃	第43集	1999 『市内遺跡詳細分布調査報告書』
＃	7 1971 『大浦遺跡調査報告書』	＃	第44集	1999 『蕨野(2)遺跡発掘調査報告書』
＃	8 1973 『孫内遺跡発掘調査報告書』	＃	第45集	1999 『小牧野遺跡発掘調査報告書』
	1979 『坐沢遺跡』	＃	第46集	1999 『新町野・野木遺跡発掘調査概報』
	1983 『四戸橋遺跡調査報告書』	＃	第47集	1999 『稲山遺跡発掘調査概報』
青森市の埋蔵文化財	1983 『山野鍾遺跡』	＃	第48集	2000 『熊沢遺跡発掘調査報告書』
＃	1985 『長森遺跡発掘調査報告書』	＃	第49集	2000 『稲山遺跡発掘調査概報』
＃	1986 『田茂木野遺跡発掘調査報告書』	＃	第50集	2000 『小牧野遺跡発掘調査報告書』
＃	1987 『横内城跡発掘調査報告書』	＃	第51集	2000 『桜峯(2)遺跡発掘調査報告書』
＃	1988 『三内丸山 遺跡発掘調査報告書』	＃	第52集	2000 『大矢沢野田(1)遺跡調査報告書』
青森市埋蔵文化財調査報告書		＃	第53集	2000 『市内遺跡発掘調査報告書』
＃	第16集 1991 『山吹(1)遺跡発掘調査報告書』	＃	第54集	1～6
＃	第17集 1992 『埋蔵文化財出土遺物調査報告書』		2001 『新町野遺跡発掘調査報告書』	
＃	第18集 1993 『三内丸山(2)遺跡発掘調査概報』		野木遺跡発掘調査報告書』	
＃	第19集 1993 『市内遺跡発掘調査報告書』			
＃	第20集 1993 『小牧野遺跡発掘調査概報』			
＃	第21集 1994 『市内遺跡詳細分布調査報告書』			
＃	第22集 1994 『小三内遺跡発掘調査報告書』			
＃	第23集 1994 『三内丸山(2) 小三内遺跡発掘調査報告書』			
＃	第24集 1995 『横内遺跡・横内(2)遺跡発掘調査報告書』			
＃	第25集 1995 『市内遺跡詳細分布調査報告書』			
＃	第26集 1995 『桜峯(2)遺跡発掘調査報告書』			
＃	第27集 1996 『桜峯(1)遺跡発掘調査概報』			
＃	第28集 1996 『三内丸山(2)遺跡発掘調査報告書』			
＃	第29集 1996 『市内遺跡詳細分布調査報告書』			
＃	第30集 1996 『小牧野遺跡発掘調査報告書』			
＃	第31集 1997 『市内遺跡詳細分布調査報告書』			
＃	第32集 1997 『桜峯(1)遺跡発掘調査概報』			
＃	第33集 1997 『新町野遺跡発掘調査報告書』			
＃	第34集 1997 『蕨野(2)遺跡発掘調査報告書』			
＃	第35集 1997 『小牧野遺跡発掘調査報告書』			
＃	第36集 1998 『桜峯(1)遺跡発掘調査報告書』			
＃	第37集 1998 『新町野遺跡発掘調査報告書』			

青森市埋蔵文化財調査報告書第54集 - 2

野木遺跡発掘調査報告書

(調査概要 環境 縄文時代 弥生時代編)

発行年月日 平成 13年 3月 21日

発 行 青森市教育委員会
〒030 8555 青森市中央一丁目22-5
TEL 017 734 1111

印 刷 第一印刷株式会社
〒038 0003 青森市石江字江渡3-1
TEL 017 782 2333

